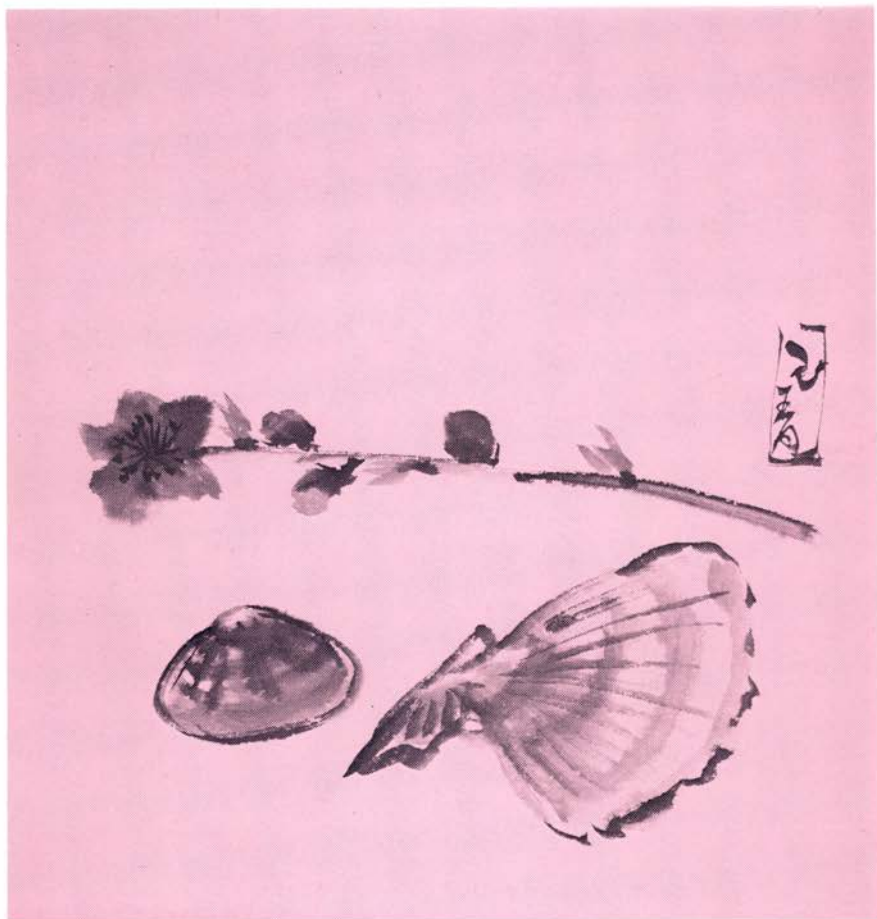


川柳塔

昭和五十八年三月二十五日
昭和五十八年四月一日発行（毎月一日発行）
印刷
創刊大正十三年 通卷 六七 一 号



日川協加盟

No. 671

四月号

川柳全集(12) (構造社出版)

『西尾棗作品集』

出版を祝う会

— 本社四月句会 —

日時 昭和58年4月7日(木) 夕6時
場 なにわ会館

大阪市天王寺区石ケ辻町19-12

地下鉄谷町9丁目・近鉄上本町下車東南

電話 06・772・1441番

☆花束贈呈・祝電披露

☆祝辞 日川協副理事長

はなし

兼題

「波」

「摘み草」

「お互い」

「旅人」

席題 二題 各題三句・締切7時
会費 二千元(作品集、記念品呈)

☆本間満津子さんの昭和五十七年度各地柳壇賞の受賞式を行います。

川柳塔社

◇日本図書館協会選定図書◇

『川柳全集』

第2集・6巻

- | | |
|-----|-------|
| 10巻 | 藤島茶六 |
| 11巻 | 野村圭佑 |
| 12巻 | 西尾棗 |
| 13巻 | 渡辺蓮夫 |
| 14巻 | 三條東洋樹 |
| 15巻 | 礧野いさむ |

・各巻共定価千五百円(送料二百円)

「川柳全集」第1集・9巻

村田 周魚・麻生 路郎・西島 ○丸
岸本 水府・川上三太郎・西田 当百
井上剣花坊・相元 紋太・前田 雀郎

(定価・各巻共千円)

構造社出版株式会社

〒111 東京都千代田区西神田二丁目7-12
電話 03・263・2811
振替 東京 9131911

泰山の孔子／西尾 棗

今月も論語を読む。

子曰く、吾れ十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑わず。五十にして天命を知る。六十にして耳順^{みこと}う。七十にして心の欲する所に従えども矩^{かね}も踰^こえず。

有名な為政篇の一節である。

孔子は、泰山の頂に立つて多くの弟子にとりまかれていたが、ひとわたり皆を見廻してからゆくりと口をきった。

「泰山に登るのも、之が最後じゃ……。誠をもつて語られた言葉は、いつかは生きてくる。それは泰山の頂に落ちた雨滴が地にしみて、ついに大海に注ぐように」と言った。

そして暫くして

「わしが初めて学問に志した時には既に十五歳になっていた……実はそれまで、師について何かと教えを受けていたが、学問の尊さを知り、自らを求めて学ぼうとする熱意を持ち始めたのは十五歳の時じや。恥かしい話じやがそれまでは、夢うつつて何の自覚もなく教えられるままに、ただもう物真似をしていたのに過ぎなかった。物真似

は学問でない。誠の学問は自ら求めて勉め勵むところに始まるのじや」と孔子はそう言つて、空を眺めた。空は翡翠のように、すき透つて果てしなく蒼い。ふと孔子の臉に光るものがあつた。それは彼の愛弟子の顔回と子路の二人の顔が見えないからであつた。顔回は病気で、子路は衛の内乱で斃れて既にこの世に居なかつた。

自分は、ここまで読んでくると、自分の川柳の学問はどうかと思つた。正に路郎先生の又故人や先輩の物真似でしかなかつたのではないかと思つと愕然とした。そして「吾れ七十余にして

川柳に志す」と思はずつぶやいた。このたび東京の構造社出版株式会社の企画で、川柳全集『西尾棗』を刊行されたが、之が七十有余にして川柳に志すという機会と一致したことはまことに面白い次第である。

川柳の一から始める七十余

森田たまの随筆を借りたままである

暖房のようきく部屋の遊びごと

大川端柳の風で暮れてゆく

もの書きの妻叱られて叱られて

ビタミン剤のんで生きてる老夫婦

座右の句

墓の前もとの子一人母一人

(薫風)

私の句

巣立ちした子らへ聞かせる母の笛

妹尾春江

川柳塔 四月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

泰山の孔子

西尾 栞 (1)

雉子郎「川柳語録」

香川 醉々 (2)

川柳塔(同人吟)

西尾 栞選 (4)

自選集

東野 大八 (29)

■川柳太平記(59)《川柳の群像》西原柳雨

黒川 紫香選 (32)

■連載 誹風柳多留廿六篇研究(十丁)

香川 醉々 (34)

水煙抄

宮園 射月芳 (36)

秀句鑑賞「同人吟」

水煙抄 (57)

本田恵二郎自選百句

宮園 射月芳 (63)

小出智子自選百句

橋高 薫風選 (52)

愛染帖

西尾 栞 (58)

第六回全日本川柳大会参加と十日の旅(九)

西尾 栞 (58)

雉子郎「川柳語録」

香川 醉々

雉子郎は文豪吉川英治の雅号であることはすべての川柳人はご承知のことであろう。

風が出て来たよと下駄をはいた時 雉子郎

紙人形燃しぬ煙草をつけた燐寸

一人喰う膳にぼつんと紅生薑

抒情溢れる作品も多いのである。

では雉子郎・川柳語録の一部を筆者なりに集約してみよう。

☆川柳と人生☆

川柳を知る人は、知らぬ人より、豊かな生活味を知る。川柳は人のためや世の中のため

に句を作るものではない。どこまでも自分のためである。それがつまるところ、人間の社

会組織や生活に多くの味量や潤いを与え、人間仲間の相互の幸福を間接にもたらす。川柳

作家は自分のためであればよい。それは社会的に働きかけているからである。

☆川柳と創作欲☆

人は生れながらに本能的な創作欲をもつ。川柳を体得した人が、忽ち、その創作欲を、

作句に進らして来るのは必然である。それは

浜田久米雄氏を悼む……………(60)

■横山一声・行吉照路・本田恵一朗・黒川紫香・正本水客

アメリカを覗く(7)……………山本規不風……………(64)

川柳のしおり「川柳全集」西尾葉／書評……………橘高薫風……………(66)

△句集紹介／羽原静歩「足跡」……………高杉鬼遊……………(72)

「訛」……………神谷凡九郎選……………(68)

一路集「絆」……………津守柳伸選……………(68)

「燃える」……………藤村亜成選……………(69)

初歩教室……………本田恵二朗……………(70)

柳界展望……………(67)

本社三月中旬……………(73)

各地柳壇(佳句地10選／山根いつを選)……………(77)

57年度各地柳壇賞決る……………(78)

一分間の柳論／新谷笑痴 76 雅号ぶつちやけはなし／原 独仙 83

編集後記……………薫風・酔々・鬼遊・史好……………(87)

座右の句

笑顔笑顔笑顔 真ン中にお姫さま (文 術)

私の句

家ひとつ持てず島買う夢を見る 田 中 淑 子

人間として生涯中の得がたいものに巡り合ったのだ。私はこうして川柳を作るようになった。いや、作らずにいられなくなった。俳句を体験した人は、ここで創作の「生みの苦しみ」と「生みの喜び」を同時に味う。川柳において、誰が一番幸福を得るかといえば、もつとも句の「生みの苦しみ」を舐める人に与えられる。

☆句の魂☆

魂のある句とは、作家のほんとうから出た心、感銘などが生きたまま、表れた句を言う物の観方、描き方、批判すべてに。

古句の模倣や、他人の作爲に似せて作った句には魂はない。どこまでも自分の「生みの力」で、いきみ出した句でなければならぬ。芭蕉の句、柳樽の名句のような魂の吹っ込まれた句の妙味に、いまにまで私達は恵まれることができる。その力はみんなにもあるのだ。それに眼ぎましたものは、やがて達する。

☆川柳は芸術か☆

川柳は芸術と言えない。非芸術と言えないものだ。川柳を芸術とは、私には言えない。けれど、多くの句の中には、これこそ立派な芸術品だと断定できる魂のある句を実際に見ている。しばしば見る。川柳を非芸術だとは私にはなお言えない。多くの非芸術の句は、たまたま現われる魂のある芸術的な一句に、川柳の体面を保たれているのである。



西尾 葉選

八尾市 宮西弥生

雨だれのリズムに女鶴を折る
雨の日は雨の絵になる高瀬川
バレンタイン人妻仮面を脱ぎました
母の忌がすぎて深くなる迷い
暖房の部屋でうっかりだまされる
貸す耳はもっててひとりで生きている
貧しさは明日にまかそう朧月

米子市 八木千代

鐘を撞くたった一つの願いごと
旅支度小さな嘘を子に残す
八分音符徹子の部屋の明るさよ
聞いて欲しいこと一つある落椿
最初から覚悟はできていた椿
落椿言っておきたいことがある
有縁のまん中に椿の景がある

松原市 谷垣史好

世の中を甘く見るなよべアルルク
車椅子目につくものを買ったがり
四月馬鹿に非ず無人工場です
ホッチキス女はマゾになりたがる
愛は淫らナメクジの這うた跡
クリープを入れて敵意をごまかすな
げに妻という名の不沈空母かな

岸和田市 高橋操子

サラ金へ抵抗主婦の座がくずれ
あの世から帰った様な話する
ゲートルのつかれ夫の遺留品
酒ぐせの悪さ不信が尚つものり
母にならサラサラ書けるボールペン
許されぬ況して娘だから孫だから

大阪市 小出智子

老母のもつ静けさにまだ追いつけぬ
親切なひとがどこにも一人いる

島根県 西村 早苗

あたたかい炬燵の中の無神論
週刊誌ぐらゐは読んでもよまいでも
日めくりの一枚からは逃げられぬ
肩の荷を下ろすと桜が咲きはじめ

桜井市 岩 本 雀踊子

貴方には過ぎた女房という女難
吸がらの口紅少し不貞めく
風になる男をつなぐ糸車

奈良県 香 川 酔々

小指の爪伸ばして男無職なり
七十を働く私の帽子掛
無の中に仕合せがある夫婦

鳥取県 鈴 木 村諷子

色褪せた勲八等を出して見る
戦争は義足の軋む音に聞け
あまたある釘の中なる棺の釘
この時計五秒遅れる一日に
うまい飯柳の枝を折った箸
飛び石のしまいのサメに剥かれまい

八尾市 高 杉 鬼 遊

長男にまだ嫁がない春の街
満開のさくら総理へ散り急ぐ
ロボットが宴会をする花の下
ライターは値下げ煙草が値上げる
世界的視野でストーブ消しました

本棚を背なにまだまだ死ねません
節穴をふつと発見した寒さ
雨だれのリズムが狂う南風
ふんいきのどきくさ女の手にふれる
孤独には慣れたつもりがなおさびし
姑の位置鉄びんのたぎる音
顔バックテレビ爆笑さなかにて
天皇のご恩は知らぬ平和です
警官が非番で野菜買いにいく
過去帳の中に仕舞った土の唄
餓鬼大将四月の山を馳け登る
贗者の期待いつかは本物に
単純な男福耳持っている
風雪に耐えて愛を支え合う
首よこに振るときふつと出る詠り
世渡りの百面相の背が淋し
訃を聞いてからでは遅い褒め言葉
餅よりもカレーが好きな世代の差
心まで着せる思いで編む毛糸
暮し詠む貧しき父の詩ごころ
味方にも敵にもなる絆かな
過密都市枯葉に還る土がない

大阪市 江 城 修 史

米子市 小 西 雄々

執念の命は地獄を見た命

齡の差をしみじみ思う夫婦坂

どたんばで味方と金に裏切られ

竹原市 森井 菁居

針山の向こうに目ざす虹がある

熟年よ聞こえは良いが坂ばかり

聞こえない振りをするのもしんどかり

仇打ってそれから良く寝つかれぬ

頂上に次のクイズが埋めてある

二女ロードレース

四番でよし根性をほめてやる

島根県 堀江 正朗

見えていた頃がちらちら眠られぬ

つまりけば笑われるのに先に立ち

手さぐりの反抗ほんのこれっぽち

手に触れるだけでは追えぬ差を感じ

幸せと思えば見えぬ目も大事

てのひらで動いて見せる松葉ガニ

島根県 堀江 芳子

いい寝顔過保護の夫へ悔いを積む

待っている耳へからころ鳴らす下駄

白杖さんもおやすみなさい夕暮れる

洗濯を乾さぬ日ご近所案じさせ

心にも広くなびく春の雲

失明の夫には使えぬ黙秘権

富田林市 岩田 美代

私にすぎた今日なり白水仙

春が来る安堵感あり桜もち

福耳の財布は信じぬ事にする

妥協点見つからぬ二ん月の冷

ホカホカ弁当真面目な男待っている

それぞれに風刺溜めてるほんの窪

和歌山市 福本 英子

ゆび切りの指が突然疼きだす

向いあう席が空いてる置炬燵

あなたと私踏切りの無い線路

砂文字の秘密を攫う桜貝

加太の浦雛と別れの冷えを抱く

節分に追われた鬼よ来て遊べ

伊丹市 榎谷 寿馬

いつかは雨に逢う憲法という晴着

日本男児が一人も居ないのか不況

節分の豆で生きてる鬼家族

猪の置物瘦せて来る二月

殴られた日から教師を自覚する

マラソンとゴルフにだけはある国旗

米子市 林 瑞枝

本が無いと歩けぬ私案山子だな

表紙絵に軽いめまいの新刊書

屑籠の待ってる詩など書いて見る

物を書く人が残したみかん山

デッサンへ耳を画かない意図がある

好きな人と堕ちた椿へ涅槃雪

大阪市 清水健司

髪切つてわけは何もないと言う
遠い人をいちずに想う寒卵
猪おどし存在感がうすれゆく

明日もまた同じ速さの置時計
明日まで待つてほしいと頼む鬼

鳥取県 川崎秋女

お隣りがもめているので耳すます

フトコロが寒い休みの掘こたつ

ボーナスも勲章もない電気のこと

我ながら下手な嘘だと思ふ朝

堺市 藤井一二三

梅だよりときめく夢を持つてくる

春はもうそこに大声で豆を撒く

釘を打つ背を北風に狙われる

追徴五億利子の勘定もしたくなり

鉛筆の芯失らせている叛意

カネ持つて来いと汚職も厚かまし

今治市 越智一水

仲人は別居をだしに丸め込み

共稼ぎ月の光へ米を研ぎ

風見鶏村にもやっぱりひとりいた

着ぶくれて貧しい心抜け切らず

肩もんでもまれて夫婦明日へ生き

おだやかな心になれと春の雨

大阪市 村上田鶴子

春愁や愛にかたむくやじろべえ

雪もよいりんごサクサク鳴るばかり

釣糸の先に沈めてある闘志

人生の極致に触れた夢に遇う
クラス会湯気の向うの瞳があわて
逃げて見るそんな演技の愛もある
雪が降ると民話の里から小人くる
旧暦へ忠実日本海へ雪が降る
気まぐれな雪が約束反故にする

竹原市 小島蘭幸

悪人が自信をつけた恐ろしさ
古い男の古い話に熱くなる
片思い熟れきった柿まだ落ちぬ
本音吐く地獄見て来た男の眼
絵本読む三歳半にある自信
妻を見ている子の眼差しの厳しさよ

和歌山市 若宮武雄

聖僧の計 風は動かず梅薫る

“春の小川”の歌で涙をせき止める

ロボットの律義を誰も真似られぬ

白足袋の心 畳の縁踏まず

逃げ腰を遠慮ぶかいと見ちがえて

茶粥するするエンゲル係数立派です

雨の午後わたしの時刻表を持つ
大阪市 西出楓楽

切口上の女が歩く冬の街

端的に言えば可愛いのは自分

胴長な男に安心感を持つ

桜咲くうんと優しくなりましょう

忠実な影で少うしにくらしい

大阪市

中川滋雀

ふれ合いの窓が呼んでる開けようよ

きんつばを二つに午後の老夫婦

一病息災今朝の鏡になぐさめる

自問自答弱さがからみついてくる

灯油値下げ家計は真赤に燃えている

許す氣の笑顔が目尻からこぼれ

島根県

小砂白汀

斬り捨てた大根の首花をつけ

サルビアへ真赤な嘘を言いふくめ

何よりもご馳走割箸柎目でず

遺すもの無いから落書きしておこか

色褪せてからの命をどう生きる

嘘すこし混ぜると程よい味になり

寝屋川市

江口度

海ゆかば玉をはじいている平和

人の和へ風化していく核ボタン

消しゴムを持たぬ男にある自信

豆食べるいつまでつづく数え唄

夕焼けが消えると星の子守唄

神様の時刻表から逃げられぬ

まごころよお前どうして逃げたがる
伴せが溢れ仏を見失う

春風に並木は自信取り戻す

愛しさを言えば四月の嘘になる

仁王も羅漢も微笑み給う春の景

人間の欲を見飽きて桜散る

働ける幸へ疑問を持つおんな

わたしだけきれいに老いる花言葉

三日見ぬ桜は恋の果し状

満ち足りた朝の化粧は控えめに

かげろうの揺れは見せない寒椿

妬心まだ男と女の物語り

しがらみが昨日と同じ僕にする

快方へ向い仮面がほしくなる

不用意な言葉が罪を置いてゆく

下積みの石の叫びに耳を貸す

食べすぎをふとわびしいなと思う

横文字が氾濫 慎しみ消えてゆく

善悪をきめる鐘なら強く打つ

きれいな海返せと蟹のひとりごと

子の船が着いて小島の灯がゆれる

横着も明日があるから出来るのさ

米子市

田中亜弥

八尾市

大路美幸

津守柳伸

牛尾緑良

意地張って溝の深さを思い知る
若さまだあって背中骨が鳴り

八尾市

飯田悦郎

騙されて黙って居れぬ月曜日

パン買いに出掛けて千円負けてくる

雑談へ笑い上手が吸い込まれ

反抗の種を秘めてるほうせん花

妥協せぬ側の拍手の中にいる

止り木の一人になつてから冴える

桜井市

河合茂雄

乗る時は覗いて呉れぬ定期券

満六十残る人生まだ青い

馬鹿らしい話へ耳がついていく

囑託の道ロボットに塞がれる

引算を忘れて積んでいく預金

ロボットの耳に聞えぬ労働歌

和歌山市

松原寿子

かがり縫いほどの絆に棲む人よ

逢うてはならぬ風の行方に距離がある

傾いてしまう心へ波しぶき

噂ひとつバストラインに止めておく

偲ぶ日はメランコリーな落虎笛

ひたすらに胸のひとりよ花吹雪

呉市

林野甦光

京おんなの素足に挑む風も春

CM機トシボ返りがして見たく

手話の指ときに華麗な輪をつくり

二人の幼女に匙はお喋りで

愛された記憶に赤字続く日日

抜擢のポストに座して四面楚歌

岸和田市

植山武助

アベックで行く老妻のペンダント

来年が又来年になる雪まつり

男持つ買物籠のワンカップ

サンマ焼く七輪がある老夫婦

色一つ変えて見たいと思う虹

老夫婦今日はピフテキ食べてみる

岸和田市

清野こう

里からの電話にのった国訛り

国訛りそれから旅のつれになり

霜あびた冬葉の味をほめる膳

暖冬のニュースとなった狂い咲き

先生の鬼へ園児の豆つぶて

ペンだこはかなしい涙知っている

和歌山市

坂部紀久子

落ちる日を知るや知らずや寒椿

自我へ釘打ち込む勇気ないままに

建て前の会話へ北風吹きぬける

共稼ぎ我武者羅に回う洗濯機

気が合って夜中にお茶漬けする二人

他人の罪覗くテレビの視聴率

岡山県

嘉数兆代賀

七十歳ときに聞えぬ耳ももつ

決意もう出来てハイハイ言ってます

手の鳴る方へついていくしかない庶民

尺取り虫の歩巾を崩す春風

馬鹿になろうバカになろうと米をとぐ

一と電車朝を遅れたしじみ汁

コマーシャル何で裸が出てくるの

年寄りの肩に喰い込む村の守り

背水を敷いて誘いの歩が動き

土に還る命を深く深く埋め

狭量を熱血漢とおだてられ

やっぱりは性善説に加担する

最終コースで並ぶ女には勝てぬ

家族数で割って余らす妻の腕

トボトボもカツカツカツも彼岸まで

宝塚市

傍島静馬

狭心症ムカーツとなつても飲まれない

一張羅着ると女は食べ残す

グルーブの飲み手が禁酒の仕掛人

補聴器にいよいよ募る地獄耳

国鉄のお荷物ローカル線が好き

奈良県

明日旅に出る散髪をしに出かけ

買出しに来たよな旅の土産物

兵庫県 遠山可住

大阪市 川口弘生

傍島静馬

奈良県 宮口笛生

初心者マーク母に心配一つふえ

お社と隣り合せで不信心

亡母居たら相談位出来るのに

成人式娘ますます遠ざかる

掘炬燵二度の勤めはせぬつもり

精密機械のような人だった悩軟化

運動の一つ嬉々として掃除

いずれわが身定年退職者を送る

悪女とて奇麗な涙は持っている

温りを伝え合うて母子家庭

初孫の這い這いも見ず祖母は逝き

栄光の座に転落が待っている

浮草は浮草なりの夢を追

倉敷市

優越感消えるとゼロになる男

ほろ酔いの目へ家計簿の赤を見せ

上司には負けろと碁石が注意する

愛着のがらくた部屋を占拠する

錆止めの要る歯車になりにけり

大阪府

鏡ふく今日は娘の見合いです

日本のネギ畠ですゴッホさん

ひな人形二人仲よく売残り

死亡診断冷めたい漢字淋しい字

倉敷市 野田素身郎

倉敷市 藤井春日

倉敷市 稲田豊作

大阪府 西森花村

寒明けてから売れてます風邪薬

大阪市 河井 庸 佑

送り出し迎えてせわし春の門

難題が解けた心の隙をつく

案じてた程でなかった会議室

実力をちょっぴり見せてひっこめる

読み切れず不覚をとった自我を悔い

藤井寺市 児 島 与呂志

春走る自転車女の夢がある

妻病んでそれからハミングなどは無い

だんだんと老いに負けまい朝を起き

依怙地持つ女は嫁ぐことは無い

直角に曲ると意地が捨てられる

和歌山市 西 山 幸

冗談も少しは言えて春になる

せめてもの奢り古々米など研がぬ

そしてまた飽きずに宝くじを買う

女ひとりという退屈な梓の中

試しごころへ予期した答返らない

下関市 国 弘 半休門

底辺の即席料理の日がつづく

老人の病気に医者が込みすぎる

人間に丸みが出来て腹が出る

紋になどかわりのない貸衣裳

年頃の嫉け言葉に気をつける

松原市 玉 置 重 人

浮草の主張は風にさからわす

赤旗の好きな先生がいて困り

漬物と茶漬けの闘志は侮れぬ

かばい合う夫婦の歩巾揃うてる

おやどうかしたのか妻の喋らぬ日

兵庫県 河 原 みのる

地震より空から恐い艦になり

共同体どころか真先やられそう

両国がよいドンで押すという

線一本あつさり死なせる住所録

自殺者の意はたから知るものか

松山市 谷 真 風

息子には弱気の父を見せずおく

肥満鳩そこらあたりをちよいと飛び

春はもうこの道端のイヌフグリ

バランスが大事ですよと弥次郎兵衛

病室の隅で誕生日の祈り

神戸市 仲 どんたく

能面となり安住の棺に臥す

うしろ手へ境内の鳩添うて来る

も一度の時巻き返えす円舞曲

成人の娘に二度あるお正月

しみじみと八十路に枯れし地唄舞

倉敷市 小 幡 里 風

へヤースタイルまたかえている

箸の先つついて聞いた裏話

情ない自分を叱るもの忘れ
唸るものみんな唸らせ日曜日
年男らしい気炎でつつくボタン鍋

平田市 久家 代仕男

唇は減法寒し町議選

一票に畦ふみ越えて握手攻め
福耳をさげて耳垢ばかりため
玉霞ためらいがちな頬を打つ
寒の水和紙のころを漉きあげる

京都市 都倉 求芽

長女結婚

月蝕を娘と物干で見る無言
今日の日になっても子離れできぬまま
親子して最後の買物茜雲
婚儀とは掌の珠を盗るマジックショー
花束贈呈涙の親のさらし首

倉吉市 奥谷 弘朗

勅題の島柄茶碗も一つ買い
この不況せめて心の豊かさで
堪能な口に話をぎゅうじられ
他人の娘育てた絆にある重さ
毎日を妻の笑顔に励まされ

岡山県 白岩 文衛

毎日が日曜日曜さびしけれ
灯を消して夫婦子のことなど話す
南天にひよどり今年まだ来ない

またひとり人の計を聞く椿掃く
新聞に腹立て寒き膝がしら

岡山市 時末 一灯

欠航日島はだんだん貝になる
台風一過島の訛りが弾みだし
自動振替またカタカナが持つて去に
親として突放すこと難かしき
笑うしかない又しても夢だった

大田市 藤田 軒太楼

奇麗ごと並べて自我にこもる古い
各論に遠く総論の空回り
善悪はさておき合点だけは打ち
せめてもの平和雛壇飾りつけ
難聴の耳にも初春の音たしか

香川県 岡田 拳法

失えば自由尊しポーランド
アフガンの砂憎しみの血をすすり
赤信号みんなで渡ろと中曽根さん
踏み出してみるとタブーはあほくさい
毅然たる国は恫喝せぬソ連

堺市 高橋 千万子

鬼は外無念打たれる寒椿
春近しはみ出している予定表
ライバルが来て赤札を買いそこね
行きとどく庭に白梅楚々と咲き
花の香がかえって病人あせらせる

堺市 大道 美乙女

幸福へ進むリズムを崩さない
博多帯恋のチャンスも期待する

いつのまにか夫好みの帯の位置
こりもせずまただまされている小指
切り札を胸にたたんだ打開策

竹原市 時 広 一 路

肩書に感じるものがない気儘

絵馬と絵馬どちらもライバルだと知らぬ

自画像の眼鏡を変えてやろうかな

北風がいきむと鉄塔唸り出す

貝殻に詩が湧かない冬の海

笠岡市 松 本 忠 三

ご意見は無用ですよのオブ参加

事務机椿の首が落ちそうな

割当てを済ました途端私にも

女同士結構軒をかくらしい

片腕がこんな所でさばって居

富田林市 和 田 維 久 子

ゼッケンに母の涙も滲みている

掘り炬燵余生埋める詩となり

庭の石一つ一つにある定め

知らぬ振りするも女のテクニク

歯痛の元凶は税務署の封書かも

柳井市 弘 津 柳 慶

正月を山の温泉に寝そべって

正月の肩たたく孫肩こらす孫
誤解まだ解けず妻は無言なり

宿酔の水に酔狂を反省し

ゲートボールに誘いがかかる年になり

京都市 松 川 杜 的

シーサイドホテル海の見えない部屋もあり

二ヶ月の嵯峨野にタンポポある憩い

冬の昼旅の大師の笠に鳩

コハゼはめるポーズに明治生きている

墨の香に一時心ととのえる

京都市 山 本 規 不 風

親と子と二代命名の祝い酒

雪祭り済み春遠き時計台

意地少し見せてはなやぐ寡婦の春

勝たせとく父で眠ってばかりいる

嫌われているなと思う句に出会う

鳥取市 小 林 由 多 香

ハーモニカいくさの歌にふれてみる

大寒の任地ひとりの米をとぐ

一回の失敗師の目あたたかい

漁火の一つにくらし支えられ

名峰を指呼に素直さとりもどし

岡山市 川 端 柳 子

風車男にひとり言多し

涙一滴ぐいぐいわたしを引きつける

明治の魅力この家に一言居士ありて

人間と名付けて神に生かされる
希望という薬を足して若返り

奈良市 森田 カズエ

笛吹きの名人ばかりいる会議
悪友の助言ピンチを切り抜ける
泥棒の年季宝石撰り分ける
城下町もと花街の連子窓
粕汁を食べて陽気な妻の顔

奈良県 村上 春巳

化粧水たっぷり塗った満足感
頼りない夫婦に二人目出来るらし
生真面目で歯の浮く世辞を聞いてやる
生きてれば百歳母の五十年
父の日も母の日もなく猫と老け

豊中市 安藤 寿美子

戸惑いが少し歩幅をせまくする
女六十肩の力をぬいてみる
女帝より女中の方が性に合い
姥さかり嫁より赤いセーター着る
水道のポタポタポタと春寒し

葛屋川市 宮尾 あいき

手作りの女の猪は流し目に
表札に亡夫の名前が生きている
バレンタインチョコレートあげる御仏壇
電話口息子の嫁とまちがわれ
亡子よゆるせ今尚生きる母愚か

東大阪市 竹中 綾珠

酔いつぶれた夫を迎えに行った寒
水子地藏拜んで過去を悔いている
お説教聞いた時だけ善女なり
スクラムに異端者一人まぎれてた
美しい敬語が減ってく淋しさよ

和泉市 西岡 洛醉

ふところに抱かれふる里母に似る
椿散る朝定年の歴史繰る
レモンスカッシュの恋ストローで吸い上げる
旅の窓日本のよき酒に汲む
あかね雲生けとし寡婦の背を染める

東大阪市 崎山 美子

食べる数聞いて雑煮の餅をやく
鍋料理囲む心ない垣根
手拍子に心もとける鍋料理
寒風へ今夜は鍋と市場籠
意にそわぬ道なら猛進などしない

大阪市 那須 鎮彦

ラグビーボールの妻をしつかり抱き止める
福寿草小さな母の温み持つ
大吉がそろりそろりと行けと言う
ひらいてる門は堂々と見える
親に意地通した証しくすり指

鳥取県 清水 一保

一口毎酒が己れを問い詰める

化かすよりいいと化かされ居る狐足跡が潔く尊い雪の道

人間を許して罪が生き続け

路傍の石となつて男の血がたぎる

吹田市

藤村 女

ランドセル花のトンネル手をつなぎ

ウインドーを覗けば一足早い春

ひやかした価で買わされたシクラメン

風光り心もはずむ髪の出来

強がりの仮面とりたい泣きぼくろ

新宮市

川上 水

卑怯な手知らぬ子供が負けてくる

他人様を信じられない鍵の束

子宝と言うにはつらい通知表

材料から文句出そうな味が出来

保証欄吉相印ににらまれる

守口市

羽原 歩

満開の桜へシャッター忘れてる

さびしければマドンナの鈴を振る

零並ぶ宝石店の寒々と

掌をあわす浄土を今日も疑わず

悪人の手が絵本のページ操る

大阪市

天正 梢

「世間なみの女でよか」と甘えてる

答などいらぬ楽しく跳んでいる

古人の歩幅飛び石は大またで

ジルバに疲れて青い酒に酔い
会者定離やさしい雨に打たれてる

兵庫県

辻 文平

再婚へこれが最後の綱渡り

美しい言葉でせまる早春譜

山彦に大きく叱られている孤独

あの日から女を捨てた妻になる

急がねば敵に歩幅を合される

大阪市

北 勝美

夢二展大正琴が喋らせる

藪椿余寒を語る猫柳

四季報に肩を張り出す仮名社名

御苦労さんそんな言葉にある素直

老いの背に姿勢正している鏡

鳥取県

森田 布堂

還暦はまだ青春の長寿国

歩道橋の真下救急車がうなり

藻の花が髑髏に咲いて海の底

くつついて別れるだけの週刊誌

折詰の二合の瓶にある不満

東大阪市

斉藤 三十四

ビニールで育った野菜に慣らされる

魂胆は静かにタバコの輪を消しぬ

市場籠夫の好きなものばかり

七光り過保護の影を脱ぎきれず

旅の湯に老人会の黒田節

出雲市

原 独 仙

火種燃え拵がり施す術もなく
養老院カッブル誕生とは愉快
里土産息切れるほど背負う欲
片想いの女であつた死亡記事
末っ娘にばかり縁談ままならず

美祿市

安平次 弘 道

ライバルからベースを奪う射程距離
方便の嘘を見逃す聞き上手
我田引水だんだん視野が狭くなる
言訳が妻の嫉妬に火をつける
遺伝子を組替え神をあわてさせ

岡山県

直 原 七面山

離婚して女は春を取り戻し
見えぬ目に人の心がよく写り
山には山海には海の詩があり
パパ孤独ママとぼくとに背かれて
絵日記のママはエブロンいつも掛け

諫早市

原 田 明 春

くされ縁などと女房もそう思い
ゼンマイを巻く女房がいて朝が出る
七五三親の見栄の張りどころ
婚姻届け一生まかせの印を押し
寝返ればとなりに妻の居て安堵

松江市

恒 松 町 紅

物惜しむ父に息子の捨ててる主義

トランプでやっぱり孫に負けてやり
よく喋る女がつけたイヤリング
妻入院独りと知った市場籠
お人好しで話下手なも親ゆずり

松江市

柳 楽 鶴 丸

我が家の怪獣炬燵でフテ寝する
中性化した若者の高級車
止り木の話題不沈空母ロッキード
今年又チョココレートの数がふえ
自慢のチョココレート妻へのみやげ

松江市

小 林 孤呂二

NHKの字幕に誤りだってある
千客万来みんなが付けのお客さま
都合のよいところを神父宣わく
クエスチョンマークの数が多くなる熟年
定年へ達した如才無く笑え

松江市

舟 木 与根一

暖冬で寝正月からもう狂い
素晴らしいひとりはつちだ冬の月
大物と小物うたた寝でもわかり
鬼の眼の涙の透明信じよう
城下町いびつに変えるビルラッシュ

松江市

梅 本 登美也

令夫人特に和服がお気に召し
ピタリト合つてうれしいレディーメイド
考えて置こうと言つてそれつきり

尋常に勝負をしない卑怯者
考えてみても先立つ物が無い

岸和田市 福浦勝晴

背信の西日を受ける美容院

垂井千寿子

花束の中にも一矢隠れてる

運命という名でピンチに負けている

仏様水仙の香の供養かな

肩書きを外せば心冴えるかも

和歌山市 浦野和子

日暦の一枚ずつを丁寧

どたん場を冴えたジョークに救われる

窓越しに見ればきれいな浪の花

先ず犬を賞めてそれから客となり

指切りの指から抜ける落椿

和歌山市 内芝登志代

親バカが嫁にうつって大笑い

お手頃と高級品を並べられ

脇役のかすみ草が持つ自信

胎動へ安産祈るしまい風呂

新しい命へつなぐ母子手帖

和歌山県 天満三千代

一言が過ぎて争う渦となり

腹立ちを癒してくれた星明り

さまざまの坂を極めてゆく浄土

久方の出会い眠れぬ夜にする

逆上り孫の自慢が一つ増え

シグナルの青を待つ間にふと亡母
終電車そこだけ明かいわが家の灯
優曇華の花を氣にして年が知れ
民主とは平気で人を殺すこと
知性派の総理さらさら美辞麗句

岸和田市 古野ひで

片意地を張ると心に風走る

独り居へかこつけてくる役がくる

おろかなる悔い繰り返す老いひとり

ささやかな贅沢好きな花を撰り

少しだけブルジョア気分年金日

岸和田市 島崎富志子

ダイヤモンドはめた指から謀反持つ

愛嬌もよいが度胸もよい女将

学費みな親に出させてバイトの子

鏡台へ五十路の女化けられず

背中に手が回る若さをまだ誇り

岸和田市 原さよ子

教え子の便り幼い顔がある

若夫婦も鍋料理らしい換気扇

おしやれ氣がまだまだあつて祖母達者

ペンキ塗り冬の陽ざしを背に集め

顔見ると新聞一つ断われず

家康のドラマ本でも読み返し
岸和田市 福島せつ子

サロンパス貼って手作り陽が沈む
振り返ることなく生きる欲を持つ
電燈を消すと身にしむ寒の入り
外国で夢は茶漬と子の笑顔

島根県

松本文子

深き悔い土ナベに染みた儘残る
天国の見晴し台はこのあたり
おとうさん近頃鼻唄出ないわけ
眼鏡ふく困った時と暇なとき
帯締めて一家背負うた顔になり

島根県

梅みどり

余生なお静かに女の鈴をふる
門灯に恥じない今日の靴をぬぐ
お茶うけに香りをのせる路のとう
叱咤する歩幅が重い塾の道
目ざましの音に順ぐり朝が出る

島根県

榊原秀子

E.T.の人氣わたしにそまぬ顔
とくとくと弱気はげます子がおつて
そこで鳴く夜鴉一人おびやかし
雪空が続きこ近所遠くなり
しがらみにがんじがらめの恋終る

島根県

大森孝華

妥協の灯伸びる希望をひそと抱く
伸びざかりスポーツ添えて春を伸び
腹割った話へストレス溶けかかり

湯気囲みいたわり添えて玉子酒
読書して失意のある日励まされ

島根県

錦織文子

風花の向うに春の動きが見える
箱のかず賽銭好きな神仏
消し炭の真赤に燃えている孤独
人生の末路を染める壺の彩
二ツ三ツ若さへあれこれ動かされ

米子市

石垣花子

おしゃれして老いの足音聞かぬ振り
老いてなお女の彩をまだ探し
愚痴聞いて呉れる炬燵の真正面
赤旗を振るロボットは家族持ち
百歳へ開き直った老母の顔

米子市

雑賀美世

母逝って遠くとなった寒い道
冬の陽にいく日逢えるか紅椿
赤飯の湯気合格の頬を撫で
弱虫が酔えば本音が流れ出す
朝飯の湯気には今日の無事がある

米子市

菅井とも子

買って来たおもちゃに飽いて竹とんぼ
うそ寒い話持ちよる定年期
ラーメンの湯気ヘデートの眼鏡拭く
椿咲いて古墳に春も訪れる
病名の嘘でおくった悔いを抱く

米子市 桑原伊都

浅草の灯に大道芸はぬくめられ

観光のいくさの島は風化する

思い出のあの日の島の花椿

自信ある夫の芸は軍歌です

突然にかけ出す猪は道化めき

米子市 青戸田鶴

赤い花炎えても島にある翳り

勇ましくてやがて哀しくなる軍歌

塾通いの子からおもちゃは逃げていく

足跡に明治の亡父が消し切れぬ

ぬくもりも般若ごころももつ女

米子市 野坂なみ

同行の道連れ清し鈴の音

老いの覚悟忘れず日々の髪を梳く

高島田わが黒髪で結った日も

城一つ渡して身軽くなる節目

わびすけを移して浄土花ざかり

米子市 政岡日枝子

大切な一期一会の温い風

水子像乙女椿に重いかせ

八重椿クレオパトラに負けません

野ざらしの遺骨へ軍歌届かない

逃げられた母から届く子守唄

米子市 寺沢みど里

ふる里に牛をつないである椿

落書きにチヨコレートとかく湯気の窓

夕暮れのガラスへうつる亡夫のかげ

神の住む島でまつりの船が込む

買ってやった玩具の音をうるさがり

高知県 松岡三吉

阿呆な話馬鹿な話も夫婦きり

ラーメンもよいがお米の余る国

すれ違い夫婦で回る洗濯機

おそろしや不沈空母に乗る一人

美人だったそう知らない母の顔

高知県 赤川菊野

結納がすんで息子が他人めき

赤旗は決して振らぬ父の靴

善人の目は直線を向いたまま

子を抱かぬ胸だとわかる姑の感

上げ底のような男の世辞を聞く

大坂市 黒田真砂

ベル鳴って独りの留守を寒くいる

買えそうにないで値ぶみだけしとく

停年を過ぎても駄馬の走りぐせ

やさしさを裏返しにして拗ねている

新妻の素顔が匂う市場籠

玉野市 小谷仙山

老いの坂道草ばかりしたくなる

言葉尻負けた男につかまれる

虫の喰う歯がまだ有ってうらやまれ

老兵を勞わり過ぎて逃げられる
迷つて居る間に鉛筆をとがらせる

町田市

竹内紫鏑

エスカレーター走つて上る勤め人

エレベーターのればOBの声があり

渡航する夢か寢言も英会話

膳本をかこむあの日の届け人

チャルメラがビルの谷間の風にのり

神戸市

中村ゆきを

春の街帽子も買おう知恵おくれ

アルバイトニュース見ている新入社

上役をそのうち殺そうコンピュター

仏にも鬼にも癖を見抜かれて

上げ潮へ男の勤が冴えてくる

神戸市

山口美穂

白梅一輪老母の声はずむ

庭の隅こは春ですすみれ草

言い訳が出来ずいらだち持ち歩き

紅椿思いを言えぬまま落ちる

今年もまた野暮とはなつたチヨコレート

寝屋川市

柴田英壬子

ままかりの味おかわりの名に恥じず

潤いの笑みをもらった老母の旅

執念を遂げると佗びしさがつのり

あせらねば希み叶うと出たみくじ

指切りの人が鳥糞つ落ち椿

寺社めぐる春の誘いに胸はずむ
七度目の猪歳に決意もうおそし

守口市

野呂右近

週刊誌美談載せては売れませぬ
ビル屋上嬢捨山にしてならぬ

うるわしやビルの谷間を蝶が舞う

家元に生まれた足袋を今日もはき

けい古場の汗を忘れた本舞台

傷心の娘を暖かく見る故郷

あの頃は悪夢の如し今の幸

家元の次男に生まれ芸を捨て

年金は安心料にしてバイト

アクアラングどこへ逃げよう魚の愚痴

継母になるのでなかった叛かれて

ローン癖ついてサラ金怖くない

ポックリ寺お詣りしている口達者

職安で無職と書く日歩が重い

見返えしてやる氣の火種だけは抱く

暗示まだ解けず一本道つづく

その頭脳悪事へ使うのを恐れ

ルール二本敵意を抱いたままに伸び

実力を心得ている歩幅持つ

鳥取市

森田熊生

鳥取市

森田熊生

鳥取市

初歩の初歩こんな所に穴があり
やわらかい話に変えて席を立つ
席ゆずる勇気を子供から習い
少女マンガ待合室の目でめぐり

鳥取県

林

露杖

うんうんと逆らうことを止めただけ
何もかも物憂き宵の独り言
トーストにコーヒー地下足袋履いて出る
弁当はぎゅつとご飯が詰めてあり
終章に近き自伝のペン重く

鳥取県

金川満春

老妻と外国旅行審議中
好意ある電話に老いは虹かける
娘の機嫌今朝快晴でソブラノで
旅支度そつと臍線別に持ち
寒の月森羅万象青い影

大阪市

神夏磯道子

トンネルをぬけて梅林すぐでした
ラッパ水仙言葉はいらぬやすらぎよ
手をかけた甲斐あり咲いた花の彩
孫 孫 孫 夫も犬も嫉妬する
洗濯機孫の産着へ弾む音

大阪市

本間満津子

路の臺すこし春がほろ苦い
逢いに行く袂へ忍ばす沈丁花
再会の涙臉のひとを消し

般若湯ごくらくへ下戸近寄れぬ
初孫を抱く念入りに化粧して

仙台市

川村映輝

百までになすべきことを組立てる
父母よりも長生きできて金婚式
妻勝気すなおな女にゆさぶらる
時の経過難問疑問を解いてゆく
黒眼鏡かけて地獄をつくつてる

寝屋川市

稲葉冬葉

生きている証に花を絶やさない
夕張の地獄に蓮の花が咲く
職安の机にあったサクラ草
こんなにも夢に出てくる何者か
春よ来い息子の春はまだ遠い

藤井寺市

吉岡美房

デイトするように参った妻の墓
横糸が切れてる人生模様です
梅林でそつと夫婦の手が触れる
雛祭ボーイフレンド招かれる
スポットを当てれば蛹 蝶となる

藤井寺市

中原比呂志

燃える眼で冷たい意見突いて来る
大胆なポーズで若さ売りに出る
仏像の後ろにいても見透かされ
十円が安いと主婦が並び出す
分けあうと絆深める荷が軽い

羽曳野市 榎 本 吐 来

きさらぎの払曉を衝く計報ベル(義母逝く)

雑兵の辞書に自尊の文字がある

相槌の数が虚しくする会話

不器用な嬉し涙を子に流し

煙草買いにしても詩囊は膨らまず

羽曳野市 佐 野 白 水

京の旅石庭と襖絵見る寒さ

暖冬へ油屋もつい温くおまんナ

デパートの不況いずこも名画展

大観展富嶽少なくちと淋し

旧友と語る義理人情のあった頃

唐津市 仁 部 四 郎

明日また騙しておくれスポーツ紙

肩書の要らぬ名刺へわく恐怖

タクシーを呼んでもらってから本音

迷い坂やはり独りの五十坂

ひと区切りそのままトカゲの汚職記事

唐津市 浜 本 義 美

発心の節酒へ足をひく行事

小道具の一つ一つに亡父の顔

暖冬異変どうあれ温い方がまし

不況風工場団地の草が伸び

信仰の御利益もなく事故に逢う

唐津市 浜 本 久 仁 於

舞台今泣かせる義理へ雪が降り

春風にふたりの独楽はよく回り

冬の麦踏まれて春の色になり

雪洞へ官女ほんのり淡化粧

汐風の温みふる里近くなる

唐津市 田 口 虹 汀

灯を見れば理性も崩る虫の性

母さんを泣き虫にした子の日記

木剣にツンと初行の腕が伸び

マジックの箱底辺が気にかかり

合格の祈願社頭の梅が散る

唐津市 久 保 正 敏

鍵束の中の一つが生む波紋

政争のヘドロかぶった挫折感

散り際の無念を遺書にしたためず

ビル建って商売敵の灯がふえる

慰霊費の予算も組み込む大工事

唐津市 木 塚 素 石

あきらめを共通テスト強いる手に

友は燃え尽きた仏壇野辺の花

パチンコの功德を語る村の宿

マージャンの娛しみ一つ雑魚寝する

暮仇は切った切られた生き死ぬ夜

倉吉市 渡 辺 独 歩

サラリーマン酒は涙かカラオケか

地熱秘め山は静かたたたすまい

辣腕と言われ燃え尽き症候群

一徹が里の訛りを離さない
黛と紅は女の神器です

西宮市

野呂鶴汀

身構えて見ても悲しや歩は歩なり

雄弁家虚実の中に酔いしれる

悲しさや歳がつまづきよろけさす

燃えつきて茶道に生きる老夫婦

詫び言も酒の力を借りて言う

松江市

竹内寿美子

ユタになる日の雨耳が立つて居る

もう人間を信じない犬の耳

表面は忘れたふりする水中花

坂道のくぼみに情が置いてある

また一人女が下りる風の駅

東大阪市

奥山弥山人

餅撒きの気迫が並ぶ年男

折込みで並ぶ馴染みの市場籠

忘れがちやっぱり妻も六十路

日々流転一期一会のお茶の席

雪の宿内に酒ありぼたん鍋

貝塚市

行天千代

獅子舞の恐し見たしの孫を抱き

混浴へみんなで入ればこわくなし

進学へ私立公立父母がもめ

先生が仲人だったで信じ過ぎ

冷凍が少しとけたかお月さま

娘をとられ今度はひな段買わされる
妻病んで心に黒い雲が湧く

板垣夢酔

さあ春だ旅行カバンがはずみ出す
雑草に花つけられてむしとれず

釜の湯のたぎりに作法教えられ

何時の日かひとりて渡る影法師

石倉芙佐子

さみしがりやで祭り囃子を恋しがる
母逝きて峠の明かり消えてゆく

自信過剰な女を写す飾り窓
旅立てぬ白鳥も居る中州

春を待つ小便小僧に日脚伸び
古傷に或る時触れて茶を濁す

園山多賀子

残りもの福あり善人たじろがず
熟年の視野おしなべて西に向く

双肩にズシリ巨賞を受け止める
いすも大賞を受賞して

恍惚の哀れ糸繰る唄に暮れ
暗いニュースばかりすこし陽脚伸び

吉岡きみえ

ブランコを思いきりゆさぶる冬の雲
争うた夜にかなしい鳩時計

嫁が来て横文字メニユーに馴らされる

姫路市
大原葉香

さすらいの旅に一本道白し
シート交換闘病日記日を重ね
地球にも意地あり噴火しておどし
太陽が無口で一日消えてゆく
空に雲画きて風は芸術家

倉吉市 野中御前

衣食住足りて女の若づくり
豚の独り言猪よりは美人だわ
雑草で四季の暦を忘れない
熱湯をくぐれば真青新わかめ
旧暦の佳き日に開く種袋

倉吉市 渡辺 菩句

迷惑な風邪の女神に惚れられる
食卓に新雪のひと品がふえ
いつも眼を光らせる我が輩は猫
火の車降りられぬ清貧の人
仲間までボカンと空の風見てる

大阪市 藤田 頂留子

根ほり葉ほりペンはスターにつきまとい
心中記事ひとりで死ぬぬいじなし
人生マラソン完走せよと父母の旗
気を変えた時から春の陽はそそぐ
花一輪日陰は日陰なりに咲く

大阪市 杉本 智慧子

何げない仕草でポーズ決める人
栄進に一足早い春の声

花嫁の父緊張のエスコート
切花の赤とピンクが温い部屋
窓外の憂いは知らぬシクラメン

大阪市 鈴木 節子

ためらいばかりでやり過ぐす冬の朝
割箸のうまく割れない日の拒み
軽卒な約束をする留守電話
米櫃に女の知恵を貯える
嫂の鏡の奥を見ってしまう

大阪市 柳原 静香

たなごころ翳せば老いの血が透ける
梅林や一期一会の人と座す
望郷や長崎行きが発車する
車椅子の女ゆたかな胸を持ち
梅便り神経痛もなおりかけ

大阪市 欄 蘭

妻病んで男子厨房と言うとれず
春うらら心浮き浮き忘れもの
風見鶏鷹の様相見えてくる
返済を断る手だて妻に聞き
昨夜のバトカーそうで有ったか朝の記事

大阪市 大野 武太

若者の熱気の中で酔うて見る
春をまつクラス会のガリをきる
級長の名もかりておく案内状
友が来て株で儲けた話する

今週の儲けへ短波きいている

檀原市 岩井 本蔭棒

忠魂碑祀れば揉める民主主義

哀しさは片割れ同士組むコンビ

知らんまに憶えてしもたアンドロポフ

アフリカの子よりわが家の犬美食

悪友が先生と呼ぶ日の予感

兵庫県 藤後 実男

ライバルが横に並んだ絵馬の数

言い勝ってみても所詮酒の席

真つ直ぐに歩くしかない善人で

老夫婦未来の図を描き始め

隣りから今夜の献立風に乗り

浜田市 中川 幸一

亭主とは柱と思っていた誤算

本番にアドリブもあり大御所

年金を貰うたんびに減る命

ネクタイも仮面もとってよく眠る

バカにした政治の中で馬鹿が棲む

浜田市 佐々木 裕

頂点をさとり女房の掌を握る

念仏は浮世話に飽きた口

欲だけは現わに出した顔がある

片意地の影を隠した御灯明

満面の笑み一族の顔となる

西宮市 林 はつ 絵

芽柳へ髪染めすこし安堵する

未定ばかり母の背にまだ冬がある

自画像のバックの彩は変えたくない

ぐんぐんとところを染める人憎む

デパートをすぐバーゲンのとこへ出る

西宮市 妹尾 春江

常識を通さぬ人が幅をとり

忍従の妻へ拳は上げさせぬ

むらさきが匂う尼僧のさりげなし

廿一世紀へ生きのびそれから何をする

どちらからかけても変らぬ長電話

吹田市 西川 景子

褒めてくれる人に単細胞はすぐ惹かれ

月丸く夫婦が無心にするパズル

潮干狩り貝になりたい人も掘る

義理チョコとは何とも夢がなさすぎる

水がめの底の抜けてる人と添う

富田林市 中村 優

冠婚葬祭に熟年の知恵借りられる

易の灯に甘い言葉をささやかれ

気休めで半分治る聴診器

日々好日日記投げ出すボールペン

思いつきの軍歌を唄う泣き上戸

枚方市 稲葉 星斗

観音堂足跡絶えて雪深し

大寒にめぐる客船竹生島

銀世界鴉一羽の山の里

カラフルに賑わう声の豆スキ―

点々とリフトが揺れる雪の山

岡山県

岩道博友

薄給の言い訳辞めるまで続け

引き出しの虫干勲記を読み返し

保険屋が薬の話をして帰り

子育てが終れば停年かと言われ

もう一年ゆつくり洗足して勤め

和歌山市

細川稚代

この街が終の栖か夕焼ける

才人で右へならえに背く癖

前進へ今日のぬかるみ踏みしめる

嫁入りの荷物がついて島の春

裏のある笑顔で名刺おいてゆき

岡山市

井上柳五郎

でき過ぎた喜びすこし気にかかり

つくせない言葉がさせた自己嫌悪

ふれあいを葬送の場でたぐり寄せ

ライバルがいて老骨にはずみつけ

ひといろに融けた和の輪にある温み

岡山県

荻野 鮫虎狼

酒樽の中から男春の唄

日だまりに顔を並べたい話

吊皮の女昨日の夢を見る

駅弁のまん中に居る大衆魚

代議士の踊りは九州黒田節

交野市

山本テルミ

いい旅行だったカラーが皆笑い

顔洗う度ああ今日も生きている

手拍子でアンヨを招く祖母の唄

山茶花の赤が暖冬を持て余し

木の芽和えこんにやくどこか京説

枚方市

栗林光夫

定期代損したように二月過ぎ

鬼がいなければ桃太郎は生れない

処女雪が肌を許したスキーあと

年々歳々夫婦相似て年明け

仕事だからこそ泣くんだ笑うんだ

八尾市

山下みつる

猪の妻を上座にすえて飲む

並ぶ子の背丈はるかに我れを越し

言訳を小出しに出して亭主飲む

不沈艦寝言や夢で済まされぬ

日本丸右へ右へとかじを切る

岡山市

行吉照路

味噌汁は熱い男のねじを巻く

木馬かも鞭の音だけ耳をつく

老醜の屍を見せぬ鎧つて

医者の手はまだかからぬが不安なり

恩師の見舞い妻子犬までついて行き

橋本市

森脇善太

張りつめた空気がしに立つ女
涙のあとの笑顔を見届ける

合槌の中で自分を見失い

行先も聞かぬ信じた雲に乗る

はっとけば罪の意識が風化する

大阪市

中西 兼治郎

鍵っ子の園児に遮断機が降りる

消火器が飾りになって家平和

お隣りと静かに見栄を競い合う

花いけて今日は結納の来る広さ

父母離婚我が人生の荊棘道

大阪市

鍛 原 千 里

美しい笑顔が招く不幸也

子の意欲たった一つのほめ言葉

秒読みになって女はつよくなる

一匹の虫を殺して守るつば

紺がすり旅の情けの彩になる

和泉市

岡 井 やすお

麻醉覚め並ぶ家族の笑顔見る

強かった昭和一けた急に折れ

政治家ともなれば死因も変えられる

悪夢また見まい運命共同体

四海峡封鎖軍神作るまい

兵庫県

中 田 白 李

自己過信北の風が吹きぬける

研修と観光意見揃うた酒を酌む

妻の出勤に合わせてめざましかけておく
日めくりをめくり忘れた日の寂し
飲みたいが辛抱してまず逃口上

和歌山市

坂 口 公 子

ローカル線胸の高なり聞こえそう
高らかに謡えば逃げる冬の雲

アチャラ語で通りそうです立ち話

泥を被って大島つむぎ冴えてくる

宇都部市

平 田 実 男

セールスが世辞で予約へこぎつける

夢に出た妻は良妻賢母なり

ちと足らぬのがいてグループ丸く行く

悪友の方が実印押して呉れ

七尾市

松 高 秀 峰

仏壇を褒められている宿を貸し

三面鏡部品替えたい顔がある

顔立てて上げます一票入れる母

違反とは知らず不覚に顔を出し

和歌山市

杉 田 周 穂

磨かれた鏡はいつも嘘つかぬ

住みついた街が老後の街となる

若き日の過ち街に生きていた

旅人に生きるきびしさ見せぬ街

島根県

木 村 はじめ

無職とは淋しい事を書かされる

なるほどと直ぐ妥協する不甲斐なさ

自動ドアだけは私に素直なり
戦争もする国茶の間で見てる国

大阪市

岡田ふみ

泣いた日も笑った日もあり古稀迎え

冬將軍元気がなくて喜ばれ

不法駐車机上の空論めいている

安定剤呑んだりコーヒー吸ったり

大阪市

山根いつを

スキー宿一夜で夢の白い山

島からの便りに海の幸を添え

待ちに待つ返事が横を向いて来る

皆勤のテレビが宵寝風邪薬

岸和田市

狭間希久志

油断した猛烈社員異に落ち

捕われた蟹が泡吹き意地を見せ

なにげなく造花を洗うミス職場

風船が願いを抱いた幼稚園

岸和田市

吉水照江

死を意識涙で握手するベッド

耐えぬいた女が秘めると根性

今頃の子供の知らぬハジキ豆

新築の居間で喜ぶ老夫婦

高槻市

田崎素秋

街道の家並は江戸の匂い持つ

蠟燭を吹く子へバースデーの歌

ひとときの邪心追い出す滝寒行

正直に燃える炎で嫌われる

羽咋市

三宅ろ亭

梅活けた妻へもやった褒め言葉

平国祭すめば能登路は急ぎ春

農丈にやれることあり障子張り

春霞向うに泊る宿が見え

河内長野市

井上喜醉

有線の音へ馴染まぬ古時計

達筆は余計な言葉が滑りすぎ

妻と居るときは喋れぬひとり言

兵庫県

大江秋月

アルバムの母は優しい顔のまま

孫二人日向に並べ爪を切る

灰皿が客の個性を知っていた

川西市

氏林洋敏

日本を考える日の建国日

八十の目からフルムーンの若い肌

混浴のプランも入れてフルムーン

岸和田市

芳地狸村

落葉路を老いを丸めて行く夫婦

電話口孫の片言きく夫婦

別れても夫婦の味で出る舞台

自選集

若柳潮花

友禪が両手伸ばした衣紋竿
古希近く喪の彩だけが眼にうつり
踏むほどの雪も積らぬ里の新春
逢いに行く靴磨かせた妻も古い

黒を着て数珠は持たないカラス族

尼緑之助

片手注ぎのばして春のターゲツト
いい話おとほけ顔も春なれや

利かんぼの余寒予定の邪魔に来る
散らばった部屋にも春の百面相

やあやあできずなは生きていた握手
お釈迦さまが泣いております悪平等

工藤甲吉

お互いに男となって脱ぐ仮面
ブローラーお前一番可哀相
エリートという歯ごたえの無い男
表札は借金取りに見上げられ

大矢十郎

装甲車通過へ別な寒気する
腰の低さあとで気付いた選挙前
ライバルの住い早目に塗るペンキ
下請けを泣かせて逃げる工務店
喪服もう今朝四、五人に囁かれ

野村太茂津

ハングリー説く飽食のおとこたち
やっぱり女自身を軸として踊り
博愛をおんなは依怙と決めつける

きたない言葉で呆け進ませぬアドバイス
人愛す生き生き旅の終るまで

山内静水

戦争はまっぴら七草粥する
おん歳はうん歳お若くあらせられ
手応えは充分罵声を浴びせられ
鐘の鳴るまち一望に夕焼ける
絶対に泣かんぞ嫁ぐ娘の仕度

藤井明朗

春ひらく老いの泉もすこし湧く
陰と陽幸せつなぐ巡りあい
棚に置く秘密笑って見つめられ
ひとり占めする幸せは逃げている
旅占いプランの中に秘めている

水粉千翁

返答に困って嘘がつけません
一気呵成円の絶句を知るや筆
よじ登るときに奈落の酒を酌む
粥する分け合う心触れ合うて
春抱いて激しき思いやりの冬

金井文秋

手つとり早いが母の温もりの食事
口喧嘩程度で夫婦妥協する
人間から会話を盗った販売機
恐ろしい会話万引しにいこか
ほめている女へ同調せぬおんな

市場没食子

即席の味馴れ住めば都かも
介添えが要るよな歳の紅一点
ナツメロの咽喉もお歳と見えぬ艶
かくしやくとして七度目の年男

愛論氏退職

釣りに句にパチンコ退屈せぬ余生

新岡回天子

年金で派手な生活中古車
御来店不用気やすさで金を借り
呼び捨てにされても代議士俺はやる
豆一つ口へモグモグ福は内
大豆ばらばら今日だけ捨てる鬼は外

角砂糖噓が崩れてゆく姿

月原宵明

関取に聞けばみみずが大嫌い

おせっかいの鼻へ蜜柑の汁が飛び

亡き妻に資生堂から来るメール

善人に逸話とて無い三回忌

大坂形水

見るだけに來て茶菓券にお車料

義理買いの絵がえらい値になっていた

工場から真つ直ぐバツタ屋へ入る

どっちみち空手形だと分りつつ

とばくゲーム機を知らぬ疎さを笑われる

本田恵二朗

善玉のたくらむむほんはたかが知れ

天の声邪恋の耳に届かない

お美事なジョークが爆笑誘い出し

白旗をそろそろ出そうか出すまいか

喜寿の年輪脈打ち続け打ち続け

黒川紫香

補聴器が噂話に耐えている

大きめの乳房暖炉で泣いている

銀行に老人呆けの知人が居

絵日記に肥めの母がいつも居る

満月へトイレの窓を開けて見る

正本水客

島の雨ころの傷をぬらしに來

足跡を消す波がありまだ歩く

アホなこと言うて了うて寿司つまむ

半分に割って親しさ見せられる

洗い髪母の匂いをためている

橘高薰風

梅が言う少し上手に齡とれと

口あけて雪うける亡母からの便り

余呉の湖灯ともし頃は灯がともり

白い山燦然とあり儀式の場

見返るに長すぎはせぬ鶴の首

川柳太平記 (59)

川柳の群像

西原柳雨

東野 大八

古川柳研究にその生涯を賭けた西原柳雨は岡田三面子と併称される川柳界の恩人であるが、昭和49年4月岡山県高梁市で開かれた大陸川柳作家同窓会（大井正夫代表）で、柳雨がこの高梁市で十八年間も旧制高梁中学（現高梁高校）で教鞭をとっていたことが判った。この会合に参加した堀口塊人は、「これで柳雨の若い頃の生活が判った」と大喜びし、地元福井天弓のあっせんて、市当局や高梁高校側に柳雨の川柳界に貢献した事蹟について説明し関係者を喜ばせた。

柳雨の著述は「川柳江戸歌舞伎」をはじめ「川柳江戸名物」「川柳参尾志」「川柳吉原志」「川柳年中行事」「川柳風俗史」「川柳榊栗毛」「川柳からみた上野・浅草」「川柳仮名手本」

と数多い。このうち世に著名な「川柳江戸歌舞伎」は、装丁が浮世絵の鳥居清忠で表紙は多色刷。序文は坪内逍遙が四千字に上る推賞文を寄せ、収句千余句で初版五百部は忽ち売り切れ、再版し一般の人々を瞠目させた。

柳雨は本名西原一之助、慶応元年（一八六五）七月、久留米市庄島町に生れた。久留米藩士西原健八郎が父である。明治二十七年福岡農学校卒業後、苦学力行して中学博物教師の免許をとり、仙台、久留米、佐賀、岡山、愛知、山口各地の中等学校に奉職、教師生活は四十年間である。

この教師生活のうち最も長く勤めたのは旧高梁中学で、明治三十三年から大正七年までの十八カ年にわたり、ひところ舎監まで兼任

した。この高梁時代の著作は

「川柳難句類解」 大正2年2月博文社

「川柳榊栗毛」 大正2年9月博文社

「川柳吉原志」 大正5年5月 育英館

「柳雨俳句集・四季詠草」 時期不明

みやびた中国山脈の城下町高梁で、色づいた吉原の川柳や、江戸歌舞伎の資料整理に没頭したすねもの教師の横顔が浮かび上る——と大陸同窓会の催しをとりあげた読売新聞は、三段抜きで川柳人教師柳雨の事蹟を紹介している。

高梁時代の柳雨は、高梁川での釣りが好きで、晴天の休日には欠かさず太公望をきめこんでいた。酒もいける口で、下戸ながら毎夜酒杯を手にしていた。こうした生活の中で暇さえあれば江戸古川柳の研究に没頭した。

「一之助小にして夙に文学の天才あり、特に狂詩狂句に至っては奇想天外より来り、人の意表に出づるもの多し、雅号を柳雨と称し講学の余暇好んで川柳の研究をなし、大槻文彦、佐々政一、坪内雄蔵（逍遙）の知遇を得て遂に斯道の大家と仰がるに至る。著すところ川柳榊栗毛、川柳江戸名物等拾余種あり。晩年教職を退くや、故郷を去って上京、法博

岡田朝太郎（川柳号三面子）の葉山別荘に寓して、川柳の研究に没頭せしが、昭和五年春不幸にして病魔に犯され、久留米に帰る九州医専付属病院に入りて療養せしが、薬石効なく四月二十七日六十六歳を以て逝けり。彼が生前十年計画として編さんしつつありし誹風柳柳講義と川柳辞典が、その稿半ばにして残された実惜しむべきことなり」（久留米市誌下巻『昭和9年発行』）

柳雨は九州で最初のラジオ放送局（熊本J O G K）の開局記念放送として昭和三年八月十五日から三日間川柳に関する放送を行い、傍ら九州日日に九日間随筆を連載、このあと名古屋（J O C K）と大阪（J O B K）から川柳の放送が予定されていたが、出発前、葉山で岡田三面子と痛飲した正宗が利きすぎ、元々胃腸の弱かった柳雨は、下痢を起した上、岡山、高梁、門司、若松で親戚柳友などから酒池肉林攻めにあい、熊本の放送局では、魔法瓶につめたげん、しょうこを水代りに飲んで講演した。このことがいわば柳雨の死因の前兆となった。

こうした道中、柳雨は筆墨画に長じている点を見込まれ、次々と揮毫を強いられたが、その際の川柳は、つぎの句一点張り。

―鞍置いた馬のさまよう須磨の浦 柳雨
劇作家として著名な真山青果（一七八七―一九四八）は、仙台生れて少年期の旧仙台中学時代、博物の教師として柳雨に教えられたことを奇縁として、長じてのち何くれとなく江戸の考証に関する資料を送りつけていた（真山青果全集25巻雑草集・講談社刊）これらの側面的援助で「川柳膝栗毛」「川柳江戸名物」にプラスすること多大であった。

岐阜から発刊された「やなぎ樽研究」（大正14年5月刊）には、柳雨は毎号「難解補遺」を執筆していたが、その中で教え子真山青果の協力に心からの謝意を表している。

柳雨の著述の主なる刊行本の内容を記すと

「川柳江戸歌舞伎」（大正14年春陽堂刊）

江戸歌舞伎十八番ものを列挙し、それに寄せられた江戸庶民の狂句・川柳千余句を網羅し解説を付し、付録には角力、謡曲、歌舞音曲、講談落語、諸興行物大道芸を載せている。

「川柳江戸名物」（大正15年春陽堂刊）

飲食物、薬物、化粧品、袋物小間物、呉服店、玩具類、書物文房具、雑の八章二百十九項に分けられている。

「川柳三尾志」（大正14年図書刊行会刊）

柳雨が名古屋屋在勤中、新愛知新聞に連載したものの単行本。戦国時代の三河・尾張の徳・豊二英傑をめぐる川柳戦国史。

「川柳膝栗毛」（大正2年博文館刊）

日本中の地理、歴史を一九の膝栗毛に模した日本名所案内。

「増補訂正川柳吉原志」（昭和元年春陽堂刊）

佐々醒雪との共著。江戸時代の吉原川柳の増補版。

「評釈川柳初篇」（大正14年よのころ社刊）

岐阜川柳誌「よのころ」連載の単行本。

「川柳雑俳集」（昭和2年日本名著全集刊行会）

日本名著全集江戸文芸第二十六巻中のもの

柳雨校訂、現在も川柳界に残る宝典である。

柳雨は全著作類二部ずつを携え晩年帰郷の際、その一組を郷里久留米の明善中学に寄贈したが惜しくも戦災で焼失したが、現在は別の一組が、井上東（柳雨伝の著者）宅にある。江戸歌舞伎の複製版をぜひ実現したいものである。

参考文献、井上東著「西原柳雨小伝」（昭和53年非売品）ほか。

★次回は「今井卯木」

誹風柳多留廿六篇研究 (十丁)

鈴木 黄・石田晋一・南 得二

小野 真孝・本多正範・石田成佳

大屋 六郎・八木敬一・多田 光

故岡田 甫

164 京染にしてハ五の巻色のよき

鈴木「源氏物語」若紫の巻の事

京都地方で書かれた「源氏物語」・若紫の巻、この巻を紫とするのはすこしおかしい。京染ならば紅か鹿の子が適當だ。それはともかくとして若紫の巻は特に秀いでている、といったところか。

南「贊。つまり紫は江戸紫が一番秀れているが、源氏物語五の巻の「若紫」は京染であるのかかわらず出来具合がよくて、秀れているとのことか。

本多「贊。

京染も六十帖ハ美し美し

筆先で若紫をそめあげる

三〇・26

四七・28

多田「贊。

葵から先ッ書そふなものがたり

岡田「贊。

五三・1

165 おく様ハ甲乙なしの糸で弾キ

鈴木「清純に育った上品な奥方への叙情詩。奥様は琴、妾は三味線。そこで琴の糸の太さは皆同じで駒で音の高さを変えるようになって

いる。三味線の糸は三本とも太さが違っている。

甲乙なしは琴の糸にたとえて、誰にでも同じ気持ちで対応する教養豊かな上品な奥様で、

心静かに琴を弾いている状態。

勿論、言外に妾との対比を考えて良いだろう

う。

石田晋「礎稿に言うように、上品で立派な奥

様の句という解もいように思ひ、妾との対称の妙を強調しているようにも見えるし、

判断に迷う。

大屋「奥様ハ甲乙なしの糸で弾」くが妾は

一・二・三と太さのちがう三味線という対比でいいのではないでしょうか。「公平で上品な」までは考えなくてもいいと考えますが。

多田「大体大屋氏説贊。

岡田「深く考えるに及ばず。三味線に対する琴。

166 笛の音に琴の調子もくる小也

鈴木「牛若丸と浄瑠璃姫を詠んだ句。

謡曲

と川柳」に、「羽田十郎秋長の注意により、常盤御前牛若丸を訓戒し、五条の橋の千人切を止め、登山修學すべきを命じ、且牛若にゆずる笛の由来を語る。……三州矢矧の長者の女浄瑠璃姫の琴を弾するを牛若丸小柴垣の外より笛の音に通ひて、遂に馴染を重ねる云々」と解説している。

笛の音で琴を引出す小柴垣

九〇・32

浄瑠璃に笛を合せるきつい事

三二・37

浄瑠璃へ笛を合せる御曹子

三六・31

石田成〓賛。当初『辞彙』の項に、仲国が小督を訪ねたときに吹いた笛とあり、本句がありましたのでそのように理解していました。大屋〓賛。石田氏と同じように考えていました。

多田〓賛。

岡田〓同。

167 あくる日に幕の干上る御残念

鈴木〓江戸市民は、階級の如何にかかわらず春の花見は欠かすことの出来ないたのしみの一つであった。しかし、この時期は天気も変動し易く春の嵐やら春の雨等々あったと思われる。

まん幕や御馳走やらを持って花見に行ったまではよかったが、途中から雨に降られてぬ

れて帰って来た。所がその翌日は、申し分のない花見日よりでぬれたまん幕は乾いたが、この日は花見に行けない事情がある。誠にまにならぬもので残念である。

花の雨のちは後生のきたになり

一九・9

花の雨琴しんまくにおへぬなり

二二・28

石田成〓賛。花の雨とは解りませんでした。

多田〓賛。

岡田〓同。

168 年よれハぶしやう一字で返歌也

鈴木〓謡曲「鸚鵡小町」の一部分に「何と帝より御憐の御歌を下されさると候ふや。あら

ありがたや候。老眼と申し文字もさだかに見え分かず候。……雲の上は。ありし昔にかはらねど。見し玉だれの内やゆかしき。……所詮この返歌を唯一字にて申さう。……いやぞといふ文字こそ返歌なれ。……さればこそ内やゆかしきを引きのけて。内ぞゆかしきとよむ時は。小町がよみたる返歌なり。……」とあり、小野小町が老いて零落して閑寺辺に在るのを、天皇がかわれに思つて、陽成院の勅使をして歌を賜った故事をうたったもの。

口まねで小町あだ名が一ツふえ二〇・30

口真似も一字ちかつて名歌也 三六・32

ありし昔にかはらぬハ歌はかり 六四・19

多田〓賛。年寄のおつくづかりを背景にして

岡田〓同。

169 梅山吹は文と武に手を取らせ

鈴木〓「梅」は「我が国の梅の花とは見つれども大宮人は如何いふらん」で宗任の歌。

「山吹」は「七重八重花は咲けども山吹のみの一つだになきそかなしき」で太田道灌持資の故事。

句意としては、梅や山吹は有名な武人でも同時にすぐれた文芸人の素養があると言う材料になっている。

梅の花公家衆か持て出てなあに

一八・40

ずぶぬれに成て帰ると歌書をかい

一七・3

小野〓「手を取る」は仕方に困って途方にくれる、すこすこするの意。この受身型とすれば道灌・宗任を詠んだ事は動かないと思つつまり梅で公家衆に、山吹で道灌をうつろえさせたことを詠んだものでしょう。

多田〓賛。

岡田〓小野説も有益。



黒川紫香選

藤井寺市 赤木和子

試歩の道桜へ少し歩きすぎ

大阪市 藤森小雅子

例外という扱いで輪に入る
こわいこと考えている黙っている

叩きよいところにあつた子の頭

温い手が素直になれと言っている

苦勞などないという手が荒れている

岐阜市 市川鱗魚

男嫌いの暖簾豊かに塩を盛る

待ちぼうけ風がそろそろ吹きぬける

妻に甘えていると砥石がねむくなる

都市砂漠子の絵も水の欲しい花

流れ着く昆布還えらぬ島がある

尼崎市 西村かすみ

気楽さは女と意識してくれず

指定席アベック単位で売れている

ときめきもなくグラビアのヌード繰る

いい合いのあとの空虚を子がつなぎ

蜜柑剥く指に微熱の日が続く
春の雪朝から既にボトル空く
朝の靴いつものひととすれ違ふ
春一番派手に冬眠起こされる
昏の怒が虚しい風にする

西宮市 紀市郁栄

気の弱い罪をおとして足袋を干す

教会の扉はやさしい音で開く

愚痴ひとつこぼさぬ妻に裁かれる

陽のあたる仏間を姑の部屋にする

名刺交換少し卑屈になつてくる

尼崎市 奥山美智子

木の芽から生きる喜びもろてくる

反核の旗は大きいほどよい

自尊心鼻が一番知っている

約束をしてから肩がこつてくる
一針も無駄にはしない母である

尼崎市 春城年代

人形で終った生にも自負がある
割烹着に拭いきれない染みあまた
安全地帯の彼を少うし甘くみた
番犬がわたしをにらむ飾り窓
地下鉄が大きな風を連れてくる

八尾市 高杉千歩

年金証明一年きざみに生き延びる
節目節目喜怒哀楽も世間並み
寺町に育ち鐘の音聞き分ける
美しく老いたし春のどか
きれいな嘘で約束反古にされ

尼崎市 角野かず子

交換は得かお猿に聞いてみる
陸橋で偽善の寄付を強いられる
喝采を受けて楽屋で独り酒
過去を知る夫婦茶碗は伏せておく
いくつもの内緒話を聞いた部屋

富山市 舟渡杏花

雪割草とおしゃべり春の譜がこぼれ
血統書の犬へ不倫が許されず
還暦へ座右の銘を書きかえる
野の草のなさけへ蝶々舞い戻り

後遺症となりそう由香という名前

西宮市 奥田みつ子

空青し白足袋竿になお白く
嘘半分その半分にだまされる
さし向い答えを逸らす箸の先
生々流転他人の話面白い
生欠伸デートも疲れるものらしい

熊本市 有働芳仙

あの声は酒を出してはならぬ客
傷もっているから二人仲がよい
夫婦って何だろうと辞書を引く
フィルターを潜った水の失語症
踏まれてもいい春闘の靴で出る

東予市 小山悠泉

充電のようにちびちび父の酒
野心等ない友情を信じ切り
仲人が正直すぎてまとまらず
アップリケへ母のセンスが生きてくる
いい話持つて来たのに犬が吠え

寝屋川市 平松かすみ

鏡よかがみ返事を待っている少女
自画像は健康色に塗りましょう
チーズケーキ一口ころが丸くなる
給料を額に当ててありがとう
飛びついて冬眠させている和服

名古屋

藤井高子

クリスタルな愛がガラスの城に住む

釈明の構図整い負けている

だまし絵をあばき一つの椅子を取る

缶詰でなければ喰わぬ猫と住み

名古屋市

丹下玉子

二ヶ月の鬼は防弾チョッキ着て走る

吹き溜り夢が潰れた者同士

金脈に取りすがってる輩達

週末に単身赴任の父帰る

今治市

矢野佳雲

妻よ出て見ないか街は春の風

縁のない衆生の票を取りに来る

社長はと言えば息子があんな奴

烏籠を出るとトンビが怖くなり

名古屋市

伊藤春子

ぐち抱いて友を訪ねる熱いお茶

飲めそうに見えて飲めないつぎ上手

大笑の底を病気の子がよぎる

七癖も好きになったら苦にならず

名古屋市

関口幸子

止めようと思った頃に当りくじ

約束の日が過ぎてから手紙来る

芸術を半分信じ裸婦を画く

話すのが苦手な人に出し抜かれ

西宮市

藤村宏子

あの人が帰ると小さな渦のころ

生活に倦むと童話がみたくなる

オクターブ上ると嫌な予感する

新しい手帳なじまぬ寒椿

西条市

片上明水

捨石の位置にも右と左あり

妻の吹く笛で踊って日々平和

母の手が届くところへ棚をつけ

親指の太さ地下足袋穴があく

名古屋市

田中晴子

壊れかけた木橋渡ればそこは春

母の罪のせて闇ゆく花筏

激流へよんどころない棹をさす

腹いせの小石波紋は泡になる

高槻市

竹内花代子

人妻を呼び捨てにして吞んでいる

近況TEL結局選挙頼みます

表札を外して人が住んだはる

確率は当らなくとも傘は持ち

京都市

松川芳子

同じ事言うて許せる京言葉

日本髪恋し露店で箱枕

御期待に添えないままの妻で若い

子離れの出来ぬ夫婦に長い夜

鳥取県 森山盛桜

大阪市 板東倫子

背信のためらい絆止めかねる
身の上を知ってる様なペンダント
赤い灯の下に話が落ちている
ハンカチの白さ女の自信抱く

大阪市 堀いくの

松原市 佐藤藤子

喋り過ぎキャベツ細かく刻んでる
ふるさとの御堂の鐘を子等と聞く
あの角を曲がれば笑顔戻るでしょう
風邪の子へ一輪挿しの位置を変え

島根県 松本はるみ

西宮市 津山冬子

ある日夫が他人に見える檻の中
胃薬を吞んで批判にたち向う
耳の底夜更けの雨が降り止まぬ
皮表紙ノートに4Bの落書

名古屋市 越村枯梢

熊本市 高野宵草

猿真似のうまい男の回り椅子
子を奪られ軍歌を唄う二度童子
桐箱に納めるほどの過去でなし
罪の重さよ天秤皿の浮き沈み

和歌山市 中尾まゆみ

豊前市 田中正坊
(正三改め)

ラブチャンスなるほど二月十四日
春草のみどりへ赤いスニーカー
友達になってあげようのら猫よ
花活けてわたしの部屋も春にする

妻入院娘出勤独り座す
こけた頬に薄く紅さす妻いとし
職安でご苦労さんとねぎらわれ
ネクタイを締めて行く日と締めぬ日と

境港市 細木 歳 栄

垣根など気にせず猫族春らんまん

叱責の声を子供等唄と聞き

空閑も時には嬉し趣味という

闇將軍の不遜不屈にある魅力

羽曳野市 麻野 幽 玄

子供二科展見た目へ飛込む裸婦の図

電線の雀へ多めに落す種

膝に居るうちはチャンネル孫が持ち

三分咲五分咲行けない花便り

島根県 東原 福 子

簾が墨絵となりて春の雪

俸せな春の鏡へ笑いかけ

露天風呂タオルでつかむ春の月

春暁の戸口へ愛猫戻り来る

大阪市 松本 ただし

我が道を背筋伸してゆく総理

星落ちできそうな寒夜を救急車

ミナミでは河内弁でも似合いそう

丸い筒持てばマイクと思う孫

米子市 林 荒 介

千の屋根罪障消滅千の雪

結界を窺けば雪の藪椿

山姥を舞う掌冬の蠅

骸なり葬儀無用と書き残す

大阪市 津山 刀 水

愛が燃え非常階段から登り

おしゃべりの口を封じるプレゼント

黒着れば黒が魅力となる女

静かなる冒険手術室の汗

尼崎市 吉永 伊三郎

逃げ腰でジャンケンしてる鬼ごっこ

車椅子低い視線で叫ぶデモ

只酒を飲まれて票が足りまへん

丑三つに痺れる脚をなだめてる

大阪市 山田 松太朗

家族皆目を回してる洗濯機

お手拝借一人よがりの手打式

糸屑を見付け人妻取ってくれ

針のない時計私へプレゼント

熊本県 大川 幸 子

闇魔から舌抜かれそな嘘を言う

自販機が人間失語症にする

小回りの利く妻と居てつつがなし

旭川市 朝倉 大 柏

声もなく笑う男に気が抜けず

第三の波音さぐる風見鶏

堂々と女も齢を言える齢

吹田市 井上 照 子
落日の向うは夕陽のコレクション

酒が出て商談先ずはうまくいき

寄せ植えのひっそり咲いた福寿草

鳴門市

八木芳水

風当り強いところに母の盾

エプロンをすればやさしい母となる

呼び捨てにされて女はついて行く

富田林市

藤田泰子

お箸ならもっとおいしいフルコース

白鳥を隅に追いやる朝の風

度胸あるのかないのか黙ってる

山口県

高崎雀声

ロボットが次々職を取りあげる

スカートをめくる春風しつこすぎ

叱られにきた子の頭なでてる

米子市

沢田千春

遠い兄軍歌にのって征ったまま

ふり向けば波が足跡追ってくる

どん底でもらった言葉今日に生き

兵庫県

森脇和子

人生の黄昏赤い靴を買う

呱呱の声聞いてお茶漬欲しくなる

臨終の父を誘った花吹雪

松原市

本多洋子

指輪ことり病母の指を滑り落ち

焼芋屋モダンな拡声機を使い

さあ今日もスタート洗濯機がまわる

宝塚市

丸山よし津

大寒に長寿の人の計が続く

代議士の死スリラーめいて世紀末

ビルのドアー自動ではなく立ちどまり

豊中市

満仲きく子

うぬぼれている水仙の香りよう

梅を見る誰の瞳も美しい

ユリカモメ京の底冷えきつうおす

新潟県

高野不二

新幹線はいいな美人の中の席

先生をけなして意見一致する

ワルだったから先生が覚えてた

愛知県

国分甲子郎

ふだん着で逢えば親しい人であり

名だけの一室怖い雑居ビル

仏壇の貯金引き出す老いの旅

島根県

石田清泉

十歳の女らしさにハツとする

職安に二月の風は冷た過ぎ

新春の巷選挙の影動く

弘前市

真喜内實

父似という一言少年素直になる

飼主に似てくる馬を育ててる

六十路にも割る薪のあるありがたさ

鳥取県 羽津川 公 乃

逃げる気のない野良猫がよく肥り

大湯吞父ゆったりと茶をすする

宝島さがす眼鏡を夫と買う

弘前市 田 中 叶

あるもので済ませ夫婦の日曜日

買ってよい約束女湯とかわし

猫の恋そこらのものを投げられる

西宮市 西 口 いわゑ

メーカーの半値ですに気が動き

不出来でも手編のセーター心着る

梅の香にフツと浮んだ遠き人

西宮市 朝 山 千世子

梅古木傘寿の老母の趣味豊か

赤い服似合う白髪のお女振り

短気だが律義な父で子煩惱

尼崎市 山 田 保 蔵

手相見のオッサンなんて出世せぬ

腕白ッ子叱りとばせば隣の子

外国船他国の風を積んでくる

芦屋市 上 田 佳 秋

バーゲンへ姑も同行させられる

半ドンは馬券を買うてからデート

川柳へ意欲辞書を二冊買う

尻崎市 矢 萩 貞 子

病院の待合室で聞く訛り

顔見せぬ絆ばかりが苦しめる

年度末税務署小声で応対し

尼崎市 佐 藤 美代子

孫多しお国言葉で笑いこけ

標準語使って個性伸び悩み

床柱主待つ間にほめ言葉

水戸市 上 鈴木 春 枝

独酌の夫へテレビはよう喋り

迷い道子の泣きをヒントとし

許されるまではと仮面つけている

竹原市 石 原 淑 子

直送のリングの甘さ恋に似て

桜草春を我家に小鉢買う

夫に似た長男次男三男で

竹原市 佐 藤 令 子

どちらかが満足してるシーソーよ

親と子の白紙のノートが恐い明日

スケジュール母・妻・母の顔で聞き

竹原市 古 田 比呂子

子の退院(三句)

もういくつ寝たらと退院待ちわびる

退院へ空いっばいに鳩が舞う

無罪放免退院の足どりよ

守口市 岸 野 キ ミ

女一人母あり子あり四十年
時折りは息子の蔭口嫁と言ひ
肩ももか息子のぬくい大きな手

岡山県

吉末 謹太郎

向き直つてみたい日もある鬼瓦
十戒を唱える人が蠅を打つ
愛一すじ母に余白のない日記

八尾市

椎尾 公子

果物もメロンは王者リボンつけ
夫婦湯呑琥珀色になつてよし
冷戦の夫婦にゴキブリ出てくれる

枚方市

二宮 山久

決断へ妻の意見もかりておく
先生も立ちよみしてる古本屋
ふゆりの母に元気な長電話

尼崎市

中辻 千子

多忙の中に百人一首を聞く安堵
磨いた靴玄関に並ぶ初就職
挙式の日決まつて娘の美顔術

熊本市

宇野 昭代

バーゲンを素通り出来ぬのが女
銀婚で夫のすべてをまだ知らず
恋人を連れて帰省の子が眩し

諫早市

江副 二牛

朝酒に雨の飯場は酔うている

借家住い抜けたがローン追つてくる
左遷地に住み慣れふれる人情味

島根県

北川 民子

見舞客大きなクシヤミして帰り
薄日射し雪を払いし竹の音
うなされて熱の向うに亡母が微笑む

岡山県

池田 半仙

世話好きが居つて町内会和み
霜の朝焚火に犬も寄る寒さ
化粧代給料袋に入つてない

益田市

里本 たかし

蜘蛛の巣が張る石段を引き返す
いやな人が戸を閉めている背を見る
仕切垣四、五歩伝つて雀降り

寝屋川市

立床 晴風

友達が出来たと孫が電話する
潤滑油足りず派閥が軋み出し
サハリンが見えて哀しい日本晴れ

鳥取市

野沢 大漁

数珠玉を繰り極楽の音探す
一世一代の買物妻めとる
転作にひたすら頭痛の種をまく

寝屋川市

堀江 光子

道で遇う弟照れた微笑する
釣りだけは文句を言わぬ夜半起き

山口の雲丹が出て来る伊豆土産

唐津市

福島 フユ子

総裁選にでたばかりに死出の旅

焚火燃ゆ煙は除ける方へくる

九州弁男の話荒すぎる

兵庫県

円増 貞子

たとえばの話私への平手打

忘年会早い帰りを不思議がり

つき合えば人それぞれの良さを持ち

島根県

岩佐 富子

ほどほどに飽きてきました冬ごもり

口紅をチラと老顔ひきしめる

嫁に帯結んで姑の座が温かい

鳥取県

灘尾 民子

出発のベルが握手をせきたてる

逃げ口上見付け途端にしゃべり出し

若づくり姉さん女房なればこそ

熊本市

紅葉山 巨足

炬燵にみかんゴロゴロ置いて年頃よ

推理小説革手袋の気味悪さ

根性悪の女小声に長けている

熊本市

北川 一進

九死に一生それから神を信じます

家中を雑巾が追う猫の足

山好きと知ってデイトも山登り

大阪市 権安 達一郎

コマーシャルの方がよっぽどよい劇画

接点の夕陽ぐんぐん闇に入る

母が来て通訳いらぬ語り合い

大阪市 野田 君枝

売出しの旗へきびしい不況風

洋風が和風圧して平和なり

高齢化社会へ大きくなる活字

島根県 堀江 百代

ピーポーを遠くに聞いている炬燵

耳ふさぐ噂話がひろがって

娘を帰しこれでいいよと合点する

今治市 新居田 胡頼子

隙のない女が秘めた過去の傷

易の灯にすがりたくなる身の不運

節分の鬼がひしめく吹き溜り

大阪市 平井 露芳

秀吉もののしる会でののしられ

日赤の貫禄壁のペンキはげ

そやさかい言うてもズーゾー弁消えず

奈良県 宮川 古都路

渡り鳥本籍遠き町籍簿

着ぶくれのふくら雀に満員車

海峡の底でモグラは手をつなぐ

長崎県 岩崎 和子

新入社タイムカードも春の音

静寂な寺に銀杏が舞う風情

巡礼おつる首振るだけで役を終え

大和高田市

岸 本 豊平次

ビニールのハウスで冬を素通りし

お悔みを行く道々で言ってみる

一つ咲き一つ散りゆく寒椿

大阪市

日 阪 秋 子

馬鹿正直へ神も見かねた助け舟

よそゆきと区別するからぼろを出し

自転車置場こしも傘下をもれた群れ

泉南市

坂 根 流 水

節分や今年の豆は歯にこたえ

節分の豆も端数を嫁はくれ

梵妻の一途の経に菊苅えり

鳥取市

湯 邨 色 舞

飼主に似た愛犬でよく吠える

ローカル線空の客車へ風が抜け

転宅へ町のしきたり持ち込まれ

大阪市

堀 口 欣 一

当百も塊人も居ず法善寺

箱登羅という役者を知ってるかい

真夜中に読む楽しさの文庫本

岡山県

藤 瀬 比 沙子

小走りで母に吉報持つて行く

泣きに来てこんなうすい母の膝

唐津市

浜 本 ち よ

やり直す生活へ見栄がじゃまをする

臨終のように時計の電池切れ

八尾市

宮 崎 シマ子

禁酒の紙をもう三回も貼り替えて

桜咲く頃には孫の宮詣り

八尾市

松 下 蕉 露

男から和解の旗をかがげ出す

眉間にある大きな黒子に欺される

高槻市

芦 田 静 江

ウインドーに笑み惜しまないまねき猫

残された葉ばたん雄々しく雪に耐え

豊中市

田 中 淑 子

水仙の香りで夢の部屋となり

似てなくてどこか似ている兄妹

竹原市

岩 本 笑 子

子が四人おればいろいろあると祖母

耐えている子の目をそらし施設出る

兵庫県

奥 野 テ ル

会釈して通れば温い路地の風

娘より嫁に甘えて暮らす日々

高知市

北 川 竹 萌

お隣りへ人移り来て窓が開き

孫達に振り回されて若く居る

鳥取県 和井観洋
負けそうになるとポケットかき回す
野次馬の顔で責任感じない

大阪市 まさ
マラソンの女の意地に寒の梅
枯葉一つしがみついてる御堂筋

泉佐野市 大工静子
佃煮を煮いたとくばる向い風
品のよい托鉢駅に立っている

岡山市 土居耕花
寺町を通ると髪が白くなる
星きれい星座の名など考えぬ

大阪市 塩田新一郎
六年もかけて五年のロッキード
寒いけど春の日射しが本の上

大阪市 清水康恵
雑草におしえてもらう春の詩
主人にも買ってあげたいチョコレート

和歌山県 寺田裕美
人ざらい落葉の私語を足で聴く
誰だって自殺の要素を秘めて生き

今治市 八塚三五島
幸せの絶頂絵馬に書き残し
不器用の箸も楽しい新世帯

東大阪市 三宅旭

上気したり憂うつにしたり春の風
家庭争議じつと見詰めて居るコケシ

和歌山県
赤ん兵衛したので時計螺子を巻く
あたらぬもあたるも八卦手相みる

(前月分) 兵庫県
押せば来る引けば逃げゆく鹽水
生きてたかボクの退院不思議がり

兵庫県 仲井素水
時期ずれた造花でおいてけぼりにされ
騙されたような空クジ味気なさ

唐津市 前田廣幸
妻寝てる洗濯機丈うなってる
給料のたんびに妻が肥えてくる

唐津市 神崎紫泉
日銭追う老婦に雪の降りかかり
教職を離れて久し草をとり

青森県 岩淵一星
二等兵時代を老母と笑い合い
買いい物を嫁にまかせて着ぶくれる

高知県 小沢幸泉
子のやさしさがしみじみと春近し
遠くから見ればよい絵と自画自讃

青森県 波ただお
猛吹雪下から雪が散って来し

(主人入院)

雪の朝大地に埃の影もなし
軋む戸に注ぐ愛情という油

千葉県

中村 有人

お陽様の邪魔をして居る黒い雲
寺の前来ると名士の葬式か

島根県

藤原 秀穂

飼猫に生活苦は無し寝返りす
酒呑みを笑って許せる齢になり

大阪市

朝倉 利義

年かいな顔と名前が重ならぬ
セールスが国の訛りで断れず

河内長野市

糸谷 春草

若者のどやどやを見る天王寺
どう工面したのか会費持つて来る

和歌山県

中屋 好夫

リズムカルな運針明治の老眼鏡
童謡を合唱父子の一番湯

和歌山県

山田 久子

お揃いの湯のみが一つかけた朝
池の鯉大きくなったと里想う

富田林市

植松 慶子

引越の度に思案の長火鉢
おかめ般若背中合せのわたし

米子市

宮本 佳女男

生き甲斐を女の城に築く主婦

字の不味さ委細かまわぬ心の便り

今治市

葛本 昌道

疲労積み重ね善人ダウンする
生と死のはざまつぶやくお念仏(母心不全で死去)

尾鷲市

渡辺 伊津志

食べ物に金を使って医者知らず
投げやりの子の筆さばき賞を獲り

島根県

岩田 三和

テレビでもゴホンゴホンと風邪ばやり
雪囲い春まで家族しまいこむ

守口市

長谷川 司

へちま水顔を洗った妻である
待ちぼうけ噛んでるガムにくたびれる

高知県

山下 登舟

病みやつれ天井の穴数えたり
母無情見舞う異性を近付けず

大阪市

服部 頼一

サラ金屋稼ぎないのを鴨にする
鹿児島島の土産 梅田で買い揃え

大阪市

松尾 柳右子

新人のラインダンスへ明日があり
一羽ずつ集う雀はぱつと散り

橿原市

西本 保夫

いまのボクの立ち場は聞かぬふりをする
秒読みの定年へブライドだけ保つ

鳥取県 田中ヒデ子
親バカが高校受験の列に居る
票読みをあの派この派と人が決め

島根県 藤原鈴江
先方も同じ思いか差し向い
松慕うのうぜん蔓這いのぼり

大和郡山市 岡田すみれ
テレビ見て一人で笑う孫の声
句を詠みつめでたく喜寿を迎えたい

鳥取市 若林一止
かつての日税金納めた撥さばき
句読点無くもお経が節を成し

岡山市 原田凡太郎
オーバーに言わねばナース来てくれず
燃え残る梢火つついて今日も昏れ

大阪市 山本炉齊
水すましわやわやと出る春近し
親と子の絆は太い線である

東大阪市 坂本喜洸
新患にどこが悪いかと問うて診る
藪医者と口でけなしつ通院す

吹田市 西岡豊
老人会唄い踊って腰たたく
心刺す話に迷う女の瞳

大阪市 北山悟郎

膳の鯛お前食うのか睨んでる
後援会父の名前が生きて居る

兵庫県 山根左春
ハイハイと言えば姑も機嫌よく
ハイハイと言えない三分の虫がおり

藤井寺市 赤木奈々
おにぎりはまるいくせしてすべらない
このパズルつくったひとはできるかな

いちご狩吟行

日時 昭和58年5月1日(日) 午前10時集合
集合場所 三松禅寺 (略図は3月号参照)

近鉄奈良線西大寺駅で橿原神宮行又は
天理行に乘換え「九条」下車 西北へ
歩約十分。

兼題 「いちご」

「埴輪」 森田カズエ選

「掘る」 香川 酔々選

各題2句・投句締切午後2時

会費 千五百円(昼食代含む)

川柳塔社

句百選

本 田 恵二朗

人生の編集五体をペンにして
とりどりの彩でわが家の歴史織る

うったてに今年の心しみ込ませ
騒音に慣れよう生きる道なれば
捨て石の誇り陽の目を望まない
輪になって坐れば平和な顔ばかり

兜脱いだり脱がせたり長い友
悪友が仏の面をつけて来る

子守唄で夢のお城を建ててやり
桃太郎のお守り爺婆くたぶれる
おちよぼ口あれで結構召し上り
金魚鉢日向に置いて春にする

古日記若い声して喋り出す
胸張って歩く虚像に影が無い
口数の多い方が負けている

こころを料理してみるのは楽し
習慣に埋没し過ぎたかも知れず
海図捨て去って勘でゆく老船長
うとうとと炬燵でこの世忘れはて

情熱の老化を風に嗤われる
友情の表も裏も同じ彩

なんとなく出来たルールで平和です
はるかなる思い出は佳し夫婦箸
家族連れ下から順に眠くなり

枕元しつけの良さを折りたたみ

はやり風邪引く順番が今日当り
うらめしい顔で注射へ札を言い

マイカーはご遠慮願うプログラム
運命にさからったのが凱歌あげ
無理をすな無心であれと独り言
メロドラマ嘘と嘘とがからみ合い

旅慣れた居眠り降りるとこで降り
新聞少年だと番犬は知っている

味つけのうまさ仲人堂に入り
手を継ぐそこから道が開けそめ
騙されておこつ尻尾が見えるけど
もう一つつかめぬものを追うあせり

善用と悪用飛び交う宇宙かな
蜜蜂と蟻が稼ぎを競い合い

よい種と土は知ってる抱いている
落着かぬ心へ香を焚いてみる
名月を浮かべはにかむ庭の池
一瞬走り抜けて行つた未練星

計画は七彩 ふところは灰色
古傷をがんじがらめにした年輪
嬉しそうにさも嬉しそうに呆れはて
釣竿で浮世のうさを払いのけ

日向ぼこ木の芽の合唱聞きながら
毒舌へずっけ合つて良い仲間
ぬかるみをちゃんと知ってる千鳥足



横好きのなるほどほんとに下手くそだ
一と粒の種太陽は見逃さず

輪に並ぶ寄せ書の顔よく喋り

時代ものの腹芸だれも振り向かず

おなさけのスローボールを取り損ね

なつかしい景色さかなにもてなされ

にらまれてにらみ返して仲が良い

窓枠に遠山はめ込むように建て

呱呱の声汐どきちゃんと知っていた

力んだが一の力は一だった

玉露にも番茶にもなり苦勞人

つかめそうな風がひよこにたわむれる

音知らぬ子らに五本の指がある

心眼がじつと見つめている怖さ

点になり線にもなれて苦勞人

無愛想に開いて閉った自動ドア

良い仲間ホラ吹き合うて吹き合うて

酒量には弱いがムードに酔いしれる

生きる道ぬかるみ一つ跳び二つ跳び

その手には乗りませんよと乗ってやり

相槌の槌がだんだん重くなり

運鈍根ついに錦を着て戻り

楽天家が来てじめじめが乾きそめ

石灯籠家系の長さを知っている

切れ味のほどよさ方円の和を作る

売りものにせぬ誠実を慕われる

太陽の子だ風の子だ泥んこだ

老母が動く風まるくなり甘くなり

風雪に耐えた小石の肌ざわり

人生譜描くペンだこの疼く日も

足跡を残そう砂のある限り

再会の笑くぼが若いままこぼれ

鉛色のころを囁く青い空

相好をくずしする 計略にはまってる

達筆のかすれるとこに來てかすれ

頭からけなし 足からおだて上げ

耐え抜いてつかんだ自信の歩が軽い

夕立が蟬のお喋り黙らせる

山路ふとわけありそうな比翼塚

愛情の結び目しかとたしかめる

初節句長いよだれが垂れさがり

じよろの水双葉双葉へ話しかけ

松籟に抱かれて安らかな眠り

古城趾は語らず松に語らせる

橋桁に松がはえてる瀬戸の橋

耐えること名も無き石に教えられ

信じ合う心に青い空がある

地にかえるうれしさを舞うばたん雪

無欲淡々余生の四季に詩がある

ちび筆で画く残照へ夢を添え

句百選

智子 出小

遠い日の海鳴りがする夜の鏡
道連れが必ず傘を持つてくる
花菖蒲女に勇気のいることも
妻という女で終生名をもたず
樹を伐った日から聞える風の音
楽器屋も花屋も応援してくれる
新しいカレンダーほど強くなし
男と女川が流れてゆくように
これからの百年を言うおそろしさ
山に来て他人と水を分けて飲む
みかんの頃は蜜柑を送ってくる絆
一緒には死ねない夫婦茶碗かな
少々のことでは笑わないボスト
腰掛けて石は他人でないぬくみ
にぎりめし母の祈りのかたちして
縄飛びの出来た自信を忘れない
日曜日の象は子供がほしくなる
友達と一緒に齢をとってゆく
雑巾がいつも乾いているわたし
いつまでも親身な風をもつ団扇
子を山へ送ってからの風の音
よく笑う女で橋が渡れない
中年や父にやさしくなろうとす
真っ先きに冬が来ている仁王門
三月がゆらゆらゆらと経ちにけり

わたしの花にいつでも水をやりすぎる
山の絵を買ってやさしくなつてゆく
れんげ草祝うところがあればよい
ペランダで通天閣と通じあう
もっと大事なことを忘れているグイヤ
どしゃ降りの中でやすらぐ風見鶏
陸橋のいちばん星をふる里に
芽吹くものめふいて森を眠らせぬ
草花咲けば山は女を許すかな
旅愁とや丹頂鶴の細い足
もののはずみで廻るわたしの風ぐるま
月見草ひとりの湖をもつひとに
人形も齢をとらねばさびしかろ
鮎の絵のあたりは梅雨を寄せつけぬ
さみしくはない落書が書いてある
言いたいことあるまま夫婦三日過ぎ
人を指す不遜な指ももちあわせ
どの山の絵にもきれいな空がある
春は他人の花がきれいに見えてくる
友達になれる男にまだ逢えず
あじさい寺の冬を想像せぬことだ
読みたい本があると死ぬまで思うだろ
傷ついた日も小鳥屋の小鳥たち
西瓜割るときの期待が今もある
ひとり相撲の雨がしずかに降っている



お好み焼きがふわつと匂う路地を抜け

三日前とおんなじことを書く日記

亡母の帯締めると海へ辿りつく

酒を飲まぬ人がどこやら父に似る

方言の真ん中にある鍋料理

何を祈ったのかと聞く男

楽天家の言う通りだと思ふなり

妻の言う通りに雨が降ってくる

夾竹桃の蕾のような運がほし

一筋の川の如くに添い遂げる

風花の舞う日を父の忌と憶え

故里の一本の樹を父とする

美しい錯覚のまま秋になる

もう母の掌には戻つてこぬ手毬

浅からぬえにして花に水をやる

母が死んでそれから母の夢をみず

大人にはいまだになれぬくすり指

玄関を出るとき男は空を見る

玄関を出るとき女は振り返る

潮風は男嫌いにしてしまう

夫より抱擁力のあるポスト

出会いからひとりの傘が重くなる

風呂に水満たすようにはいかないぞ

兎より愚かになつてよく眠る

一日を大切にすると水を撒き

人妻の素顔は知らぬほうがいい

決断を下すと檸檬はレモン色

扇千景のように光らないけれど

好きになれない自分の顔に化粧する

返つてこない本のことなど思う秋

父が怒っている虫が啼いている

秋が来て沼は深みを増すばかり

駅前のポストに入れておく手紙

晩年のドラマは陽気なほうがいい

向うの橋とこっちの橋で行き違う

風船の脆さを知らぬ息子たち

立ち直れそうな五月の風の中

眠られぬ夜の水仙が土を割る

コートの襟立てて愚かなこと想う

身のうちの鶴を放ちて昇天す

逝つてからの父には無理が言いやすし

長い手紙を旅の終りのように書く

あらかたのこのは終りぬ袋帯

諍うた夜も枕が二つある

雑念の雲がずしりと動かない

数珠の輪をくぐり抜けても許されぬ

山の絵の下で今夜も眠ります

かたくなと思うてならぬ老母の下駄

七十はさほどに遠きことならず

破れ傘一本持つて旅に出る

愛染帖

橘高薫風選

天下泰平は軍配ばかりにて
 冬の山山はいよいよ山らしく
 淡雪のいのちはあつてないような
 笠岡市 木山 遠二
 老梅の如く八十路の春を生き
 まだげぬつもりへ耳が遠くなる
 今治市 月原 宵明
 一滴の眼薬さして過去にする
 横ぶれがきついと思う赤字線
 和歌山市 中尾 まゆみ
 恋に愛辞書を引いてはみたものの
 春だもの仁王よ笑つてくださいな
 土佐市 海地 大破
 ともだちはひとりもない栗のいが
 きりぎしであしたのことを忘れるか
 高知市 西川 富恵
 往時茫々炎のひとつもいたけれど
 山頭火私を呼んでいるような
 富田林市 岩 田 美代
 寒明けに赤いお茶碗ひとつ買つ

カステラを切つてやさしくなつて来る
 岡山県 白岩 文衛
 これからの命を思ふ塩昆布
 煮こごりが食べたし妻は笑うけど
 豊中市 田中 淑子
 てんぷらも鰻もすしも目で食べる
 伊予柑の皮傷つけて香を貰てる
 鳥取県 福田 あや子
 ロボットが愛を取り持つチョコ作る
 脱税を吉相印にばらされる
 旭川市 朝倉 大柏
 本当に歩調とりだす玩具の兵
 休日の雨に鎧を干して寝る
 鳥取市 河村 日満
 号令をかけても動かない五体
 仮想敵を指さす風見鶏の芯
 米子市 八木 千代
 言いそびれたこと一つある落椿
 落椿もいちど咲いていいですか
 宝塚市 丸山 よし津
 障害を持つ子の母の明るさよ
 満足な現在位置の○印
 鳥取県 堀江 正朗
 湯加減を聞かれただけで温かく
 眼に力入れても見えぬ箸の先
 大阪府 小出 智子
 花の散るまでにはしよついのち乞い
 七転び八起きの傷を舐めながら
 大阪府 神夏磯 道子
 北山杉そんな昔もあったつけ
 以下余白いつそ真赤に塗りたいな
 和歌山市 西山 幸
 亡母の日は小さく慎み深く居る
 はんとうの孤独独つてる常備菜
 西宮市 奥田 みつ子
 日本画を見て日本人だと思つ
 夫婦箸がまん較べを見続けて
 富田林市 藤田 泰子
 原子炉を抱いて近づく星もあり
 おみくじを結んだ枝に芽の兆し
 大阪府 西森 花村
 陰なんかあつてはならぬ鏡ふく
 角とれてからの氷は解け速し
 岡山県 土居 耕花
 原因は酒と檜の中で聞く
 内職の疲れ職場へ来て癒やし
 吹田市 横山 青果
 夫にも付けておきたい背番号
 腕章を付けると男忙しそう
 京都府 都倉 求芽
 拝む手で奪い合つて鈴の綱
 話すのはよそう夢はあくまで夢だった
 大阪府 清水 康恵
 父と子が話をしてるパチンコ屋
 あわてもの花のつぼみがふるえてる
 豊中市 田中正坊
 新人と言われててれる六十歳
 眠れない眠らなければ明日は来ない
 米子市 青戸 田鶴
 旅の終り故郷の風を恋しがり
 慈悲の瞳へ般若の面をそつととり
 鳥取県 鈴木 村颯子

気の荒い人に飼われた牛だろ

青森県

岩淵 一星

末孫に催眠術をかけられる

鳥根県

小砂 白汀

注いでも注いでも海河を呑む

大阪府

松尾 柳右子

不況風タクシーからも励まされ

大阪府

朝倉 利義

六十四中途半端な齢となり

大阪府

堀江 光子

祝杯のあと別離あり花の影

奈良県

堀江 光子

セカンドライフ名刺ぬき握手ぬき

町田市

竹内 紫緒

妻の出すチョコは余燼の色をして

吹田市

西川 景子

衛星のカメラと核のかくれんぼ

奈良県

江口 度

電卓で愛の破局の値をはじく

高知市

北川 竹萌

堆肥舎が車庫に変わっている故郷

伊丹市

榎谷 寿馬

受験近し節分のすし太く食う

八尾市

高橋 夕花

母の難泣くかも知れぬ華燭の日

豊中市

満仲 きく子

うつむけど主義主張もつシクラメン

藤井寺市

赤木 和子

客席を見て前座まで手抜きする

名古屋市

越村 桔梢

飽きられて人形墓場にも行けず

裁かれてひとりの朝の髪を梳く

尼崎市

田中 晴子

香を焚く部下の遺影が切なくて

吹田市

西岡 豊

想い出が時どきのぞく小引出し

高知県

赤川 菊野

梅の頃いちご狩りする話題なり

藤井寺市

児島 与呂志

耳のお地蔵さん耳が欠けている

京都市

松川 杜的

算数のときは聞かない計算機

今治市

新居田 胡顔子

きな臭い匂いが還る日本海

高知県

山下 登舟

思い出を語れば溶ける雪うさぎ

米子市

小西 雄々

乙女椿と愛を安売りせぬ様に

米子市

政岡 日枝子

お流れの特級酒よりコップ酒

浜田市

中川 幸一

孫たちの笑顔うかべていちご買

西宮市

松本 一郎

屈指の心に浮かぶ蜃気楼

羽曳野市

吉川 寿美

小正月友の恋しい梅一輪

松原市

佐藤 藤子

蛇口からポトリポトリと落つ予感

兵庫県

辻 文平

喜怒哀楽激しい人と居てつかれ

宝塚市

吉田 笑女

淋しさに茶碗酒

平田市

久家 代仕男

近代史笑う埴輪が口あけて

米子市

田中 亜弥

人生の終りさらつと欲を捨て

米子市

大塚 せつ子

早春の雪に紅梅耐えている

大阪府

林 露杖

宝石の似合う白い手みる妬み

鳥取県

宮本 佳女男

居眠りの醒醐味を知るどい二人

米子市

堀江 芳子

餌もらう家鴨は夫の耳に鳴き

鳥根県

井上 照子

合った目の温もり残し今日暮れる

吹田市

はつ絵

産声へともした灯り信じてる

西宮市

藤森 小雅子

イヤリング軽く噂をききながす

大阪府

池田 半仙

小さい花ちさい笑顔で和ませる

奈良県

真喜内 実

六十路春これから咲く花数ええる

高知県

松岡 三吉

熟年の腹は八分でおさまらぬ

高知県

仲井 素水

亥の男寅の女房に飼育され

富田林市

中村 優

ハイとしか言えぬ出社の八時間

倉敷市

藤井 春日

母となり妻のペールを剥ぎ初め

高知県 小沢 幸 泉
ちよつと一パイいつもの時刻になりにけり

名古屋 藤井 高子
軽く翔んでみぬかと羊雲誘う

東大阪 市場 没食子
楽しんでたのしんで雑煮餅咽喉越させ

奈良 村上 春巳
あほらしい話シンナーで死んだとき

唐津 仁部 四郎
三次会謀叛の判三つ減り

唐津 浜本 ちよ
万一の一でこの世は面白し

米子 林 瑞枝
も一つの影投身を繰り返す

奈良 森田 カズエ
腹心のメモ一行に暴かれる

羽市 三宅 ろ亭
高説は聞くまい身近な話聴く

岸和田 芳地 狸村
ベン先に力がこもる保証人

尾鷲 渡辺 伊津志
滝静止して全山の声がする

貝塚 行天 千代
桜咲き心たのしく遠回り

兵庫 奥野 テル
でこばこな夫婦の長い長い旅

兵庫 森脇 和子
髪型が変わっただけのクラス会

水戸 上鈴木 春枝
夫起こす事から始まる冬の朝

鳥取 榊原 秀子

今更に若さ恋うてるあほらしさ

堺 大道 美乙女
ライバルに今日のいのちを感謝する

西条 片上 明水
職安を訪ねる他に手を持たず

益田 里本 たかし
マフラーが半額の日には雪が舞う

岡山 岩道 博友
耐え忍ぶ形に移る停年期

尾崎 伊藤 春子
落ち込んだ日は裏道に足が向く

大阪 北 勝美
すみません美徳の言葉にある不信

大阪 中西 兼治郎
朝茶漬夜はハワイの料理食う

高槻 田崎 素秋
気強さが人の噂に叩かれる

米子 大田 みさと
帰省の子おふくろの味つめていき

羽曳野 麻野 幽玄
始末書を取ればしおらしさが消える

岡山 原田 凡太郎
日向ぼこ老妻は相槌ばかり打ち

唐津 前田 広幸
スーパールの初売り「春の海」にのせ

八尾 山下 みつる
ストレスのかたまりも居る金ヶ崎

兵庫 脇田 米朝
思い出を辿れば国境に突きあたる

米子 野坂 なみ
年輪へ大樹の木目のまろやかさ

岡山 松本 元江
母の忌にぼとりこぼれる月半

寂屋川 宮尾 あいき
子の残した吸殻さえもいとしくて

熊本 紅葉山 巨足
圧力の字を書きながら腹が立ち

八尾 松下 蕉露
事故現場凍てた舗道に人体図

富田 植松 慶子
口ずさむ七草摘みに雪が舞い

西宮 津山 冬子
本心に小さな鬼が同居する

今治 八塚 三五島
松一本植えて閑居を締めくくり

★ 豊中市中桜塚三丁目13-15
投句先 千560 橘高薫風(ハガキに3句)

NHK川柳募集

課題「机」 選者 森中恵美子

締切 4月10日

(ハガキに三句以内)

投句先

大阪市東区馬場町3-43 NHK
大阪放送局「老後をたのしく」係

発表

4月24日(日) ラジオ第一放送
午前10時から

— 同人吟 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

香川 醉々

花時計すみれの様な人が待つ

高橋 操子

美しい思い出だったのではありませんか。

お世辞まで言う気など無いアルバイト

川上 溪水

その通り。早く旅行に行きたいのですぞ。

おみくじを結んだままで松が枯れ

遠山 可住

おみくじでは松食虫の子防にはなりません。

すこやかな眠りへ酒が脈を打つ

堀江 正朗

やっぱりお酒は百薬の長になりませんか。

生甲斐を貰う今夜の電話線

八木 千代

心の友から励まししの電話。有難いものです。

過去形で話せばすべてあなたかし

西出 楓楽

過去のことは美しいものです。舞踏会の手

帖

新聞のそれから改名ばかり来る

山本 規不風

門前市をなすことわざ通りです。

お雛様すこし冒険しませんか

西山 幸

冒険しないと加太で流されましようぞ。

寄り添うた写真しやあしやあ見せにくる

北野 久子

久子さんもうだったのではありませんか

？

生活がかかっているらし毛皮はミンク

岩田 美代

モデル嬢を羨しがってはなりません。

晩年の夫婦が出している答え

小出 智子

どんな答だったのでしょうか。聞きたいので

す。

職人が鉋を研いだ雨の午後

清水健 健司

あっちこちに釘を打たないでよかった。

遮断機が降りて別れを口ごもり

藤村 女

遮断機が上がるまでに考えを決めましよう。

自惚れが少し紅茶の底にある

村上 田鶴子

このひと私を好きなのではないか

広すぎる本屋に腹が立たないか

谷垣 史好

紀伊国屋の中で待合せはできませんからね。

不味いとも言えずあつさりしています

傍島 静馬

やはり年の功ですな。

リハビリの後のコーヒーとはかなし

高橋 夕花

大分良くなられたことと思います。

ひとり去り又一人去る指定席

大路 美幸

美幸氏ともあろうお方が、弱音は困ります。

主張して一番悪いくじを引く

飯田 悦郎

言い出しべえにお鉢がまわります。

あつさりとお敗北みとめた乾盃さ

中村 ゆきを

今度はしやあない。次はきつときつと。

貯金帳心経に似る空と無と

西森 花村

貯金帳は心経の代りに薬師寺に納めました。

受付を鹿の親子がきて覗き

森田 カズエ

さすが奈良の都ですなあ。

十二月やのにとばやく留置場

吉岡 美房

因果応報仏典にもそうあるのですぞ。

これからをひとりて渡る橋の数

福本 英子

演歌の文句なら八百八橋だぞです。

素通りを広角レンズに捕えられ

小砂 白汀

悪いことはできません。角さんでも捕えま

す。

追慕しきり紙人形の白い顔

西川 景子

白い顔では可愛そう。いい顔にしましよ。

第六回 全日本川柳大会参加と

十日の旅 (九)

西尾 栞

天童温泉の宿から、五十歩の所にバス停があつて、そこから山寺行のバスが出ていた。待つことしばし、約四十分程で山寺の入口に着いた。停留所の前の茶店「いずみや」へ荷物を預けて、愈よあこがれの芭蕉の「閑かさや岩にしみ入る蟬の声」の句碑のある山寺へと杖をひく。

石段は千十五段あるそうだが、行ききるかどうか心配しながら、二、三度息継ぎ休止してやつと蟬塚まで辿りついた。ここに有名な閑かさやの句碑がある。芭蕉もここで息切れしたらしい。立石寺（山寺は俗称）まで丁度半分の道のりである。ここに小さな茶店があつて婆さんが二人、蟬ならぬ声で山形弁で話していた。チットも解らない。ここで元氣つけのオロナミンドリンクと菓子の串さしをほおばる。時候が早いので、蟬は鳴かない。蟬は鳴かなかったが、手拭やのれんになつて茶

店にぶらさがつていた。

閑かさやのれんの蟬はつんぼ蟬

有名な句碑は既に風化甚しく、別に「蟬塚」の一石柱を建てて、蟬の声を偲ぶようですが、上を見上げると、赤土の山道が岩を嚙んでそそり立っていた。

「どうする？」

「どうしやはりますか？」と

もう、この辺でユーターンしたいそんな、お互いの言葉に上を見るより下を見ようと下山することにした。だから立石寺の本堂までよう行かず、蟬塚までの山道を、中村汀女吟の

石段の一つ一つの青葉かな
を上り下りして、河東碧梧桐吟の

水菊の花や慈覚の露の降る

の句に合掌し、水原秋桜子吟の

四山晴れ山寺のみぞ梅雨の雲

の景色を満喫して、元の茶店へ戻つて、そこで竹のゆめしと天ぶらでビールをのみ、婆さんは、ところそばを食べて、山寺駅発三時五十七分の列車で千歳、余目、と二回乗り換えて十七時十三分に鶴岡駅へ着いた。

今日の宿は湯の浜温泉の亀屋ホテルになっている。タクシーを待っていると、年配の婦人から湯の浜行の相乗りを申込まれた。同行をすると婦人は今日湯の浜温泉のS旅館で同窓会があるのだが遅刻したので大変助かったと大いに喜んでくれた。湯の浜温泉は今度の旅行の最終の宿で、交通公社委せの旅館だったが素晴らしい良い旅館だった。「ここならお気に入りですよ」という家内の皮肉な言葉に、十二畳の部屋の本床を背の座椅子にアグラをかけた。窓の外は日本海が展けて碧い波が見えるが耳ざわりな波の音はなく、閑かな明るい部屋は最終旅館としてゆっくりとくつろぐことが出来た。

旅十日やつぱり妻にある帰心

今日で愈よ最終コース、湯の浜温泉の朝湯にゆっくり浸つて、九時過ぎ宿を出る。羽黒山行のバスはこの町の郵便局の前から出る。郵便局は目の前にあるのだが、今日は生憎日曜日で貯金通帖が残念がついている。

もう既に乗客は列を作っていたが、バスは

定時に出発した。鶴岡の駅で乗客の入れ替えがあつて、十一時過ぎ期待の羽黒山へ到着。羽黒山は有名な割に低い山で海拔四一九メートルで、神社の近くまで着くのには驚いた。荷物を例によつて茶店に預けて、杉の樹立の中をぬけて、お詣りした。

権現堂の石段を上ったところで可愛い赤チャンを抱いた若い人に会う。自分は思わず手を出すと、両手を出して抱かれて来た、細

君は「アラノ男の人には絶対にゆきませんのに」と絶対に力をこめていう。僕の乳児撫術の特技を知らぬらしい。

「御主人は眼鏡かけている？」と問う。

「いいえ」

「髭生やしてなさんの？」と家内もきく。

「いいえ」という返事。

九カ月の赤チャンはニコニコして僕に抱かれてゐる。早速カメラに撮る。

赤チャンの名は「あゆみ」ちゃんである。

茶店へ帰つて、遅い中食のカレーライスを食べて、月山へは来月でないとバスが運行しないというので、タクシーを頼んで月山へと走る。なるほど、月山（海拔一、九八〇メートル）は三山の一つながら山は深く、ところどころに残雪がある。

月山は頂上まで行けず、途中の小舎よりエーターンして十八時二十二分の列車まで町をぶらぶらする。列車に乗ると「弁当、弁当」と売りに来て、ささにしきの弁当はここだけしか売ってませんよというのだが、そう言

われて見ると、夕食の時間ながら頼にさわつて買うのを躊躇していると向うへ行つてしまつた。新潟へ二〇時五十四分に着くと、今度は「こしひかり弁当、こしひかり弁当」という売り声でやつてきた。これをのがすと今夜はひびしになるので、こしひかり弁当を買つた。寝台車は、ここより連結して北国となり翌朝八時二十七分、ふり出しの大阪駅と無事に着いた。梅雨の六月というのに十日間は全くの快晴で、恐山で一滴顔にうけたのが雨らしい雨粒であつた。

さて、長らく誌面を汚しまして申訳ございませんでした。御愛読有難く厚く感謝申し上げます。

後日談であるが、十二月に「あゆみちゃん」にささやかなクリスマスプレゼントを送ると私等で作りましたという「ささにしき」の新米を送つてきてくれた。一期一会の出会いに格別に心に残るものである。

周遊券ストのバス券だけ残り

周遊券徹頭徹尾上天氣

「あゆみがこんなに大きくなりました」と歩いている写真の来るのを楽しみに待っている今日この頃である。

（終り）

新同人紹介（四月から）

浜崎万里

— 好郎・朶・薫風・酔々推薦 —

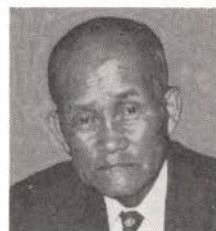
野田實

— 薫風・博泉・いつを・亜鈍推薦 —

田中正坊

田中淑子

— 朶・文衛・薫風推薦 —



浜田久米雄氏を悼む

昭和58年2月15日死去

法名 柳泉院浄悦久米雄居士
俗名 浜田太郎 享年73歳

追悼の辞

横山一声

私の工場の隣の食料品店へ久米雄さんはよく買物に來られた。その度に必ず立寄って頂いて柳談や世間話に花を咲かせていたものだ。去年の秋頃から少し身体の不調を訴えて居られたが、お酒がうまいから大丈夫と特有の笑顔で話しておられたのに去年の十二月十七日に入院され、病名は心筋硬そくと診断され危険な病状で面会も謝絶となっていたのだが、正月も過ぎた頃より快方に向かわれ、一月十六日の川柳大会に出席された方が次々とお見舞に行くとか大へん喜ばれ、笑顔で句会や状況など尋ねられる程の元氣になつておら

れたのに、二月十五日午前九時五十八分死去されたとの突然の訃報に接し茫然自失動転号泣その言葉を失いました。

久米雄先生は永年国鉄に勤務され、岡山駅助役、その他各地で駅長を務められ、功績章を授章され、勤続三十年で定年退職されましたが、その間転勤された地方には必ず川柳の木を植えて來られた。郷里吉永にも戦後の混乱した世相の中、昭和廿一年に備前川柳社を創設され爾來三十七年常に我々の師として川柳の本髄を限なく教授され今日に至りました。途中、備前市の誕生で吉永川柳社と名称は変更しましたが常に師として君臨され、その洗練された作風は拭い去ることの出来ない川柳味をいかに発揮されていました。

葬儀は二月十七日十三時より自宅で真言宗による仏式でしめやかにおこなわれ、川柳塔社をはじめ沢山の花環の飾られた式場には一般会葬者よりも、地元はもとより岡山市和氣

町他多数の川柳人が続々と参列焼香して最後のお別れを惜しむ行吉照路さんの弔辞に続いて私が涙をこらえて弔句を読み、最後のお見送りをしました。行年七十三歳まだまだという若さでご他界とは誠に残念である。ここにその逝去を悼むものである。どうか天上に有りまして何時までも我々をお導き下さいますことをお祈りすると共に、その靈の安らかに眠り給うことを心から希うものであります。

合掌

香煙の彼方に師の影遠ざかり

一声

浜田久米雄作品抄（句集凡人より）

握手した手がはなれないまま座り
凡人へもつたないなくも湯があふれ
ふるさとの道が曲つて居てたのし
常連がもう来るころの湯がたぎり
功績章汽笛のなかを歩いて來

嗚呼

柳泉院浄悦久米雄居士

川柳後楽吟社会長 行吉照路

十二月川柳後楽吟社の例会日に自宅でお倒れになったと連絡を受け心配していましたが、一月月上旬に家内とお見舞に上ったときは大変御機嫌がよく、枕元で近況を語る私に笑顔で答えられ、帰りしにはわざわざベッドに座り

なおし「照路よもう起きれるようになったぞ」と空元氣を見せたのがお別れでした。病状が急変した知らせを受けて二月十一日再度家内と共に馳せ参じましたが、面会謝絶で奥様とお話しただけでした。十五日に職場へ訃報が入った時は覚悟はしていたものの涙があふれ、あわててトイレに飛び込む次第でした。

凡人へもったいなくも湯があふれ
春の風猫のあくびがうつりかけ
また酒のとりことなるか花だより

悼 浜田久米雄氏

本 田 恵 二 朗

浜田久米雄さんの逝去を驚き、悲しみ、悼んでおります。色さまざまな思い出が、走馬灯になって浮び上ったり、消えたり、また浮んだり致します。

『ご先祖のたれに似たのか斗酒辞せず』

この句は彼をモデルにして作った句ですが、彼はわが意を得たりとばかり喜んでくれたあの笑顔が私の目の前にくつきりと浮び上って参ります。ひたすら「冥福を祈ります」。

縄のれんまだ酔うていぬ酔うていぬ
握手した手が離れないまま座り
等々大好きな句はたくさんあります。凡人句集の序文に故麻生路郎師は「吹けば飛ぶよな将棋のコマに、その一生を打ち込む人もおれば、僅か十七音字にその半生を惜しみなく浸る人もある」と書かれています。まさにびっしりカンカンであると思っています。

国鉄在職中は大阪、広島、岡山の現場、非現業を渡り歩き、川柳の種を蒔き、芽が出た頃転動して又種を蒔くの繰り返しで、広島川流会会長の石原伯峯、岡山ますかつと主幹大森風来子、その他大勢の良き花を育て、咲かせてこられたのです。照路は昭和二十八年入門して今日に至っていますが、入った動機と言えは川柳は二の次、例会の後のおたのしみで嬉しくて毎月欠かさず出席したものでした。二次会、三次会での魂のぶつけ合いで飲む酒は格別こくのあるものでした。

国鉄川柳会も四国大会より参加して以後家族連れで、揃いのベレー帽をつけて参加することに意義ありと、多数参加したのも淋しい思い出となりました。

先生の柳論の中で路郎師の句を例にとり

人生は悲しからずや左派と右派 路郎
を挙げ、世の中には右があるから左がある。その証拠に書道、華道、絵画にも右派と左派がある。……川柳の伝統を護るとすれば、先生の句を思い浮べて、むしろ「悲しからずや」

を「うれしからずや」位に考えて割り切った心になる余裕を持つことにしたいものであると言われている。

先生もつと長生きを願っていたのに!!葬儀の日弔辞を読みながら泣きました。

久米雄先生、何卒心安らかに眠り下さいませ。各地の種は花をつけつつあります。さようなら

合掌

久米雄さんと私

黒 川 紫 香

私のはじめて久米雄さんとお会いしたのは昭和八年頃、現在の大鉄川柳会の草分け大鉄局畔柳社へ水客君に誘われて出席した時で、当時は福田山雨楼さん御指導の許で、亡くなった植山九夫、岡田某人さん等錚々たるメンバーで活躍されていた。はじめは厳しい怖い人に見えた久米雄さんも馴染みになると磊落で言葉を飾らないお人柄が私を引きつけた。「いよう!」と手を上げていつも簡単な挨拶で済まされる久米雄さん。

大阪鉄道局から広島鉄道局に転勤され暫くお会いする事もなかった或る日、戦後の枕木不足で有数の生産地である中国山脈系の各地を買いつけに飛び回り、たまたま伯備線上石

見の業者と商談がまとまって一と駅岡山側の足立駅（現在は中間に一駅出来ている）で現物の栗枕木を検査することになった。

極寒二月、それも雪が降り止まない県境の山の駅である。特に寒い日であつたが急を要する品物でもあつたので業者、作業員を集めて検査にとりかかった。積んである枕木は凍てついてどうにもならない。枕木の検査というの是一本一本担いだり裏返しをしたりして寸法、品質（曲り、節の位置、割れ等）をたしかめなければならぬが四、五人の作業員では手頃な道具がないと動かない。難渋を重ねていると、

「いよう！ どないしてるんや」

と後から声をかけて来た人がある。振り返ってみるとそれが駅長の制服を着た久米雄さんだつた。岡山の方で勤務されてるとは聞いていたが、まさかこんな山の奥の駅長さんをして居られるとは思わなかつたので駅にも声をかけなかつたが本当に懐しかつた。

それからは久米雄さんの好意で、保線詰所から掛矢、鶴嘴等の道具を借りて貰い、作業も順調に捗つて時には駅長室で暖もとらせていただいた。作業の合い間合い間に路郎先生や在阪柳友の話も出てとても楽しい一日でもあつた。

一昨年、川柳塔社主催の『新年おめでとぅ会』に元気な姿で来阪され、生々庵先生と語られながら、遠く離れた席にいた私を見つめ

「いよう！」といつもの調子で高く手を振られていたのが私の瞳に焼けついて残り、これが本当のお別れになつた。

惜しい哉、淋しい哉また一人古い作家が消えてしまつた。どうぞ心静かに冥目される事をお祈りする。
合掌

久米雄さん

正 本 水 客

私が大鉄川柳会へ初めて顔を出した昭和8年は岡田某人、浜田久米雄さん等を中心に会を作つて半年ほどの頃だつたと思ふ。

乳母車いづもと違う景色へ出

失言が出そうに酒の座がはずみ

初産は足の裏まで母に見せ

などの句が久米雄さんの初期にある。

昭和14年、広島鉄道局の新設に伴つて大阪から転出、路郎先生、橋本緑雨さん等を迎えた送別句会では

臨時列車酔つた三々五々が降り
の軸吟を残している。

◇：ワイヤレスマイクが舞台で使われ始めた頃だつた。久米雄さんから手紙が来て、久し振りに大阪へ出たときにレビューを見たらマイクも持たずに舞台を動き回つて、大きな

歌声が響いてきたが、どういう仕組みになっているんだろうと言つて来た。電気関係に詳しい萬の君にも確かめて、久米雄も故郷へ引っ込んで了つて時代遅れになつたもんやと冷やかしの返事が書ける間柄だつた。

◇：路郎先生が元気で川柳雑誌をやつておられた頃、隣りをテーマにした秋の特集を組んだことがあつた。書き上げた原稿を持つて編集室へ行くと、先生は笑いながら久米雄さんから来た手紙を見せられた。当時、久米雄さんは確か伯備線の足立駅の駅長さんだつたと思ふ。足立は中国山脈の分水嶺にある淋しい駅で、駅長宿舎がボツンとある丈で隣りには何も無いから、隣りの原稿は書けませんと断り状だつた。如何にも生真面目な久米雄さんの性格が偲ばれる懐しい思い出である。

◇：今年の正月には君の年賀状が来なかつたから、去年の

いつまでの命両手で大事がり
が私には絶筆になつた。

川柳塔柳箋

一冊 二百 円
送料 二百四十円

— 水煙抄 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

宮園 射月芳

口下手な妻だからすぐお茶を煎れ

高杉 千歩

ウーマンリブとか女性上位とか男にとって何とも殺風景な今の世にこんな奥さんと居る男は幸である。情愛は口数が多い程に味気なく薄れる。何かしてあげなければと思うその心根が嬉しい。それだけで十分である。そんなお前を何よりも頼りにしている。それとなく賀状にさがす人がある

春城 年代

誰にでも秘め事はある。秘めているから胸がときめく。賀状の束の中にその人を見つけた時に少し慌てる。気付かれないようにさりげなく目を落として次を繰る。後で一人の時にとじとそれを眺め自分の心を覗いている。

踏切りがあつて疎遠な仲になる

角野 かず子

踏切りは閉つてなくても或る緊張とこたわりがある。平らな道もそこで途切れてしまふ。

越える度に少し気張りがいり、段々億劫になつて何時の間にか遠い向う側になつてしまつた。矢張りそこが肌が合わなかつたのだらう。抵抗のできない血に八つ当たり

関口 幸子

皺寄せはいつでも一番弱い所に来る。この人も口下手な人であらう。でもその時の背中に精一杯の表情を持って怨じ訴えている。

失語症日にち薬はまだ効かぬ

田中 晴子

皿を割つたこたわりはまだ仲々消えそじらない。思ひはまとまらず言葉にもならない。或る時瞬間的に良くなるのだけれど、今の所はいつ言葉を取り戻すのか見通しも立たない人形に洩らした言葉にうろたえる

佐藤 藤子

ふつとした空虚の時に自分でも意識してなかつた本音を吐いた事に気付いてうろたえたのです。人間は脆いものなのです。

立つたまま夫に嘘つく夜の冷え

西村 かずみ

愛しているのに、そして夜は和解の時なのに、何とも寒々とした風が吹き抜けるのです。

寶石の値段に酔っている女

奥山 美智子

後戻りさせてウインド春の柄

工藤 路子

値段が高い程寶石は神秘に見えて来る。うつとりと女は寶石の中に取り込まれている。買ったつもりはないけれど、気に入った春の柄に引き戻されるのである。そうして商店街

を女と歩く男は何時も待たされるのです。ひとり旅なべやきうどんが欲しくなる

清水 康恵

鍋焼うどんには色々な具が入っている。それをひとりでゆつくりと食べたい。夫の留守の時に頼みついてそんな事を思っている。しめくくりしたい心がガラス拭く

津山 冬子

ここらでビリオドを打とう。そう思つて心を鎮め落ち着かせようとしているのである。

止り木におんな一人の憂さ晴らし

越村 桔梢

燃え尽きてみようか胸のさわぐまま

宇野 昭代

女が独りで飲んでいる姿はこわい。凄じがする。おとなしい女程強い反逆心を抱いている。酒で憂さが晴れるならどうぞ心ゆく迄飲んで下さい。心を鎮めて下さい。

酔けさを残して最後の娘が嫁ぐ

吐田 公一

フルムーン夢ですポスター横目でみ

山田 久子

その内きつと二人で行きましようよ。

寄りそうて家族の如く福寿草

北川 民子

桜咲く頃の約束温める

松本 元江

もうすぐ春、きつと良い事があるでしょう。巧まずして女を表わしている句ばかりでした。出来る限り女心に迫ってみようと思張りましたが所詮僕には無理なようでした。

アメリカを覗く

< 7 >

山 本 規 不 風

名残り惜しいシスコの覗き

アメリカのジャングルか？と一瞬錯覚を起す中を、バスはゴールデンゲートパークに着く。見渡すばかり花園の向うに白亜の殿堂のように聳えるのは温室である。赤黄紫と色さまざまな華やかな広場にどつと降りて花の妖精の抱擁に浸る。ここゴールデンゲートパークは、19世紀迄は広大な砂丘であつた。植物学者がプランナーとなつて開発され緑の大公園として仕上げられたのだと言う。広さは日比谷公園の25倍もあり人工公園では世界一の折紙付きである。園内に繁る植物は五千種類以上と言われ、百年の歳月を経て鬱蒼と繁り歩を進めば深い山中に迷い込んだような気になる。

この広い園内には植物園、水族館はもとより、アメリカ野牛が飼育保護されている。特に今アメリカで流行となつている鑑賞用の日

本庭園は、また日本国内と違ったユニークな味わいが何とも言えない新鮮さを匂わせる。更にゴルフ場やストー湖のボート、或はモリソンプラネタリウムやテニスコート等あらゆるスポーツ施設が完備されている。突如として花の妖精のような美女の一群が颯爽とサイクリングコースを疾走してゆくのに目を奪われる。乗車を急がされて愈よゴールデンゲートブリッジに向う。金門橋である。明るいレンガ色の鉄塔が一本霧に浮いている。

妙な橋だなと思ひながらバスから降り立つて公園を見渡す。丁度霧が立ち込めるタイムなのだ。これは運の悪い事だと思ふ間もなく薄日が射して来た。木の葉が揺れる音がする、と思うとみるみる霧が流れる。「忽然と現れる」の言葉の通り、大金門橋が二本のダブル支柱を見せて目前に浮んだ。空も海も紺碧。今迄の霧が嘘のようだ。金門海峡を跨いで対岸のマリン群に架かるゴールデンゲートブリ

ッジは全長一、八〇〇米。吊り橋になつてゐる部分だけでも一、九六六米あり、規模、美しさ、型等どの面からも世界一とヤンキーの鼻である。文字通りシスコのシンボルとして恥かしくない偉容だ。

高さは日本最高のノッポビル、サンシャインより一寸低い二三四米である。約三分間で車なら走れるが、歩くとタツプリ四〇分はかかる。橋の途中から大小様々の船の往来を見降すと、まるで宇宙遊泳でもして見渡しているような爽快な気持ちで、何とも言へぬ印象が忘れられない。但し高所恐怖症の人は要注意である。足が震えてガタガタとして止まらないう由である。だが人間死を決すると心が変わらしい。今迄に橋上から飛び込み自殺をした人は初めて七五〇人もあるが、助けられて助かった人は、たったの十人である。その中の七人迄が女性なのだ。汝男よ哀れではないか。両端の橋詰めに展望台があつて、見る場所によつてこんなにも趣きが違ふものかと驚く。アチラコチラと橋上を車で往復してシャッターを切る。通行料が普通車で片道一ドル、大型で二ドル取られるのよ、と言うわけでガイドさんに叱られる。金曜日だとその倍の二ドルと四ドルを要する。なぜ金曜日が高いのか？と聞く、諸説雑多である。要するにゲンの悪い日で客が少ないので倍にする、と言うわけで、どこの国でも大安や赤口に似たような事を多く用いているのが判る。

明るいレンガ色の支柱のテッペンでいくつ
かの人影が蟻のように見えて動いている。一
年に一度のペンキ塗り変え作業との事。15人
位のチームで毎日塗ってゆくと出来上がるのが
丁度一年目になる。毎年一回塗り変えるのだ
が、結局一年中毎日どこかの部分を塗ってい
る事になるのである。大きな橋だ。

丁度その時絵のように美しい可愛い観光
船が橋の下を通る。海上からの金門橋が見ら
れるというので早速にそのカードに予約する。
これはフィッシャーマンズワフの棧橋から
乗船して、サンフランシスコ湾を一周して海
上からのシスコの見物は又格別の優雅な印象
が心に残る。我が日本の堀江氏が到着したマ
ーメイド号の記念すべき港がある。そのヨッ
トハーバーを右に見ながら旧砲台跡から金門
橋の真下をくり抜けて旋回する。やがてサ
ウサリートやチブロン街を左岸に見ながら
ベイブリッジへ出る。そして陸に沿ってスカ
イラインを眺めながら戻るコースである。

その途中に、一九六三年まで連邦刑務所だ
った小島が映画「アルカトラス島からの脱出」
で有名になったアルカトラス島が見える。彼
の有名なアル・カポネもマシ・ガン・ケリ
ーも収容された事がある所で船の上から見
ると白壁に茶色のカラーの屋根で立派な別荘に
見える。湾内は強い風が夏でも寒いくらい沖
から吹きつけるが、約一時間の観光はまたた
くまに夢のように去ってゆく。ゲートブリッ

ジの小パークの真ん中に旧砲台跡に残る大砲
が厳然と太平洋を臨み日本に向けて砲身を伸
ばしているのを見ると、忽ち幻想の中で
大型ミサイルに変身して来る想いをどうする
事も出来ない。

金門橋の大砲日本に向けてある

ゴールデンゲートブリッジと共にシスコの
名所の双壁がフィッシャーマンズワイクで、
常に新しい魅力が湧いている港町。一九世
紀のイタリア移民が波止場を開いたのに始ま
り、今世紀になってシーフード・レストラン
やみやげもの店ばかりの観光名所へと変身。
小型漁船のマストが林立し、かもめが飛び交
い三千軒余りのシーフード・レストランあり
露天の物売り等でゴッタ返す賑やかさである。
近くにはロウ人形館やシスコ海洋博物館をは
じめ二大ショッピングセンターのギラルデリ
・スクエアと「ザ・キヤナリー」もあり「東
京スキヤキ」や「大和すきやき」等一流の味
と設備の店も名物になっている。

シスコ名物にチンチン電車に似たケーブル
カーがブロードウェイからフランシスコ通り
を通り、ワシントン通りを経てボートマス・
スクエアに至ると「サンフランシスコのチャ
イナタウン」の唄で有名なタウンが楼門の二
重屋根に祖国を象徴した街の繁栄に目をみは
り、ブッシュ通りを真つすぐに走ると五重の
塔が懐かしいジャパセンター日本人町に着
く。日本の産業と文化を紹介する為に造られ

たその周辺には日本料理店、スーパー、商社、
銀行等も揃い4月には桜祭り、7月には盆踊
り、9月には秋祭り等が盛大に催されて異国
に咲くニッポンのオリエンタルムードと言っ
たところである。

この他、サウサリートやパークレー等楽し
いご紹介もあり、もう少し最終編として詳し
く申し述べたいと思いましたが誌面の都
合で今回にて終稿とさせて頂きます。色々と
激励や楽しいお便りを頂きました方へ感謝申
上げます。併せて永い間ご愛読賜りました皆
さま方へも厚く御礼を申し上げます。有難う存
じました。

(完)

?

川柳のしおり

橘 高 薫 風

川柳全集（12）「西尾某」が構造社出版から刊行になった。それは作品と川柳概論から成るB6判百六十頁の小冊子ながら、先に発刊になった川柳全集（2）「麻生路郎」の形に影の如き存在と感ずる時、少なからぬ意義があるように思われる。

著者は昭和六年七月二十五日に発会になった阪大川柳会に入会し川柳に馴染むことになった。その初句会での席題「温泉」で、いきなり第一席に入選した。言うまでもなく麻生路郎先生の選である。

温泉や座り羅漢に寝る羅漢
二十二歳の若さであった。その頃の句に、
若旦那女将が出ると他愛なし

蚊柱の崩れて檢視五六人

題詠であるに拘らず、若さに似合わぬ人生経験の豊かさや視野の広さが際立っていた。指導者がよく、仲間がすばらしかったので、素質はぐんぐん実を挙げて行く。今で言う「川柳雑誌」のエリートコースを突っ走ったわけである。

少し話を脇へ外らし清水白柳さんの作品について述べる。それは本人も仰言っておられたことだが、題詠と雑詠との渾然一体の境地で、

春日遅々として仁王さん眠むくなり

は、さる奈良に於ける大会での兼題「仁王」の天位の句であった。何べんも奈良の仏寺に親しみ、はぐくんでいた大きく混沌とした映像が、題に触発されて名句を生み出したのである。これは須崎豆秋さんにも言えることで知性や感性の調和、諷刺や滑稽と音律の調和、そういった諸々の作句上の要諦が、路郎先生の指導で骨まで沁み込んでしまっている。著者もそのような「川柳のだし」の沁んだ作家の一人であった。句柄の軽重、柔剛もまた自在であるが、全体を通して「穿ち」の背筋がずっしりと太い天井の梁のようにゆるぎなくある。

人恋し人煩わし波の音

一歩出すれば我れ旅人となる心
と旅情に富み、

二次会で土産の鹿の角がとれ
お互いに中毒ですなど酌きこぼし
と酒に目がなく、

あの晩の風邪よと女うれしそつ
ハンドバッグ迷える心バチつかせ
と女性にやさしい目を注ぐ。

張り替えた障子の中に母います
最後の最後の味方は妻なりき

意見する儂がまだまだ遊びたし
と、これは家族への骨肉の真情が余すこと

ろなく表現されている。

牛の瞳に人間何をあわてとる

観節水晶の型にかかれたり

挨拶のものをもらった声となり

美容院から戻りあわてまいことか

たくらみへ一ト筋下りる蜘蛛の糸

うがちの駆使の縦横さうなるばかりだ。

川柳概論の項には、「一分間の柳論」で

『恩師麻生路郎先生は「川柳は人間陶冶の詩である」と教えて下さった。

我々は柳論を闘わすのはどこまでも闘わしてもよいが、そのために人間関係を断絶しては、川柳をやっている価値はない。川柳をやる大らかな愛の眼こそ、愛の心こそ、川柳が立派に伸びていくのではないか。

川柳には寛容の精神と抱擁の心があつてこそ、命ある句が生まれるのである。

人類は悲しからずや左派と右派 路郎

という句を、先生は詠んでおられる。そして、「これが私の世界観である。私は常に川柳に生きることによって、平和な世界を生み出したい念願に燃えているものである」と仰言っていた。

もう一度言おう。

川柳は人間陶冶の詩である。
仲良くしてゆこう。」

と書いておられる。争い事を好まぬ田舎な人格がよく表われている一文で、とりもなおさず川柳塔の精神を披瀝されたものである。

川柳のしおりとも受け取れる一冊の西尾某作品集を皆さんの机辺に備えて置きたい。

柳界展望

(原稿締切毎月末)

集録・香川醉々

■日川協通信(大会案内)

◇下田市内観光

6月11日(土)伊豆急下田駅乗車口バス発着所前に集合。集合時間午後一時厳守(所要約二時間の予定)

コースⅡ城山あじさい公園、海中水族館、吉田松陰像、剣花坊碑など。ホテル伊豆急午後3時半到着予定

◇大会前夜祭懇親パーティー日時・6月11日午後六時場所・ホテル伊豆急「シアター太陽」の間

費用・六千円パーティーのみ参加の方は五月末日までに申込みのこと。

宿泊・下田市白浜ホテル伊豆急・電話〇五五八二二一八二一

市内観光、懇親パーティー(夕食、宿泊(朝食付き))として(一万三千円)を4月20日限り申込みと共に送金して下さい。

郵便送金の場合

振替口座番号「東京一五五四七七下田川柳黒潮吟社」

銀行送金の場合
静岡銀行下田支店普通預金口座番号「二二六四八下田川柳黒潮吟社」

その他の場合
下田市西本郷1丁目10の18藤原経理事務所内、下田川柳黒潮吟社 藤原時化緒

■川柳塔島根県同人会(第4回)は出雲市今市本町出雲市社会福祉センターで3月6日盛大に開催された。

■むらかも観桜大会が本次町福祉センターで4月3日午前11時開催予定。川柳塔より紫香、雀踊子、メ女諸氏の他出席予定。花の蕾を味うのもまた風流なことである。

■「川柳わかあゆ」(わかあ

ゆ川柳会機関誌)このたび島根県本次町図書館蔵書に指定され納本要請を受け、金巻納めた由。これも川柳が文学作品として認められた一つの証と受けとめることができる。

■前田美巳代句集「しずく花」発刊記念川柳句会日時 4月10日AM10時30分会場 姫路市総社本町122NHK鉄塔前・姫路市民会館3F中ホール

兼題 夜 小出 智子選
実 前川 津子選
婦 藤川 良子選
打 荒木 秋栄選
餅 村井見也子選
魔 時実 新子選

出句 各題2句
会費 2500円 句集し
ずく花・発表誌呈・各題秀吟呈賞

主催 川柳「一枚の会」
徳島まつり春の川柳大会日時 4月10日(日)午前10時会場 県郷土文化会館

宿題と選者
皆 三浦 弘二

皆 三浦 弘二

咲く 松尾 五山
百 仁尾 仙花
散る 中尾 住吉
乱れる 高岡 正人
妻 久保ひさし
庭 岸下 吉秋

出句 各題2句以内
会費 五百円

■時の川柳社の第15回東洋樹川柳賞は森中恵美子さんが受賞と決定。5月8日(日)に神戸市立福祉センター婦人会館で贈呈川柳大会が開催される。

▽同人・柳友消息△
▼中島小石さん(名誉会長令夫人)は、大阪医大付属病院に入院加療中のところ2月初旬手術、経過良好である。一日も速やかな快癒をお祈りします。

▽書信拝受△
▼小砂白江、藤井明朗、浦野和子、越智一水の皆さん

▽句会案内△
■菜の花句会
時・4月10日(日)夕6時場所・八尾神社境内西郷会館(近鉄八尾駅下車)

時・4月10日(日)夕6時場所・八尾神社境内西郷会館(近鉄八尾駅下車)

兼題「葉・ガス・欠点・さくら・ボスター」。
■南海電鉄川柳部
時・4月13日(木)夕6時場所・南海会館ビル南海電鉄本社地下食堂
兼題「路線・伊達(タテ)求人」

■南大阪川柳会
時・4月19日(火)夕6時場所・寺田町高松会館
兼題「ガイド・疑問・ぐる・限度」

■東大阪川柳同好会
時・4月23日(土)夕6時場所・東大阪中央公民館(近鉄永和駅前)
兼題「初心・祝辞・骨組・カローリ」

■堺川柳会
時・4月12日(火)夕6時場所・堺青少年センター
兼題「花粉・練る・ときめき・素顔」

■富柳会
時・4月23日(土)2時場所・富田中央公民館
兼題「母・遊ぶ・余白」

時・4月23日(土)2時場所・富田中央公民館
兼題「母・遊ぶ・余白」

時・4月23日(土)2時場所・富田中央公民館
兼題「母・遊ぶ・余白」

罪が罪呼んだ絆がからみ合い
女の手絆の中で荒れている
名乗れずとも心の奥に通うもの
浄土まで絆をつなぐ孟蘭盆会
終生は親子の絆たよるのみ
断ち切れぬ絆親です子どもです
胎動へ弾む絆の毛糸玉
断ち切れぬ愛の絆が生むドラマ
耐乏のくらしに母と子の絆
絆深めて再び鶴が舞い戻る
飛び出して来たが母のこと父のこと
花いちもんめ絆をつなぐ会に出る
核心に触れるとゆるみ出す絆
結んで開いて親子の絆離せない
何か用作り娘の嫁ぎ先

柳五郎
悠也
たず子
久仁於
星斗
実

藤村 亜成 選

燃える

不況の街真赤に燃える彩で描く
老いてなお燃え続けよと檄とばす
点滴で最後の命の灯を燃やす
小さな桶持っておんな燃えている
燃えつきてかすかに揺れるイヤリング
燃えるもののおさえて寡婦の束ね髪
果しなく燃え青写真白くなり
まだ燃える火種を抱いていて無口
春の音燃えると嘘がまたたまる
篝火が燃えつき元の闇もどる
望郷に燃えて異国で骨が哭く
若き日を燃えて渡った満洲だか
信者の眼護摩の火高く燃えさかる
アマチュアの窯はたびたび覗きたし
山焼を鹿は哀しい目で眺め
燃えてくる慕情へ固く帯を締め
クリスタルグラスで燃える赤ワイン
追伸へちらりと燃える胸の中
ガラスの城に燃える女の影がある
ザイル手にいのちを燃やす風が鳴り
まだ燃えるものもついでアテランス
アルバムに燃えた昔がはつである

住

早苗
豊
うの子
重人
泰子

崩れゆく絆積木がゆれはじめ
友情の絆のびたりちぢんだり
親と子の絆うすれた風の街
絆とはこんな怖い目鼻立ち
もがいたらがんじがらめになる絆
花咲いて風の絆を疑わず
地 可住
父の貨車母の貨車との協和音
天 枯梢
躓いた石が絆を強くする
軸 寿美
ランドセル花の絆と赤いくつ

可住
枯梢
寿美

不況の街真赤に燃える彩で描く
老いてなお燃え続けよと檄とばす
点滴で最後の命の灯を燃やす
小さな桶持っておんな燃えている
燃えつきてかすかに揺れるイヤリング
燃えるもののおさえて寡婦の束ね髪
果しなく燃え青写真白くなり
まだ燃える火種を抱いていて無口
春の音燃えると嘘がまたたまる
篝火が燃えつき元の闇もどる
望郷に燃えて異国で骨が哭く
若き日を燃えて渡った満洲だか
信者の眼護摩の火高く燃えさかる
アマチュアの窯はたびたび覗きたし
山焼を鹿は哀しい目で眺め
燃えてくる慕情へ固く帯を締め
クリスタルグラスで燃える赤ワイン
追伸へちらりと燃える胸の中
ガラスの城に燃える女の影がある
ザイル手にいのちを燃やす風が鳴り
まだ燃えるものもついでアテランス
アルバムに燃えた昔がはつである

明水
素石
御前
はつ絵
テル
美乙女
景子
比呂志
綾珠
洋々
弘朗
みつ子
伊津志
カズエ
凡太郎
泰子
芳子
枯梢
きく子
山久

立ち退きを拒みカンナの燃える庭
どんと焼きつつけば火柱躍り出す
キャンアファイア星空の星焼きつくし
燃えあがる炎は遠し中近東
過去消して未来へ燃えろとどき
世の中を知らぬ正義が燃えている
五体みな燃やして赤坊の歯が生える
燃えつきた頃に素直に笑えそう
老残の埋火正義になら燃える
燃えさせぬ冷い風を彼は待つ
燃ゆるもの消す寝返りの数を打つ
指切りの指はどんどん燃えてくる
燃えかすて立ちのき先が書いてある
美女を見る美女の瞳は青く燃え
宗教がちがうどちらにも燃えている
姑も燃えるふたりのシルエット
静止する竹刀面具の奥で燃え
燃えつきて闇一段と深くなる
底辺に埋まった恋も燃える春
能面が静かに燃える足さばき
石青く燃え先祖の遺志燃ゆる
軸 規不風

初歩教室

題 — 奉仕 —

本田恵二郎

採算を度外視などせぬ奉仕品
 (採算はちゃんと取つて奉仕品)
 ごほうびが奉仕作業はかどらせ
 (お駄賃をあての奉仕はにせものだ)
 (本当の奉仕にお駄賃などはない)
 (ごほうびで嘘の奉仕をでっち上げ)
 買って出た奉仕へ世間の狭い視野
 (買って出た奉仕へ世間の冷たい目)
 マスコミに載りそな奉仕を選っている
 (新聞に出そうな奉仕の種探す)
 さりげなく奉仕が出来たらなと思ひ
 特売に髭の紳士も列に入り
 (奉仕値へ髭の紳士の顔もある)
 高速道サーヴィスエリアの茶の旨さ
 サービスの行きすぎかへてきられる
 (ゆき過ぎの奉仕は眉をひそめられ)
 奉仕する喜びは銭で買えません
 奉仕出来る健康謝してまた奉仕
 (奉仕する喜び疲れなど知らず)

久子

同

好夫

同

佳女男

同

ふみ

同

千子

同

報酬の無い汗だから心地よい
 (報酬を求めぬ汗は惜しまない)
 日曜は家庭奉仕に決められる
 (家庭奉仕で日曜日満ち足りる)
 奉仕するつもりが奉仕されていた
 奉仕だなんて老いの健康法を
 (奉仕などじゃないよ老いの健康法だよ)
 何気なく習った手話で奉仕生き
 サービスのしすぎ却つて迷惑
 (過ぎたるは及ばずサービスうとまれる)
 喜びを共に分か合っている奉仕
 (喜びを仲良く分けている奉仕)
 奉仕から心の扉開けてる
 (奉仕から心の扉開けそめ)
 神だけが知っているからそれで良し
 (神さまに奉仕のこころ見てもらい)
 良心にほめられ今朝はいい気分
 (良心にほめられ奉仕の汗を拭く)
 めだたない奉仕の疲れ着い空
 (ささやかな奉仕の疲れ抱きしめる)
 お客さまは神さまです奉仕する
 沈丁花の朝の匂いが奉仕する
 (沈丁花の匂いにけさも奉仕され)
 奉仕値の広告見ても動かない
 不参した清掃奉仕へ金出させ
 日変りの奉仕の目玉で客を寄せ
 ちびけな店に奉仕が満ち溢れ
 奉仕品に真ごころ添えて繁盛する
 奉仕する心が温い風を生む

周太

同

ちよ

同

やすお

同

山久

同

昭治

同

実

同

達一郎

同

柳五郎

元江

むらくも川柳会

第29回観桜川柳大会

日時 昭和58年4月3日(日)11時

場所 木次町高齢者センター

兼題 先生・慕う・さくら・当選・流行

結ぶ・味

各題二句

欠席投句 3月31日迄 500円切手可

宛先 〒699-13 島根県大原郡木次局欠付

むらくも川柳会 藤井明朗

・川柳塔本社より柳話並選者として紫香
 潮花、雀踊子、メ女出席の予定

奉仕値に釣られ無駄買ひしてしまい
 倅せはご奉仕出来る余裕もち
 民謡と踊りをさげて行く奉仕
 奉仕する心が人の和に通じ
 健康で奉仕の出来るさわやかさ
 パーゲンに甘い財布が奉仕する
 奉仕という涙沈めてダムが出来
 奉仕する生甲斐今日も夕焼ける
 福祉予算あなたの奉仕を当にされ
 奉仕して疲れただけの徳を積み
 胸算用しながら手に取る奉仕品

同

兼治郎

同

キミ

同

芳枝

同

紀久子

同

忠広

清掃の奉仕揃いの襷かけ

空缶を拾う奉仕の小さな手

世話好きの奉仕がたたり腰痛め

(世話好きの腰に奉仕がつき刺り)

明治です奉仕奉仕の汗を拭き

(奉仕奉仕明治の五体汗まみれ)

市場籠サービスタムに惑わされ

ボランティアの笑顔が支え老いの旅

(ボランティアの笑顔が老いの旅支え)

老人会の奉仕の汗が美しい

献血の針に我慢の笑顔見せ

さりげない奉仕にこころ和まされ

無人駅たれの心か花たえす

身にあまる倅せ社会へ奉仕する

奉仕妻封建に耐え 耐え抜いて

駅の花かくれた人の香が匂う

寝たきりへ温い奉仕の風呂が待つ

僅かな奉仕心豊かな日記書く

(ささやかな奉仕日記へんはずむ)

奉仕の文字に弱い女が買わされる

神様への奉仕ちよっぴり欲もある

ボランティアの手話で貰うて来た温み

恋人に奉仕のつもりミニをはく

奉仕者が俄かに奉仕を申し入れ

候補者が俄かに奉仕を申し入れ

老人の奉仕へこころ草が伸び

(老人の奉仕のなにも草が伸び)

点訳の奉仕が老いを忘れさせ

生かされる命がはずむ献血車

春枝

同

貞子

同

同

寿美

同

公乃

同

幸子

同

寿子

同

あや子

同

同

同

英子

同

同

同

みもの

同

同

凡太郎

同

同

胡頹子

さわやかな朝をくれてるボランティア

身についた趣味を奉仕へ暮す幸

やすらぎを求め奉仕の群れにいる

号令のかかる奉仕は止めにする

一灯の奉仕は意識していない

マザーテレサに泣きとん底を立ち直り

ボランティアの手は太陽の匂いもつ

当り前のことしただけと言う奉仕

定年で去る日無欲の奉仕する

信じてることあつてかボランティア活動

筋書きにない奉仕です草を抜く

奉仕団一たす一を三にする

なにもせぬうちに奉仕作業すみ

団体の数でこなしした奉仕作業

感謝する心が奉仕の姿かる

売れ残りの別名もある奉仕品

奉仕者の心に小さな傲り住む

恍惚はごめんて励むボランティア

町内の奉仕で人柄認められ

奉仕者になれる幸せかみしめる

(恵二朗短信)

「初歩教室」欄で書き綴った随筆らしきもの

の五十編ほどを抜粋し、それに加えて万人

に最もわかりやすく且つユーモラスな私の句

と、それへの綴方とを二百句ほど集めて、さ

さやかな句文集を目下編集申す。

題「磨く」4月20日締切(6月号発表)

宛先 岡山県倉敷市下津井一八九三四

同

同

勝美

同

同

刀水

同

同

保夫

同

三五島

同

同

武水

同

同

三男

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

「夜市川柳」募集

題 「声」 選者 野村茂津

(句箋に一句ずつ、三句以内)

締切 4月15日

投句先 下33堺市堀上緑町二一九一二

河内天笑方 堺川柳会

川柳塔社常任理事会 (3月1日)

出席者 栗・薫風・水客・紫香・太茂津・吸江・柳宏子・鬼遊・与呂志・笛生・天笑・史好

《議事並に報告事項》

★構造社出版の川柳全集第二集12巻、西尾栗作品集が出来上り、本社四月句会を出版祝いの会とすることし、別掲(本誌表紙裏参照)の如く決定。

★高島屋ローズカレッジ(西宮市)に川柳講座が四月から開講されることになり、薫風氏が講師に委嘱された。また毎日文化センターの川柳講座の講師に鬼遊氏が内定の旨報告あり。★木曜日の事務所当番は三月から小出智子さんに変わる(第三木曜日従来どおり天笑氏)。(史)

■4月の常任理事会は1日(金)

▽句集紹介

羽原静歩「足跡」

高杉鬼遊

羽原静歩氏が古稀を祝して、句集「足跡」を發刊された。これは川柳句集であるが、著者が歩いて来た四季折々の正直な人生記録でもある。香苗夫人が「あとがきにそえて」に「四十三年の夫婦生活。悲喜交々筆舌に尽し難いという日もあった」と書いておられるように、教育者夫婦としての厳しい哀歎の道程を識ることができる。

先生の月給確かに四十五円也

郷里、愛媛県公立小学校訓導として辞令を受けたのは今から半世紀前のことであった。

来るものが来たと赤紙じつと見る

世は国を挙げての戦時体制下であった。青年静歩の複雑な胸中を察することができる。

大阪駅西と東の泣き別れ

見送りに来た夫人との行き違いの別離である。「戦時懷古」の一句であるが現代の社会情勢にあつては、ただ懐しんでばかりもいられない重い意味をもってくる。

敗戦という勳章を抱いていた

敗戦を自由の勳章と思える彼なればこそ、川柳を識りそれに励むことができたようである。

掃還船博多の土へ嬉し泣き

「句会の灯」で、初めて入選したよろこびを述べているように、彼はいつまでも感激を大切にできる男なのである。

産声もハッハッハと太郎冠者

五人の孫にとり囲まれ相好をくすす好々爺であつても、この句の気合は川柳に取り組む彼の迫力を物語っている。

幼稚園理事者として当然ながら「幼稚園」

の章には「旅」に次ぐ多くの頁を割いている。

お客様は神様願書を持つて来る

親も子もフアッションションの入園式

お隣りはヒカソこちらはマチスなり

モンローのお尻もいます幼稚園

幼稚園事故のない日へ掌を合わせ

経営者としての視角、川柳人としての批判、絵による個性の発見、モンローを連想させるユーモア性、教育者としての責任感等、現在の職を天職と信じ、日々の務めに埋没できる尊い彼の姿が見えるのである。

ふるさとの絵馬堂時雨するばかり

彼の脳裏には今も鮮やかにふるさとの絵がある。墨絵の塩田、米島の磯の香、浜辺の乾

し網、吹上の城、吉忠の浜、どの一つにも忘れえぬ想いが深く刻まれている。

睡蓮のあくまで白く母を恋う

ふるさとの絵に重なるのは亡き母の像である。そして彼の描く「女」は、母と同じ貞淑な善女ばかりである。

ひのきしん則天去私の匂いする

個性の強い彼が修養科の一生徒として、天理の里に起居したとは、句集を読むまで想像することができなかった。

今まで彼は数多く旅をしている。国内は言うに及ばず、アメリカ、ヨーロッパと国際的である。旅における人との出会い、風土の匂いを素直に受けとめている。

生きのびて会つて別れて旅が好き

これからも延々と彼の旅は続くことだろう。

「春夏秋冬」「足跡」と作品がつづくが、

詞書のある贈答句が多い。それは社交的な彼の一面を物語っている。

この句集を編むのに選句を人に委ねなかったのは、空想の世界でない現実面を重視したからである。それだけにどの一句にも彼の歴史が宿っている。

(序文・橘高重風／跋・高杉鬼遊／B6判
箱入一七五頁／著者略歴付／頒価千五百
円(送料共)／発行所・川柳塔社)

本社 三月旬会

会場 なにわ会館

七日 午後六時

会場のなにわ会館近くに春日野部屋の宿舍があり、色とりどりの大きな幟が風にはためている。六時になっても外はまだ明るい。季節は確実に春に近づいている。

天笑氏急用で司会は岳人氏。二月十五日に亡くなられた浜田久米雄氏の冥福を祈り黙禱。

太茂津氏のはなしは、折から来日中の中国残留孤児の話から始まり、幼少の頃、お寺に預けられ、そこでチョンマゲを結った新蔭流の達人から剣の極意を教わったこと、昔はやんちゃもいたずらもやったが可愛気があった。今は弱い者いじめ。親はもつときびしく躰けるべし。そして最後は人の話を上手に聞いて相手を理解すればコミュニケーションもスムーズに行くのではないか、と前口上どおり「ごちゃまぜ」の面白い話でした。

初出席は岩井本蔭棒（樺原市）、柿本英一（大東市）の両氏。

三月の月間賞は西田柳宏子氏が獲得。

（受付―与呂志・重人）
（進行―岳人／記録―鎮彦・健司）

出席者―与呂志・岳人・薫風・儀一・千代

三・英子・雅風・春蘭・あいき・潮花・はつ絵・幸・太茂津・美智子・紫香・滋雀・勝美鬼遊・トメ子・重人・弥山人・綾珠・本蔭棒登志代・悦郎・狸村・水客・兼治郎・栞・白兎・郁栄・喜風・春江・三十四・文秋・古都路・柳宏子・史好・鎮彦・幸生・楓楽・みつる・吸江・酔々・冬寒・風童・健司・規不風元紀・恵美子・頂留子・吐来・白水・蕉露・武太・英一・山久・みつ子・射月芳・一二三度・雀踊子・萬的・柳伸・景子・凡九郎・浩一郎・和子・寿美・英壬子・寿子

席題「暴力」 紀市郁栄選

菜の花の黄色に暴力は負ける
個人での内気を約変さず集団
ピストルの穴暴力が覗いてる
ペン先で倒す暴力だつてある
暴力が恐くて先生つとまるか
ある時は暴力となるペンの先
暴力へ責任のない評論家
仕返しを恐れ三猿主義に生き
暴力の街には咲かぬ花もある
暴力の芽はやさしさを摘むとする

恵美子 弥山人 滋雀 元紀 度 寿美 狸村 浩一郎 千代三 鎮彦

暴力をお寺の門は拒絶する
暴力を揮つて仁義の名を騙る
暴力は逃げの一手にきめておく
暴力が記事になるほど荒れている
妻に手をかけたことないあかんたれ
暴力が手伝つている倦怠期
暴力で閉じるほかない妻の口
暴力を遠目に春の花愛す
目に見えぬお喋り暴力かも知れず
暴力が恐くてパチンコばかりする
暴力教室を吹き抜ける白い風
「坊ちゃん」の頃の暴力なら許す
ひとりばつちだから暴力はやめておく
煩ずりをした日もあった暴れん坊
噂だけ踊らせ暴力かも知れず
暴力でこころ貧しく燃えている
コンピューターもやがて暴力発揮する
暴力が愛の鞭かにまだ迷い
泣きわめく女の暴力には勝てぬ
暴力でけりつくこととありますか
暴力の勲章と言う墨を入れ
暴力を振うのは男だけでない
暴力に屈しすぎる胸の奥
一冊の聖書暴力撥ねかえす
暴力のわけを親身に聞いてやる
暴力をふるう悲しいなと思つ

景子 射月芳 重人 美智子 吸江 潮花 楓楽 寿子 与呂志 岳人 萬的 元紀 重人 登志代 与呂志 はつ絵 英子 太茂津 太茂津 楓楽 潮花 恵美子 幸 美智子 郁栄

席題「ゆっくり」 西出楓楽選

郁栄

粗大ゴミの意地ゆつくりと敷居出る
 ゆつくりと余生の日課組む夫婦
 ゆつくりと結局いばらの道を撰り
 ゆつくりと来てS席へ身を沈め
 閉会後ゆつくり幹事呑みはじめ
 ゆつくりと廻って欲しい嬉しい日
 鈍行に乗ると日本はまだ広し
 勝算のゆつくり眼鏡拭いている
 春風へ漸く編めたズボン下
 ゆつくりしてゆきやお茶であしらわれ
 細い手でゆつくり折つて千羽鶴
 ゆつくりと時計が回る待ち呆け
 春の画廊をゆつくりゆつくり見てまわる
 ゆつくりと急所を突いて来る小言
 寝ころぶとゆつくり星が落ちてくる
 ゆつくりと流水動き春ま近
 黒髪へゆつくり埋めてゆく余韻
 ゆつくりと次の言葉を待つコヒー
 定年の父はゆつくり若返えり
 ゆつくりと話せば何でもない話
 ゆつくりと歩くが挫折しませんぞ
 表彰台日の丸ゆつくりゆつくり揚り
 風向きがゆつくり変わる春の海
 長老でゆつくり話す人である
 宿敵に書く果し状はゆつくりと
 ごゆつくりしてねとのれんと火を落し
 つらい夜は月もゆつくり従いてくる
 未練一滴ゆつくり流す春の川
 愛されてゆつくり動き出す木馬

吐 来
 規 不
 寿 子
 和 子
 三十四
 登志代
 千代三
 滋 雀
 勝 美
 滋 雀
 英 子
 射月芳
 醉 々
 本蔭棒
 白 兎
 吸 江
 寿 子
 潮 花
 太茂津
 雀踊子
 重 人
 兼治郎
 健 司
 美智子
 岳 人
 幸 生
 吐 来
 寿 子
 恵美子

マシユマロをゆつくり食べる淡い恋
 傷をもつ男ゆつくり這いあがる
 太陽が沈むゆつくりしておれぬ
 ゆつくりと歩を指す男にある勝算
 ゆつくりと振り子が揺れている安堵
 実印をゆつくり押している鼓動
 お化粧をゆつくりゆつくりする吐息
 亀が勝つ話信じておくことに

兼題「桃」

津守柳伸選

元 紀
 郁 栄
 美智子
 岳 人
 美智子
 柳 伸
 幸 子
 楓 楽
 松太郎
 幸 一
 どんたく
 あいき
 雅 風
 鎮 彦
 元 紀
 英 子
 白 兎
 郁 栄
 健 司
 郁 栄
 文 秋
 紫 香
 幸 生
 白 兎
 一二三
 射月芳
 みつ子

三月の花屋は桃で飾られる
 空襲の日も咲いていた桃の花
 女ばかりではもの足らぬ桃節句
 桃の花内緒話をみんな聞く
 桃をむく指を男の目が惚れる
 その昔桃が流れた童唄
 桃の木の前で聞いた春の彩
 桃よりもお酒が好きなら右大臣
 桃みごろ男一匹飢えている
 三月三日白酒に酔う夫と添う
 桃をむく女やさしい手になって
 桃いけて女系家族の笑い声
 未来図はもう出来ている桃の花
 熟年と桃はやさしく抜おう
 桃が咲く里伝統の竹細工
 触れるなと桃に書いてく果物屋
 桃の木に桃の花咲く回復期
 鬼退治して欲しくない桃の夢
 出世した話聞いている桃晶
 メルヘンを抱いて開いた桃の花
 桃熟れて連絡船はまだ来ない

兼題「興奮」

神谷凡九郎選

美智子
 寿 美
 吸 江
 英 子
 与呂志
 古都路
 健 司
 千代三
 寿 子
 一二三
 重 人
 美智子
 鎮 彦
 史 好
 萬 的
 千代三
 英 子
 幸 生
 柳 宏子
 柳 伸
 度
 雅 風
 岳 人
 吸 江
 冬 葉
 吸 江

興奮の限度リトマス紙が変る
真つ直ぐな煙は興奮などしない
興奮が静まり頭痛下痢止まり
ときめきをちつとも知らぬ冬の蠅
映倫のカットのあとに興奮さ
朝からの無口興奮してゐるし
冷静を装ひ興奮しています
敵ひとり味方ひとりの興奮か
興奮のるつばに冷える投げタオル
赤い血が静かに流れていくれぬので
よだれ出るほどの興奮しあわせか
タクト置くのを待ち切れない拍手
熟年という興奮へ三通話
春を待つ興奮山は紫に
快い興奮誘うおぼろ月

規不風 水客 白水 醉々 栗 武太 泰子 景子 楓 白兔 大茂津 栗 芽 登志代

他人という手が温いので興奮する
興奮をしずかに流す春の川
興奮を自分の影になだめられ
まあまあと止めるから興奮するんだよ
仁王さんそんなに興奮しなさんな
興奮のコメカミあたりにある痛み
一寸だけ興奮させたチヨコレート
ハンカチに包み切れない昂ぶりが
興奮の推理へ罪なシルエツト
サボテンの棘にさされて興奮し
興奮が一番こわいシャボン玉
手の中のカードが変わるとも知らず
一の糸切れよと津軽三味が哭く
興奮したらいのに母はさめている
真白い紙にこめんなさいと書く

規不風 寿子 萬的 三十四 楓 雀踊子 紫香 美智子 優 醉々 水客 冬葉 白兔 冬葉 鎮彦

そや僕が興奮してたらあかんのや

兼題「兆し」

岩本雀踊子選

世の中に「瓜二つ」と言う言葉が有ります
が、決して同じ顔の人が二人いるという事では
ありません。人はそれぞれに異った素顔を
持つております。社会や政治や他諸々の全て
にも素顔があります。私は常日頃から、川柳
は素顔の追求であると思つており、古くから
秀れた作家の作品に個性溢れた素顔が推察出
来ます。故に作品に今も永遠の生命が感じら
れます。
川柳の要素に「穿ち」がありますが、現代

一分間の柳論

新谷笑痴

的な概念で人生や人間その他諸々の素顔を徹底的に追求することが「穿ち」に通じて行くものと確信をしています。それが更に批判となり、ユーモアとなり諷刺に連つて行くと思ひます。
今の世とかく素顔のままで生きて行けないことの哀しさを知り、泣き笑いの人生が、いかに長くて短かいことに気付くことだろう。また「穿ち」の裏側にある哀愁は十七音字の域を越えて行くことを知るでしょう。

雨になる兆しが猫の髭にある
忍びよる春の兆しの水溜り
言い訳をするからおんなの兆しかも知
春が来る兆し冬眠して居れず
ドヤ街に春の兆しは見えませぬ
兆しかも知れぬ男の回り道
オーパーの衿から春の兆し来る
開運の兆しを春の海で待つ
よい兆し茶柱が立つうれしい日
反抗期の兆し部屋に閉じこもる
春の兆しを待つてゐる鳩時計
ひとすじの兆しにすがる明日の虹
紙人形春の兆しを抱いている
幸せな兆しで春の陽が弾く
反抗期娘の動作にある兆し
大漁の兆しを波が伏せている
荒れそうな風の兆しへ父の独楽
不沈空母他国は警戒する兆し
おめでたの兆しと母は見抜いてた
海底の隆起なかがおこりそう
いつか背くそんな兆しのある積み木
指の先から女になって来る兆し
幸運の兆しはゆつくりやつて来る
ある兆し下駄の鼻緒が切れかかる
天気図に春の足音近くなる
石軽く蹴つて夫婦になる兆し

射月芳 寿美 与呂志 潮花 鬼遊 幸生 浩二郎 弥山人 春江 浩一郎 頂留子 寿子 美智子 悦郎 元紀 柳伸 紫香 柳宏子 武太 幸 鎮彦 度 岳人

うどんげの花の兆しは罪の風
福寿草春の足音きいてる

曲り角ばかりで老いにある兆し
反論に妥協の兆し見えてくる

死角からみる相討ちになる兆し
傷口を覗くと雪になる兆し

胃の中に憎い兆しが棲んでいる
走らねばならぬ兆しが父にある

春が来る兆しが金魚鉢にある

兼題「踏み」

若柳潮花選

踏台になってやりたい愛の鞭
昼寝から起きて団扇をふみつける

四股を踏む土俵に裸燃えている
白線を踏むと敵の矢飛んでくる

親の影踏まぬどころか脛かじる
いさぎよく踏まれて堪える天の邪鬼

竹を踏み踏み喧嘩のつづきする夫婦
散り敷いた花に足踏むとこがない

踏み迷うようにキレイな花が咲き
百度石踏むと仏の顔が見え

踏み台になっても狂わぬ父である
残留孤児の喜び故郷の土を踏む

不屈者でいい導火線を踏む
謝謝と祖国の土を踏んでいる

いくつもの踏み絵が男の道にある
人間のエゴ月の神秘を踏み破る

日本語は知らず日本の土を踏む
親のレール踏み踏み謀反考える

柳 伸

鬼 遊

悦 郎

水 客

醉 々

岳 人

白 兎

規 不風

雀 踊子

文 秋

栗

悦 郎

楓 楽

あいき

恵美子

栗

紫 香

規 不風

元 紀

悦 郎

文 秋

白 兎

景 子

郁 榮

寿 美

恵美子

英 子

冬の絵の中の女は麦を踏む
ペダル踏むジーンズの娘が茶のけいこ

言い訳を考えながらペダル踏む
初舞台踏む白足袋の朝の冷え

父の靴はいて轍まで踏んでいた
根くらべ美人のくつが乗っている

亡父の跡踏む足許が頼りない
火を踏んでおんなを哀しみ深くする

踏絵踏む心地入試の門くぐる
踏み台の母は小さく丸く老い

踏まれても春を知って芽が育ち
二の足を踏んだ保険が役に立ち

妬きもちな女が踏み絵持つてくる
白旗は見せずに故郷の土を踏む

釘踏んだ思いで男立ち止まる
自惚れの足土壇場で踏み外す

無駄足を踏む覚悟なら来いと言っ
(清記・楓楽)

恵美子

女

与呂志

健 司

楓 楽

柳 伸

柳 宏子

寿 子

白 水

英 子

与呂志

吸 江

浩 一郎

健 司

水 客

柳 宏子

潮 花

★
「お詫び」本社2月旬会「流転」の天の句
人間の流転の果ては核で死ぬ

は竹中綾珠さんの句でした。謹んでお詫び訂
正致します。(二月の月間賞杯は、したがっ

て綾珠さんが獲得されました)

▽3月号20頁(同人吟)佐野白水氏の句「ロ

ボットもボナスはしい年の暮」は2月号17

頁仲どんたく氏(神戸市)の作と同一なので

白水氏より没の申出がありました。

▽奥山美智子さんの同人推薦は四月から。

三輪明神さんの近くで聞く

第55回奈良県川柳大会

日時 昭和58年4月24日(日)10時開場

会場 桜井市中央公民館

桜井駅北口より奈良天理行バス二つ目
市役所前下車、駅から歩いて10分位

宿題

力 平城 井関 滋啓選
(五十音順)

伸びる 生駒 大神 古梅選

人形 若鮎 河合 渡口選

開く 奈良 杉野 睦朗選

四月の女 あかね 西野世里子選

断つ やまと 古川 一高選

席題 二題 各題3句・正午×切

会費 八百円(呈発表誌)

投句料 六百円(切手同封誌代送料)

前日必着

投句先 〒633 桜井市桜井栗殿新町

一〇〇七の一三

西村 茂 宛

主催 奈良県川柳連盟

担当 やまと 番傘川柳社

老地柳

■原稿用紙を使用。締切毎月末着便まで。
十七字以内の句に、下三マスに雅号。

(整理・香川酔々)

川柳製洋会

山根いつを報

木枯が吹き糞虫も着る鑑
風花が狂う枯野も生れた地
老眼鏡嫌な世相が見え過ぎる
火吹竹の知恵をキャンブの子に授け
弾む日の眼鏡は光る頬光る
親の子だ眼鏡かけても仕方ない
大法螺を吹いて消えたり義理の叔父
風花や明日を占う手に受ける
紫の袂紗真つ正面に置く
剃髪をして紫の底知れず

川柳後楽

井上柳五郎報

吉報へ入歯が落ちるほど笑い
吉報へ十玉も弾む音
吉報が長寿の上にかぶせられ
吉報に老母の小じわが緩みかけ
吉報に湧きたつ一家寝もやらず
吉報を時々妻が突いて来る
子沢山妻の財布が愚痴を言う
妻の留守ねらったように客がくる
目頭を押えて妻が妥協する

兼治郎 山根いつを報
いつを 兼治郎
素秋 素秋
宏子 宏子
みつ子 みつ子
風童 風童
一笑 一笑
景笑 景笑
酔々 酔々
薫風 薫風
幽谷 幽谷
草風 草風
博友 博友
定隆 定隆
元平 元平
番茶 番茶
哲郎 哲郎
健一 健一

老妻とこれからのちさい灯を探す
腰掛けのつもりが永く座を温め
腰掛けが愚痴ばかり聞く縄暖簾
腰掛けしたシルバースhirtに無言の目
叱られに来た腰かけは浅く掛け
腰掛けの榮転地獄かも知れず
甘かったコーヒー一杯に罌があり
人妻と飲む珈琲のほろ苦く
左遷地の腰掛けくるくるよく回り

勝山双葉川柳会

鈴木

節子報

一日の活気を運ぶ朝の駅
うれしさは下駄をぬぐものもどかしい
見覚えのあるセーターが会釈する
母の手のぬくもりがあるセーター
ベアのセーター編み上る頃筆式
思い出の土地に決めるフルムーン
セーターを少し派手めに若返り
早朝の卸市場で買う活気
北風が活気をくれる漁師町
石仏の情けを貰う春の道
ナツメロへ嬉しくチャネル合わして
うれしさの隠しようのない手毬
編みかけのセーター一度目の春が来る
うれしさに泣いてしまった花時計
ロボットに武士の情けはわかるまい
セーターに少し若さを借りている
うれしいと言わぬ男に酒を酌ぐ
硝子窓拭きになったうれしい日
あこがれの人が握手をしてくれる
春闘も鉢巻をして活気つき

いずも川柳会

尼緑之助報

罪みんなかぶって甘い母である
塩の持つ甘さを母に教えられ
福の神そろそろ居心地悪くなり
福神祭出雲に春のいぶきする
新人につられて伸びる棒グラフ
身ごもった妻に吊棚少し上げ
猪が幅をきかせる飾り棚
父さんの棚一本の釘足らず
緑談のあれこれ母は急に老け
ウインドに追加予算の欲しい柄
迷彩を断ち切るお酒追加する
大陸の棚で日本責められる
あればこそ手足伸ばせる保釈金
いい縁談永久就職すると決め
臍くりの甘さ知ってる脛かじり
老妻不意にテレビの甘いシーンを切る
転勤を知らずにボトル棚で待ち
爪ばかり伸びて寝たきり日が長い
富田林富柳会
送り道月がかくられる下心
下心ひとつ波れぬ橋がある
ほめそやす心が怖い下心
下心ありそうあくびばかりして
正月のからすやうな真つ黒け
お正月立てる国旗に惚れ直す
星見ゆる工業都市のお正月
七草を摘んだ爪には春の泥
正月が来るので年玉孫の数
助手席に美人を乗せて赤信号
どの人が美人ですかと妻が聞き
出て来たら困る息子を探す母

柳五郎 柳五郎
青銅 青銅
佐加恵 佐加恵
和夫 和夫
秋月 秋月
照路 照路
恒洋 恒洋
胡水 胡水
玉水 玉水
藤子 藤子
ハル子 ハル子
喜美子 喜美子
ヒサ子 ヒサ子
頂留子 頂留子
秋子 秋子
いく子 いく子
智恵子 智恵子
いくの いくの
洋子 洋子
妙子 妙子
楓子 楓子
千里 千里
柳伸 柳伸
寿美 寿美
田鶴子 田鶴子
智子 智子
好子 好子
久子 久子
節子 節子

賽銭に託すきれいな下心
下心見抜いてバラは棘を持つ
新成人正月気分のまま迎え
下心私はエロになりきれず
下心みせて女は酒をつぎ
雪の夜は雪のところで火を探す
寒空に星座探している若さ

倉吉川柳会

渡辺

善句報

澄子 泰子 柳太 ケイ子 冬二 美佐子 観洋 菩句 石花菜

57年度各地柳壇賞

本間満津子さんに決る

選者 児島与呂志

▽秀句

独り居の耳が大きくなつてくる

本間満津子

常に人の心を信じてるやさしい心を傍で
お世話され皆さんの温かさに気遣いされて
の句会が伝わって来る句だと思ひ選ばせて
戴きました。

この欄に毎月お世話して下さる各地柳会
を指導される人へ選ばれ本社に到着する月
約六百句です。年間にして七千二百句にの
ぼり、質量とも充実してくるのは誠に嬉し

時差ボケで朝が二回のレモンテイ
飛驒の朝田空影と睨めっこ
朝起きるのよい子悪い子達者な子
春山に今朝の天気を打診する
雛壇も青い目並ぶ国際化
旧暦にこだわる祖父を娘が笑い
青い目の赤ちゃん産んで驚かせ
青い目に市場開放せまられる
青い空目白の空は薄汚れ
立春に吉報を聞く娘が二人
ご利益は旧暦にあるご縁日

いことです。

▽佳句十句

責任者時計を少し進めてる
人間は悲しいものよ愛を持つ
さりげなく席をゆすつて遠く立ち
大切な夫に保険かけている
良心に従い派手な喧嘩する
うちの人規格品です平和です
目が笑つ心が笑つ人に会い
叱られてさっぱりしたと言う生徒
保険屋が老後の心配してくれる
きれいなことはつかり聞いている疲れ

大坂 形水 宮園射月芳 日阪 秋子 野村太茂津 原 独仙 康子 竹中 綾珠 藤田 泰子 河内 天笑

☆各地柳壇賞記念楯は四月七日の本社句会
でお渡します。

松女 碧水 夕路 あや子 満春 弘朗 康人 秋人 千枝子 みなと 柳風

旧暦をやたら持ち出す楽隠居
怪談に旧暦好きの講談家
日記それぞれ旧暦併記して日本
戦後から役所に旧暦通じない
立春に冬物半値でぶらさがる

にた川柳会

西村

早苗報

歳月の速さへ流されまい老驅
洩れたのが唇嚙んだ歌合戦
灯を消してしみじみ明日のフラン立て
しつけ糸抜いて年賀の客となる
五日目は返事の様な賀状来る
古里に呼び寄せられて職がない
背伸びして仮面の限界知る女
必要になるやも知れぬ旧姓名
不況風父焼酎に切りかえる
孫自慢段々嫁の愚痴になり
難念を捨てて樹海でまだ迷い
乾杯の音頭とらさる年男
枯れすすき今年は雪が降らんねえ
身の上を話せばうなすすき乍ら寄り
宵夜浪花女を自覚する
人間の涙が凍り雪になる
底のないザルで明日を買いに行く
納得も出来ず億測でも困り
またタバコつけて重たい客の尻

川柳大阪

田中

笑風報

荷出する親のふところ子は知らず
働き蜂あつと言う間の三ヶ日
初詣福が逃げ出す人の波
めでたさを知らぬロボットも休暇
魚屋の日銭ウロコがついている

謙翠 雅果 三千雄 君枝 笑風

朝帰り夜勤を終えた顔で寝る
昼を寝て夜勤の父がかくいびき
ポツクリと逝つた天寿を羨まれ
昆虫にいやな季節の夏休み
昆虫を貴重化させる百貨店
夜の灯に男昆虫かも知れず
標本になつて昆虫見直され
家出した子に東京の水合わす
先生に命預けた手術台
夜なべする女房の背中丸くなり
できすぎの女房で姑の職がない
裏話みんな知つてゐる自信
初春へ少し派手な彩で逢つ
除夜の鐘地下の職場へ届かない
面影は二重写しになる日記
松とれて働き蜂にもどる父
和服着て重労働と知る女

山長川柳会

那須

鎮彦報

まこちゃんが一等めさす運動会
よろこびは学校へ走る母もある
不可能とわかつていても走る夢
悪い子感走りたいといふ母思ふ
又一等ダンブのように走るマコ
早春の光を受けて父子走る
新年を猪突猛進友の会
年明けて笑顔で走る神の神
一勝へ走る男の厳しさよ
よき人と共に走つてよいゴール
友の年は走りまっせと易者言い
走るのに靴や服など一揃え
会いたくて月もかけ出す宵の道

天平 六童子 本蔭棒 晃山 希久志 与呂志 道子 醉花 金太 喜醉 重人 洛醉 比呂志 鉄心 敏 真琴 真寿恵 和子 朝雄 真由美 一美 守子 昇 嘉弘 安弘 鎮彦

東大阪川柳同好会

斉藤三十四報

登校へもつぎりぎりの息づかい
ぎりぎりの予算幹事は慣れたもの
ぎりぎりの線で組合妥協する
せときわの崖に立札一寸待て
しぶちんのパパ今日だけはケキ買い
しぶちんのはんばを値切る癖があり
振り分けに巻くマフラーにある若さ
マフラーが次の逢瀬をきいてる
リハビリもマフラーもして冬に堪え
マフラーの一目一目に愛をこめ
街中をサンタの色にするマフラー
マフラーの中に農夫の祈りもつ
ひま人の欠伸に青い空がある
ひま人も落着き失う年の暮
編み込んだ愛がマフラー温くする
しぶちんにならねばローン払えない
しぶちんもそつと買つてる宝くじ
しぶちんの焦りへやさしいナースの目
ひま人をねらう不況の果し状
愛情を編むマフラーが長くなる
手造りのマフラー愛のイニシアル
川柳しんぐう 川上 真水報

白屯 光水 光水 みる 古都路 良京 喜一郎 滋啓 慶三 三十四 美子 度 湖風 雀踊子 覚然坊 弘生 千代子 右近 弥山人 柳伸 恭太 孤舟 すみれ 義廉 喜一 紫香 だるま まさ子 登志代 道子

たった一言が一生決めたラブレター
ラブレター恨気に負けたいいまの妻
二人羽織妻の指図で恙がなし
紋付きを着れば刀を差せと係
正座して羽織は筋を押し通す
父の年齢を越えて形見の羽織着る
羽織脱ぐ頃から落語家笑わせる
凍結に寒波上乗せ春遠し
ほどほどの寒波が欲しいスキー場
趣味の会集う寒波に負けぬ顔
滝水も凍る寒波へ行者立ち
寒波など吹つ飛ぶ園児のランニング
うみなり川柳会 小林由多香報

富美湖 笑王 天雀 華子 熊生 由多香 芳泉 葉士人 一止 洋々 銀嶺 静生 布堂 希満子 貞山 雄人 登紀夫 三男 里美 武雄 文水 大輪 八千代 十郎 勇太 富子

還らない島に厳しい北の海
日本列島地球の中ですくめられ
島國に嫌いな土根性がある

岸和田川柳会

植山

武助報

豆の木はロマンに秘めてある教え
先生の鬼へ園児の豆つぶて
亡母の味嫁そのまに豆と昆布
つばくろは育った家の巢に帰り
不況でも家のチラシは派手になり
豪邸もたかが夜寝て起きるだけ
では家に連れておいでと適齡期
往年の霸氣職安で見失い
若夫婦も鍋物らしい換気扇
いたずらなベンが心を刺激する
喝采の中に混っている妬心
地下鉄で来たが出口で迷う祖母
向学心に燃えてふるさと捨てた過去
サロンパス貼って手作り陽が沈む
人生の余白にあった趣味の欄
冬の海男は偉大だなと思つ

川柳わかやま
堀端
三男報

悪知恵が湧えて自分を見失う
逃亡者の耳におびえる音がある
よだれ出る人は幸せだと思つ
逃げた先母親だけが知っている
逃げてでも逃げてでも真正面から北の風
汗滲んだカネは逃げようとはしない
貧乏神逃げやりますます追つて来る
安全な逃げて逃げてオボエテロ
人生を逃たない時にきつと逢う
逃げる気の歩幅で嘘を隠しとく

舟宏 比佐志 日満 武助報 ひで こう 白光子 佳生 狸村 ゆづる 武助 豊 さよ子 富志子 甘平 希久志 世界人 せつ子 射月芳 操子 緑良 雀踊子 狂虎 太黄 萬的 武雄 秀雄 柳宏子 凡九郎 与呂志

冬に咲く運命に逃げぬ花の彩
逃げられた魚の自慢に酔わされて
これ以上譲れば逃けたことになる
運命から逃げる術ない業背負い
核心にふたさせぬのが逃げ上手
新しいわたしを採しに行く旅路
一新の風を読んてる回り椅子
カレンダー日々新しい陽が昇る
新しい門出に肩書きなどいらぬ
寒鋤きに土新しく蘇る
新しい発見やっぱり旅をして
新しい機械に人が使われる
ときはぎの人生毎日新しい
新調の日記狂わぬ字がならび
新調の背広へ若さ少し入れ
芽えざえと月倒産の日を迎え
栄転へひとときわ芽える靴の音
一言の重みへ心芽え返り
芽え渡る夜空へ僕の小さ過ぎ
追憶が記念写真に芽えてくる
無我夢中芽える星空貫い乳
昔は芽えていたのになど独り言
ふんざりをつけた男の目が芽える
白いひげよだれで余計光ります
川柳からつ

母さんを泣き虫にした子の日記
外見の程でもないし安心し
客の膳蠅まつさきに味見する
院号に生きてる人の見栄がある
羽ばたけば視下三山に羽根が舞い
子を持つて母の味方が一人増え

義美報

虹汀

実

ちよ

正敏

久仁於

一竿

女子駅伝都大路に彩を添え
三次会謀叛の判が三つ減り
トラックの風にコロコロ缶転ぶ
普通ハガキ賀状は子らに差別され
物価にも暖冬異変救い神
酒沐浴 大黒天が唄い出し
川柳高知
川竹
松風報

おめでたい厨あずきが煮こぼれ
聞き役に回るミカンを一つとり
大を引くバイトもあるという時世
いつ本音喋るか酔いはもう回り
師の影を踏んで私塾の子が育ち
話し中ばかりで番号覚えさず
母の顔捨てて生活の紅をぬる
夢を追いつ夢にやぶれて一人老け
真直ぐに引けぬ貧しい設計図
外孫へ年金配る老いの幸
入学の夢それぞれに孫の新春
孫抱いて血の流れ見るタンゴ鼻
恋人に贈るつもり毛糸針
外足で歩く和服をもて余し
日本間で和服しずかなお茶の会
川柳ささやま
河原みのる報

どの火の天一次試験の孫へ飛べ
書き初めの天まで上の火を信じ
どんと焼き御幣かつぎの声はすむ
空想の餅がふくらむどどの火
いのししの仔連れわたりし世帯じみ
性質を猪に貰った年男
ボタン鍋猪のうらみが消えてゆき
深呼吸してから猪が向きを変え

ひか平
みのる
テル
文平
可住
房智
美智
越山

フユ子
四郎
紫泉
広幸
素石
義美
節風
佳風
菊野
弘生
春枝
千鳥
岩舟
登三
竹萌
松風
青果
草風
三吉

誘われてハンドル握る真似で逃げ
ユーモアにならず苦笑を誘っている
秋日和友の誘いのかかる頃
誘われて一度は歩幅合わせてみ
黒豆はやつぱり丹波と添えて書き
別格で黒豆縁起の膳にのる
ノレンの意地黒豆納豆に味を見せ
黒豆が一つ欲しや達磨の目

京都塔の会

松川

杜の報

言い過ぎて母の寢息に耳を立て
華やかな歴史で飾る離婚歴
生きている証拠に玉砂利ふみしめる
遠吠えで負け大少し意地を見せ
読み飽いて暫しをテープの演歌聞く
白一色になりきれぬ町初みぞれ
また悔いを残して除夜の鐘をきく
妥協すること抜けみち一つ出来
静物の一つとしての贗の壺
夢枕亡母は優しに笑うだけ
流れ矢が男の夢に突きささる
トリーシュズ少女白鳥になつて
健康をかみしめ祝う誕生日
ユーモラスな祝辞へ和む披露宴
みぞれ降る夜は故郷の夢で寝る
牡蛎を割る女に町は震する
千本ノック夢の中でもシゴかれる
結局は通帳だけの夢のあと

川柳塔まつえ

恒松

叮紅報

宗 珠 八 重 五月 百合子 一 盃 芳 子 潮 花 花 代 子 紫 香 杜 的 和 友 美 穂 春 江 水 客 三 求 求 孝 江 巨 詩 明 代 笛 珠 紅 陽 飛 鳥 水 紅 丸 代 仕 男 鶴 丸 緑 之 助

出札の片手は重い旅かばん
コップ酒あしたに夢を持つ話
孫の瞳に民話がぬく窓の雪
腹割った話へストレス溶けはじめ
終りまで聞かず話の腰を折る
うそのない話を裏の街で聞く
シベリアの話になると熱が出る
語りびな昔話をしてくれる
ダイエツト励む割にはやせもせず
励むも二度の勤めで気が軽い
父助む老いゝ話は口にせず
一本立ちする目的があり励む
農業に励むと決めて嫁がなし
鬼ヶ島仕立て軍備を強くする
鬼の子が鬼になれずに涙ふく
昔なら鬼の姑が小さくいる
鬼豆を蛋白源と母拾う
サラ金が壁に吊つてる鬼の面
鬼ごっこ昔の寺がなつかしい
節分を過ぎると鬼も闇が出来
わかれ川柳会 小砂
警棒も金に踊つた隠し芸
過ぎし日を見て来しヤカン色褪せて
門かけの松の緑のしたたかさ
隠し芸二重人格見せつける
いか釣りの灯りが汽車の窓を斬る
美容院もじやもじや頭にしてかえし
隠し芸手品の種もさらけ出し
隠し芸笑つてももうお付合
松毬がボトンと鳴ってひとりかな
潮風をともに受けて生きる松

通 児 正 朗 芳 子 孝 華 多 賀 子 由 郎 弘 朗 秀 子 寿 子 四 希 孤 呂 二 舞 吉 与 根 一 愚 童 昭 二 き み え 芳 枝 登 美 也 みつこ 叮 紅 白 汀 報 輝 水 保 子 英 子 ヒデ子 志 保 敏 明 歳 榮 鈴 江 民 子 ふ み

断崖の岩場に松の放れ枝
隠し芸当振り出して唸らせる
隠し芸なくて軍歌の父であり
大手門の松落陽を抱き止める
難民のパンにつながる隠し芸
法則に従い松はつくりポトリ
川柳後案 井上柳五郎報
爪楊枝をくわえた口から嘘が洩れ
ご馳走になりましたよと爪楊枝
爪楊枝くわえて絵になる人が居り
爪楊枝けずる殺意かも知れず
鼻歌で斜に歩く爪楊枝
踏絵から反旗をいなく部下となり
反旗が致命傷となった宮仕え

佳句地10選 (前月号から)

山根いつを選

嘘半分その半分に騙される みつ子
湯豆腐のゆげを狂わす隙間風 民子
なぐられたのが野次馬におだてられ 入 仙
坂道のくぼみに情が置いてある 寿美子
口上はうしろで糸を引く気配 不二夫
鳥国の起伏見つめる青い海 三千代
度胸ある男で鉢巻などはせぬ 千万子
プラン通り進めば倉も立った筈 美乙女
こつそりと母が踏んでた百度石 雀踊子
耕していれば忘れる野良にいる かずこ

秀 枝 芳 枝 是 美 清 泉 白 汀 健 一 番 茶 草 隆 秋 月 柳 五 郎 恒 洋

末っ娘がまさかと思う反旗振る
翻えず反旗一揆の血が流れ
種蒔いて反旗振る日じつと待ち
空っぽになって湖底よみがえり
空っぽのボトルも拾える見栄を張り
見まわしてそつと捨る空財布
千成りは空っぽ軽いが天下取り
男泣き涙を汗のせいにする
難民の胃は空っぽで慈悲を待ち

米子きやら木川柳会 石垣

来世信じ椿は炎えて散り急ぐ
残り火の胸にまだ咲く紅椿
片便りあれば椿の落ちる音
樹で燃えて椿やがては地も染める
椿ボトリ何かありそう雪の朝
わびすけを移して浄土花ざかり
椿一輪落ちて旅立つ娘を案じ
炬開きの椿一輪たじろがぬ
八重椿クレオパトラの自負をもつ
葉の陰ではにかむように数椿
限界を悟り素直に椿落ち
冬の陽にいく日逢えるか紅椿

堺川柳会 河内

万国旗だけは平和な手をつなぎ
一匹の狸が北で尽き果てる
旗を巻く頬に冷たく粉雪舞う
笛と旗園児きれいに並べられ
赤旗が並ぶと旅に出る男
のび切ったバネが戻らぬ倦怠期
盗皇の出来ぬ定年までの位置
藪入りの話は尽きぬ置炬燵

胡 風 哲 郎 照 路 玉 水 博 友 佐 加 恵 定 平 青 銅 元 一 花 子 報 田 鶴 瑞 枝 千 代 千 春 とも子 な み みど里 あい子 日 枝 子 花 子 伊 都 美 世 天 笑 報 逸 郎 東 雲 幸 太 郎 春 蘭 甘 平 金 太 美 乙 女 てるよ

飲むほどに本音がのぞく置炬燵
ほろ酔いの契り重たくなってくる
ホーム炬燵家族に指定席があり
盗み食いじつと見ている油虫
くたびれた男に妻がネジを巻く
盗み酒ウイスキーではきこちな
能面の裏の涙を盗み見る
若アユのバネを釣書は伏せてある
ネオンの灯明日のバネを巻きに行く
バネのびて掛け声ばかりはねている
盗まれて女らしさをとり戻し
妻の眼を盗む手際はルパン級
乙旗が上る二月の塾の屋根
逆転を狙える位置にバネがある
炬燵を知らぬ寒行僧の足の裏
野仏と契り忘れぬ四季の花
神様の骨髄を盗んではならぬ
恋人の吐息を盗む白い風
ワル二人不沈空母を契るなり
川柳大原 白 岩 文 衛 報 男ならこの悲しみも酔うてすむ
立春の朝の光を深呼吸
約束を破った小指がしかられる
押し切れるコツを教わる肉料理
ベル押しして奥へ耳やる沈丁花
家中のリズムがくるう子の病氣
口数の少い彼がとても好き
亡母の声聞こえ掃除機とめてみる
せつかくの夜食で勉強寝てしま
くちびるを寄せれば温い老母の耳
振りむかぬ覚悟心経口にして

花 仔 月 子 千 万 子 喜 醉 山 久 静 馬 紀 美 女 元 紀 甘 平 鈴 代 柳 伸 翠 公 左 久 良 夢 成 度 柳 宏 子 醉 々 天 笑 鬼 遊 文 衛 報 玉 恵 辰 江 朝 代 睦 子 ゆきお たけよ 巴 子 みさえ 耕 花 はるみ 寿 恵 子

ペンバルの上手な文字に恋をする
チャンネルを替えても演歌酒にする
ズボンフレース妻と停年語りあい
申請書なうば押ししたらすむはんこ
陽が沈むもう一押しの腰をのす
押入れに出番の押さない羽根ぶとん
押しまくる孫がうるさい寝正月
口はよう出すがゼニなら持っていない
城北川柳会 野 呂 右 近 報 手を合わし浄土を今日も疑わす
子育ての太い手に乗るパンの耳
吊橋を渡ると詠りが生きて居た
目に見えぬ絆離れぬ親子嵐
お百度を踏む母鉄の意志を持ち
札束の強さに真実崩れそう
絆絶った過去に強気が悔まれる
胎動へ安産祈るしまい風呂
新患にどこが悪いか問うて診る
京訛り親しい友に逢う思い
語り合う同じ訛りの旅の宿
長電話忘れた頃にツケが来る
長電話すれば出て来る国訛り
諸々の訛り寄り合う釜ヶ崎
離れても絆脈打つ君と僕
旧家でその絆が重くのしかかる
SFでなく衛星が燃えおちる
親と子の絆は切れぬ花鉄
銀世界鴉一羽の山の里
片頬の風寒き野に黄水仙
聞き馴れた訛りなつかし郷里の駅
ハイハイと言えない三分の虫が居り

春 子 克 巳 政 勝 正 巳 敏 子 智 泉 直 二 文 衛 静 歩 テルミ 弘 生 松 太 朗 静 子 志 保 登 志 代 喜 洗 す み れ 晴 子 忠 夫 頼 一 秀 村 千 子 倫 子 笑 風 星 斗 新 一 郎 左 春

ほどされて苦難覚悟で取る絆
お人柄そのまま障の無い葉書
愚痴こぼし合つて絆の深くなり
戦地に出来た絆にある強さ
挨拶が素直に出来る山の道
出稼ぎが馴染む女将の国訛り
年賀状だけでつないで居る絆
口数の多い女で草臥れる
今日限りでは無い明日の風を待つ
授乳する母子に流れて居る絆
神前で結んだ絆切る離婚
ロボットの手に温もりを盗られるな
強かに生きる女の断つ絆

葉の花句会

高杉

鬼遊報

柳雅伸

雅号ぶつちやけばなし

(207)

どくせん



仙独原

はら

職場の労働新聞等にはSH生とかH生で投句していた。この道へは誰の誘いも指導もなく入ったので、雅号も自己流に命名、今日に及んでいる。川雅時代は角力に例えれば名もなき序の口で不勉強極まりない状態でも「川柳祭り」の路郎選『子沢山』川雅三四〇号に佳作の一席入選が懐かしく思ひ出される。「独仙さんで、先生もよく噂して」とは路郎忌句会の席で林宏子さんの允そんな恩師に報ゆる名作が未だに創れぬ不甲斐なさを悔いる次第。

かと言って、今更雅号変更なんて更々考えない。不朽洞先輩諸氏の眠っていられるあの世とやらへも、この儘の号で何れは仲間入りさせて頂くことになるでしよう。

(無職 七十九歳)

達一郎 税務署へ出す手紙にも切手貼る
右近 三猿になりきれずいる嫁姑
正之 同窓会の毛皮の女よく喋り
悟郎 夜警員耳だけ起きて仮眠中
節子 記念切手貼ればやさしい人にされ
公一 天皇にもう勲章のないお顔
利義 愛されて女の耳が唄い出す
ふみ 満員車一寸気になる軽い咳
炉 仕事の手止めず聞いている叙勲沙汰
茂樹 母の咳みなが頼んでねてもらい
午郎 コンパクト女の顔をニセにする
道子 耳遠くなつて囁き聞きたれず
満津子 勲章をつけると馬に乗りたがり
柳雅伸 耳掃除アイラブユーが聞けそうで
空咳へ部屋の空気がピンと張る
約を着て約の匂いのする女

幸生 冬葉
栗 頂留子
鬼遊 優
美乙女 勝美
石近 雀踊子
春蘭 綾珠
射月芳 度
柳宏子 薫風

不要品のシールを貼られないように
咳払い一つでわかる秘書となり
障子貼る白さを守る妻として
陰武者のフライドにせものではないぞ
冬の絵を見てから咳が止まらない
川柳たけはら 森井 蕨居報

おしょうがつふたりででおつたいたよ
べたんとおもちついたらおもしろい
はしみんきなそつてオチのいいあさこはん
おとしまなごうワウワウかえました
神さまにたのむときだけ手を合わせ
おこられてやっぱりみたいたテレビです
長つづき努力の中に僕がいる
家中で見るじいちゃんが出たテレビ
年女なんだか少しきどりたいた
新年の味お雑煮を二つ食べ
髪型を変え妹に差をつける
裏声で総理が歌っている軍歌
初詣で娘の大安日でも決まる
一月の暦に敗北感はない
木枯しを聞く旅に出たくなる
新しき家でまごつく鍵の鈴
唯祈ることのみ父に許される
夫の背に膝に甘えてみたい掌よ
弱虫が渡ると揺らぐ丸木橋
ふとここの小石を握る妻の謀反
大の字よりベッドが小さいぞ
風の彩おんな坂なる乱れ髪
片方の耳は良いことだけ聞こう
やつと歩く孫にリングが重すぎる
しみじみと幸福想う老いの趣味

凡九郎 蕉露
悦郎 醉々
弥生 保育
小一 保育
小二 保育
小三 保育
小四 保育
小五 保育
小六 保育
小七 保育
小八 保育
小九 保育
小十 保育
小十一 保育
小十二 保育
小十三 保育
小十四 保育
小十五 保育
小十六 保育
小十七 保育
小十八 保育
小十九 保育
小二十 保育
小二十一 保育
小二十二 保育
小二十三 保育
小二十四 保育
小二十五 保育
小二十六 保育
小二十七 保育
小二十八 保育
小二十九 保育
小三十 保育
小三十一 保育
小三十二 保育
小三十三 保育
小三十四 保育
小三十五 保育
小三十六 保育
小三十七 保育
小三十八 保育
小三十九 保育
小四十 保育
小四十一 保育
小四十二 保育
小四十三 保育
小四十四 保育
小四十五 保育
小四十六 保育
小四十七 保育
小四十八 保育
小四十九 保育
小五十 保育
小五十一 保育
小五十二 保育
小五十三 保育
小五十四 保育
小五十五 保育
小五十六 保育
小五十七 保育
小五十八 保育
小五十九 保育
小六十 保育
小六十一 保育
小六十二 保育
小六十三 保育
小六十四 保育
小六十五 保育
小六十六 保育
小六十七 保育
小六十八 保育
小六十九 保育
小七十 保育
小七十一 保育
小七十二 保育
小七十三 保育
小七十四 保育
小七十五 保育
小七十六 保育
小七十七 保育
小七十八 保育
小七十九 保育
小八十 保育
小八十一 保育
小八十二 保育
小八十三 保育
小八十四 保育
小八十五 保育
小八十六 保育
小八十七 保育
小八十八 保育
小八十九 保育
小九十 保育
小九十一 保育
小九十二 保育
小九十三 保育
小九十四 保育
小九十五 保育
小九十六 保育
小九十七 保育
小九十八 保育
小九十九 保育
小一百 保育

一步ずつ譲ると湧いてくる和
なごやかな空気を孫が持つてくる
和解して欲しい夫へうす化粧
和の精神一人一人は知っている
生きてゆく意欲お粥の味が出る
昨日までの意欲が落ちている小径
ともすれば意欲勝手に走りそう
もう一つのせる積木へ子の意欲
意欲だけジョギング老いの朝の霜
広辞苑眼鏡を二つとも意欲
お元日小きな意欲湧いてくる
物があり余ってころ潤わず
大雪に潤う町と困る町
潤うてりズム崩さぬやしろべえ
潤いを残し少女は町を去り
盆栽に水かけ終りお茶にする
和解した潤いぐつと水を乾し
潤いを求める人の縄のれん
お多福の笑顔は野心のない笑顔
石仏の笑顔にふつと春を見た
水仙の笑顔北風から貰う
儲かってもうかって仕方ない笑顔
ふところが温いと自然に出る笑顔
恩は恩妻が袖ひく保証判
落ちぶれて恩のかけらを売りに来る
恩返しするには遠い釜ヶ崎
太陽と空気がおしつけしない恩
税務署を騙した笑顔はホンモノだ
和の衣着でも鑑が見えている
平和だな欠伸している昼下り

楓 久子
千梢
一二三
律子
頂留子
節子
春蘭
寿美
文秋
善信
浩一郎
酔々
冬葉
雅風
竟然坊
雀踊子
洋子
度
恒明
智子
慶三
鬼遊
千代三
凡九郎
重人
美房
悦郎

和やかな一夜が明日の糧となる
花活けてつくづく思う和のころ
一言を控え同居の和を守る
南海電鉄川柳部
年金暮らし申告なんて他人ごと
申告のミスを税務署見のがさず
申告にはつきり出てくる不公平
申告をすませば春風ふいてくる
手造りと名が入るだけ高く成り
ペピー服手づくり初孫待ちかねる
手づくりの秘伝おしえる頑固な手
手づくりも知らずに育つ昭和の子
手づくりの嵐北風はきびすすぎ
正直に告白する人なき世相
永久の愛告白された同窓会
告白を受けて逢わない事にする
告白をしたが眼れぬ夜が続き
嫁の荷に新車一台ふえてくる
鉄道界今年は新車の当り年
新世帯オールローンでまた新車
新車買い見せたがり乗せたが
新車なら一寸乗せてくまが増えて
買いかえた新車へ社運まず祈り
尼崎いくし川柳会 黒川
まだ来ない隣席の席が気にかかる
空港のキャンセル待ちで結ばれる
優勝旗をかけてタラップを降りる
港にはむかしのめし屋だけがある
心の奥に誰にも見せぬアルバムが
手袋を脱いで多弁なくすり指
聞き上手に心の奥をのぞかれる

勝美
柳伸
喜風
春蘭
すえお
勝美
山久
信江
さゆり
遊川
圭水
東雲
いづ枝
とし子
悦郎
凡子
白梅
主次
綾珠
儀一
仔子
すえ
中石
郁榮
牧郎
千子
昇美
春子

女正月祝ってすこしねむくなる
傾いた暖簾が化ける高層ビル
風花のものたりなきを責める愛
成人式酒もタバコももう飽きた
耳鳴りの奥へ軍靴鳴りびびく
四面楚歌腰かけた石ぬきもつ
表向き派手な構えにある噂
父を待つ表通りに風がない
三人が一部屋ごとに灯をともし
逝った娘の部屋はそのまま白合匂う
針坊主に針がくつろぐ女の問
ひび割れの茶碗にも似た胃をかばい
陽だまりに雀が三羽話してる
忘れたい過去を港へ捨てにくる
さまよえるノラ港を探してる
着たままでボタンをつける急な旅
さりげない言葉かわしている絆
波乗りがとてもし上手な渡り鳥
食べるのも芸のうちかと龍虎さん
直球のサインを妻はもう出さぬ
西宮北口川柳会 妹尾
暖冬で桜が梅を追いわたる
梅咲けば一べん郷里へ帰ろかな
懸命な鞍馬のうらにも梅香る
花時計短い針はいま真昼
日短か老いのベースをくすさない
短い返事だけに気持の良い返事
短い言葉に母と娘の絆みる
虹の橋輝く今を渡らねば
果し状は短い鉛筆の方がよい

かね子
伊升
晴子
美紀子
伊三郎
水声
年代
かず子
貞子
玉子
静歩
定人
君子
かすみ
美代子
幸子
美智子
紫香
保蔵
佳秋
春江報
勝紀
はつ絵
宏子
紫香
水声
みつ子
冬子
メ女子
右近
伊升

短いが胸打つ言葉忘れず
エブロンが一番似合つて恙がなし
紫が似合う小さなうぬはれか
頼みごと拝む指から溢れでる
揺れ動く女心に風の私語
なで肩の男にもある青い髭
サディストの冷たさもある子供の目
風邪いえず夫はひとりりの風呂をたく
ちやぶ台にひろがる妻のメッセー
気の弱い鬼でときどき歯が痛む
信号の青が短い老母を連れ
条件が合つて似合いの新家庭
よく似合う和服着こなすお茶の席
傘の雪古典が似合う裾さばき
ビッターと和服が似合う母の舞
会長の名にふさわしい家に住み
幸薄き女に藤紫が似合う
オーエスケ―川柳会 大坂
節分の鬼は静かに夜明け待つ
鬼退治したら静かになり過ぎる
しあわせは妻の肩もつ母と住む
しあわせを探す足元踏んでいる
仕合せの絶頂という曲り角
赤鬼や青鬼もいる夜の蝶
ボロボロの日記に幸さ蓄めてあり
あの人を思ふ心に鬼が住み
孫が来てうるおい見せる鬼の面
なげつけた豆に泣いてる鬼の面
鬼は気紛れ強さに強く弱さに弱く
掴もうとするから逃げる青い鳥
鬼が鬼さと言葉に火がともる

不二也 春江 幽谷 千子 園歩 伊三郎 墮駄 年代 泰 婦美子 恵 千世子 隆子 千世子 半歩 文子 三笑子 形水報 てまり 博泉 春秋 雄峰 雅洋 登 聖也子 幸坊 美佐子 百合子 聖地 亜成 一念

幸せそう顔が出てきた美容院
しあわせは夫の靴を光らせる
出稼きの荷に入れて来た糸と針
川柳ねやがわ 高田 博泉報
優勝へヒーロージョーを読む和服
大原女の紺紺から雪がふる
足袋だけが似合わぬ和服を持って余す
抜け出して来たのにポケットベルが鳴る
霜畑冬を抜け出す路のとう
抜け出してきたが老母気にかかり
輪の中に抜け出す鍵を隠される
つつましく和服で通し母米寿
因習を抜け出す若さへ向い風
抜け出してきて当てのない街を行く
頭だけ抜け出す馬に鞭が鳴る
和服着た時だけ亀になっている
淋しさが溢れる娘は無垢を着る
ミニが着る和服草履が外を向き
一枚の絵から抜け出す京言葉
大臣が和服を見せる日のゆとり
抜け出して騙されに行く恋の道
刑務所を抜けると浮世の風が吹き
過保護からまだ抜け出せぬイヤリング
時事放談和服と和服の着流しで
抜け出した声が児童公園にいる
元旦を旦那にさせている和服
抜け出してからが本当の闘いか
初釜へ人形のように着替える
草餅にお茶入れ替える黄八丈
マンネリを抜け出す春の彩を選ぶ
抜け出すと地球が碧く見えてくる

有 形水 入仙 晴風 麗水 亜成 野生 度 亜也子 一念 右近 あいき 圭介 三郎 琴音 一途 鉦平 光夫 英子 静歩 シマ子 亜鈍 鼓城 博泉 柳宏子 かすみ 冬葉 一江 紫香

合同句集「ふうもん」

発刊記念川柳大会

皆様のご支援のおかげをもちまして、
我々の国鉄鳥取川柳会も、ようやく十年
を迎える事ができました。このたび会員、
相計らって合同句集を発刊することに致
しましたので、ご無理を申し上げますが、
よろしくお願ひ致します。

日時 昭和58年5月3日(祭)9時開場
会場 ナショナル会館二階大ホール
鳥取市水栗温泉一九九三―4141
鳥取駅より徒歩3分

兼題 「国鉄」(謝選) 両川洋々選
「風」(広島) 八島白龍選
「紋」(鳥取) 河村日満選
「ますます」(大阪) 土田欣之選
「人」(米子) 八木千代選
「若い」(岡山) 木下草風選

席題 当日二題発表 各題二句吐
投句メ切り11時厳守

会費 三〇〇〇円(句集「ふうもん」
一冊進呈・作品集・軽食呈)
投句五〇〇円(作品集進呈・投
句メ切り4月末日・切手又は小
為替希望)

懇親宴 会費一五〇〇円
千689-1鳥取市東大路六四
両川洋々方 合同句集「ふうも
ん」発刊記念川柳大会宛

呈賞 総合十位まで(出席者)
主催 国鉄鳥取ふうもん川柳会

小西無鬼句集「草鞋酒」刊行記念

本社五月句会

日時 五月七日(土) 午後六時
会場 なにわ会館

天王寺区石ヶ辻町19-12
地下鉄谷町九丁目・近鉄上本町下車東南
電話 06・772・1441番

おはなし

兼題

「内助」
「髭」
「少年」
「晩酌」

若柳潮花
小西富士子選
遠山可住選
橘高薫風選
正本水客選

席題 二題 当日発表
会費 千五百円(句集呈)

各題三句以内厳守

★投句は柳箋に一葉一題、郵券200円同封のこと。

川柳塔社

6月の兼題

「だんご」
「鈍

「見込み」
「嘘

阿達義雄著

江戸川柳経済志

物価・遊里編

定価 七〇〇円

発行所 川柳文芸学会

新津市本町四丁目一四一〇

振替 新潟 三一六五〇

募集

六月号発表 (4月15日締切)

川柳塔(10句) 西尾 栗選
水煙抄(10句) 黒川 紫選
愛染帖(3句) 橘高 薫風選
課題吟(各題5句以内)

「坂」 香川 酔々選

「化粧」 森田 カズエ選

「標的」 遠山 可住選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限りません。

★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

七月号発表 (5月15日締切)

川柳塔(10句) 西尾 栗選
水煙抄(10句) 黒川 紫選
愛染帖(3句) 橘高 薫風選
課題吟(各題5句以内)

「自信」 山本 規不風選

「愛」 八木 千代選

「誘う」 吉岡 美房選

★愛染帖・課題吟へは同人・誌友を限らず。

★用紙は川柳塔社柳箋をご利用ください。

4月の常任理事会は1日(金)

定価 五百円(送料50円)

半年分 三千二百円(送料共)
一年分 六千三百円(送料共)

昭和五十八年三月二十五日印刷
昭和五十八年四月一日発行

編集兼 中島 蓬太郎
印刷所 藤原 童心社

〒545 大阪市阿倍野区三好町二一〇一六
ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話 (六六)元一六九一四番
振替口座大阪・三三三六八番

編集後記

☆喜びと悲しみが無い人生にうち寄せてくるのが人生なら、「花も嵐も踏み越えて行くのも川柳人生であろう」。

☆西尾葉主幹の作品集が構造社出版から発行になった。川柳全集シリーズの中の一冊で、これで六大家をはじめ現在活躍中の川柳社主幹級の作品集が十五冊揃うことになる。一般の社会へ川柳を理解して頂くには格好の本であろう。

☆浜田久米雄氏の訃報が届いたのは三月号の校正中であった。入院加療中の記事を書き去るに及ばぬ淋しさを味わったわけだが、今月号では故人と縁の深い同人諸氏に哀悼の辞を書いた。眞いた。麻生路郎一辺倒の眞骨を持ってもらえ、そう言えれば丁髷を頭にのせると似つかわしく思える晩年の風貌であった。

☆愛染帖の全没者が五十名以上、一路集の各題への投句も同様に陽の目を見ない

作品があり、多くの選者に辛い思いをして頂いている。☆葉主幹のお祝いの会には柳友お誘い合わせの上、ご出席お願いします。(薫)

★阿川弘之氏の著作に「論語知らずの論語読み」というのがあります。阿川氏は、CMにも登場されますから御存知の方も多いでしょう。この本は、論語の言葉をダシにしたその日その日の随想だと著者は言っています。古典のおもしろい見方の一つでしょう。ところで論語の中に、こんな言葉があります。「子曰く、君子は器ならず」。簡単に言えば、学者(専門家)は器用貧乏であってはならないと言っていることなのでしょう。

川柳に我田引水してみると川柳専門屋、川柳技術屋であつてはならぬようにも言えそうです。

川柳人であるということと同時に、広い教養、人文・自然そんな一般的な知識もそなえなさいと言ふことなのでしょいか。また、その前に人間であることが必

要なのだと云つてるようにもとれます。詳しく論語を研究したわけではないのですから、阿川氏のいう「論語知らずの論語読み」ということになりそうです。先日、「平城」という句会で「器」という兼題で往生しました。(酔)

▼前月号で史好氏がマッチのことを書いた。私にもマッパチについての想い出がある。学校を出て奉公に出されることとなった。父が私に書いた「何になりたいたい」と「絵かきになりたいたい」と即座に答えた。父が黙つていと長兄が「京都に友禪の絵かきもあることだし」私の心は穏やかでない。そんな安物の絵かきであるものかと、口に出さなかつたがその時ハッキリと絵かきになる決心をした。父は職業安定所で修行先を聞いて来た。柳行李一個を背負つて父と一緒に芦屋の絵かきを訪ねた。応接間には完成された絵や描きかけのキャンパスが所狭しと置いてある。これは確かに安物の絵

かきでない。眼光鋭い白髪

の老人が現われ「昨日書生が来たので」と断られた。今更、父も私も行く当も無い。重い行李を担いで電車に乗った。私には初めての家だが遠縁らしい立派な邸に着いた。そこが機織で財を成したS家だった。それは前元紋太氏の「歩行者は私だけ橋の名は明治橋」の東映にあった。(き)

☆春とはいえ、まだ風の冷たい一日、万博記念公園を訪れた。国立民族学博物館を見るのが目的、ウィークデーで千里中央からのバスはすいていた。

☆万博から、もう十三年経ち、あたりの景観はすっかり変つてゐる。シンボル太陽の塔も当然古ぼけてしまつたが、なぜかあの塔の人なつて顔は年と共にやさしさを増すようだ。

☆人間は本当に賢くなつて

供してくれる仕掛け。アベックで見られるようになってるのが嬉しい。

☆これという理由もなく、私が選んだのは「瓶による漁法」。千年以上前からツロモン群島で行われている原始的漁法であるが、椰子の葉で作られる大きな瓶の形が、何と超音速ジェット機の三角後退翼にそっくりなのである。

☆民族学博物館にはビデオテープというのがある。予め用意された大量の民族学の資料の中からお客が選択したものをご覧いただけます。武田薬品工業株式会社 平541 大阪市東区道修町2-27

肉体疲労時のVB₁₂補給に—— アリナミン[®]A

アリナミンA25の効能—肉体疲労時・病中病後・妊娠授乳期のビタミンB₁₂補給、神経痛・腰痛・筋肉痛・肩こりの緩和、脚気。☆説明書をよく読んで正しくお使いください。☆くわしくは医師、薬剤師、薬局、薬店にご相談ください。



武田薬品工業株式会社 平541 大阪市東区道修町2-27

この夏、おいしさひとりにじめ……

アイスクャンデー

宇治金時・あずき・チョコ・ミルク・パイン



高島屋 そごう 松坂屋 阪神 ドーজカ店
 近鉄(アベノ・土六・奈良・東大阪・京都各店)
 サン・ストア(中之島・淀屋橋各店)
 京阪モール 新川売店 虹のまち店
 泉北高島屋 南海難波駅構店
 国鉄大阪駅店
 大 阪・な ん ば



TEL (641) 0551

菊正宗

料理がいきる
 辛口の本格派



生酏辛口

きもとからくち



菊正宗

神戸・灘
 菊正宗酒造株式会社